657-176
1200501571700
57
176

此君園主人著

盆栽流行史

附 各種培養繁殖法

立命館出版部

帝國圖書館藏

とII34-21

帝國圖書館藏

此君園主人著

盆栽流行史

附各種培養繁殖法

立命館出版部

昭和九．六．一九．内交．帝圖

657-176

緒言

明治維新は惟に政體文物の改革に止まらず一般の觀賞物たる盆養植物の上にも亦其影響を及ぼせること頗る大なり舊來の盆養物たる蛸造り篠造り咲分け等の如く加工の形式を其儘現はしたるものは總て一掃され之に代ふるに專ら自然の風趣を一盆中に觀るべきものを歡迎するに至れり一例を擧ぐれば一個の盆松も蒼幹蟠屈溪畔に偃蹇せる老松の如く又亭々として嶺頭に立てる千歳の古松を徑尺の盆裡に栽ゑたる觀有らしめ又扁平なる瓦盆に數本寄植としたる槭樹は觀者をして楓林中に逍遙する思ひ有らしむ此の如く文人盆栽は人工を加へたる痕跡を留めざるに重きを置けり盆養物に於ける此の變化は觀賞者の趣味の向上に一段の進歩を加へたりとして讃美するも敢て過賞に非るべし

最近菊朝顏の如きも成るべく自然に近き造り方流行し大菊の如き稍造花的の嫌有るものよりは野趣饒き小菊を愛し又朝顏の如き專ら切込栽培即ち盆栽式栽培の廣く行は

るゝ等皆其の主眼とする所は自然の二字に在るを知るべし。

萬年青と蘭の變種卽ち葉變りものも今猶ほ廣く培養せらるゝを見る蓋し江戸時代文化文政の頃盛んに流行せる斑物卽ち草木の葉に縞又は斑點有るものを專ら珍賞したる遺風より來れるものにして其の根據地は名古屋地方に在りて東は靜岡縣西は岐阜京都大阪より九州の一部に及べるが如し又最近新潟縣には春蘭の變種を培養すること盛んに流行せりと聞く前に述べたる文人盆栽卽ち自然趣味を愛するものを假りに新派と稱するとせば此の葉變りもの栽培は舊派に屬するものと云ふ可きか。

現今流行する葉變りの蘭は支那種にして支那は古來蘭を觀賞し從つて其の變種も頗る多し然れども彼邦の變種として珍賞するもの花に在りて葉に非ず高雅なる香氣を愛重するも我邦の一部培養家の如く蘭の花香を等閑視して單に葉にのみ重きを置くは頗る異樣の感有り花卉其他の盆養物は生ける美術品にして吾人が煩累に堪へざるとき一盆の花に對し「おゝ能く咲いたと」聲を發するときは胸中の忿懣一時に煙散霧消し仰いで青天を見るが如し此の如く花卉盆養物は能く人の心機を一轉し情緒を移易せしむるの德を備へたるものと謂ふ可きなり

要するに花卉盆栽の流行は昇平の餘澤にして國家の危急人心恟々たる時誰か復花草を顧みる暇有んや然らば吾人は園藝物を愛觀すると同時に益す國運の隆盛に心を盡さゞる可らず一言以て卷首に冕す

此君園主人識す

凡例

一、本書盆栽の名を冠するも世間に慣用せる一部の盆養物を指して云へるが如き狹義の意味に非ず單に鉢植の二字を漢譯せるものにて花卉と竹木とを擇ばず總ての盆養物を包含し頗る廣汎の意義に用ひたるなり

又流行の字を用ひたるは何れの時代に如何なる花草が一般に歡迎されしかを知るの便に供したるに過ぎず各種植物の培養繁殖等に就ては務めて詳細に記述したれば各篇を通じて一部園藝書と云ふも敢て過稱に非る可し

一、蘭と萬年青は專門家の競爭に因り一の原種より數十の葉變りものを出せること敢て珍しとせず此等の變種を漏れ無く記載するは本書の如き各般に亘れるものゝ堪へ得る所に非ず本書の趣意は蘭萬年青の培養を試みんとする者又既に試みつゝ有る者に對し現今最も廣く世に行はるゝ所の栽培法を紹介するを以て主眼とす總て變種は原種に比して其の性分の尫弱なるを普通とすれば相當熟練の手腕有る者も其の培

養に就て苦心すること往々有り初心者は先づ原種の培養に慣熟し然る後に變種に著手せば萬遺策無る可し

一、江戸時代の流行盆養物に猶ほ卷柏天鵞絨蘭岩欽深山鶉等有り蓋し一部人士間の流行にして其の期間も長からざりしが如し因つて本書は此等流行物の記載をすべて割愛することゝせり

一、本書中菊朝顏の培養法に就ては目下金澤市に退隱せらるゝ畏友平野農學士の教示を受くること頗る多し同氏は現今北陸地方に於ける斯道の牛耳を執らるゝ多年の實驗家なり謹んで此に其厚意を謝す

一、各種の培養法に就ては各專門家の説を擧げ之に余の慣用せる方法を參酌し簡易にして有效ならんことを期したり然れども猶盡さざる所多々有る可し切に專門家の教示を俟つ

編者識す

盆栽流行史

目次

第一篇

第一章　江戸時代の流行……三

(一)　立花、(百兩金)……三

種類　培養と繁殖法　害蟲驅除

(二)　松葉蘭……一〇

種類　培養と繁殖法　鼠害防禦法

(三)　石菖……一七

種類　石付石菖

第二章　江戸時代の流行後現今猶ほ其の聲價を墜さゞるもの……二二

萬年青

萬年青の原種と其の產地　明治二十八年第四回勸業博覽會にて明治天皇御買上になり給へる萬年青於多福の賛　萬年青の系統、葉の分類法　小萬年青　繁殖と培養

第二篇

第一章　明治維新初期より現今に至る盆養花卉流行の變遷……六五

（一）　文人盆栽……六五

江戸時代の鉢物の衰廢　文人盆栽の勃興　遠州松　明治年間東京に於ける著名の盆栽家　文人盆栽に淺き鉢を用ひることに就て　支那古代の盆栽　盆景

（二）　薔薇（ローズ）……七五

支那唐代に於ける薔薇の詩　種類　繁殖法　挿木　接木

（三）　仙人掌……八三

產地　種類　繁殖法

（四）　紫金牛……九一

種類　繁殖法　培養法

（五）　皐月（杜鵑花）……九五

皐月と躑躅と映山紅との區別　繁殖法　肥料　害蟲驅除　鉢の選び方　種類

第二章　時代に拘らず流行に變りなきもの……一一八

朝顏

朝顏の來歷と其の詩歌　江戸時代流行の朝顏　明治初年より現今に至る朝顏流行の變遷

播種　移植　摘芽　切込栽培（盆栽作り）　行燈作り　二番花　三番花

養土と肥料　施肥の時期と回數　挿芽　呼採　切接　甘藷を臺木とせる朝顏　種子の採取

第三篇

時代の流行を超越せる花卉盆養物……一四七

花物にて　梅　牡丹　芍藥　菊　葉物にて　松　椶櫚竹　蘇鐵　諸種の竹　花葉共に觀賞すべきもの　蘭（支那種の蘭）

梅……一四七

種類　山臺の梅　現今の盆梅

牡丹……一五五

種類　繁殖法　培養法　野津將軍と牡丹

芍藥……一六二

種類　繁殖法　培養法

菊……一六五

菊に就ての詩歌　種類　往時と現今と菊の鑑賞に於ける相違　小菊の種類　大作用　中作用　小作用　養土の造り方　肥料土　施肥の分量と其の回數　肥土と植土　繁殖法　花粉　媒合法　根分　挿芽　穗接　摘芽と摘心　害蟲驅除　黒銹白銹の豫防法　菊人形

松……一九九

種類　接木　鹿島松　播種　移植　用土と肥料　支那の千歳松

椶櫚竹……二〇七

種類　觀音竹　移植と培養

蘇鐵……二一〇

種類　培養法
唐椶櫚
竹……………………………………二三
種類　孟宗竹に就ての逸話
蘭　支那種……………………………二六
春蘭　一莖九花　甌蘭　建蘭　漳蘭　素心蘭　報歳
蘭　大明蘭　金稜邊　寒蘭各種　魚魫蘭　馬耳蘭　風
蘭　石斛蘭　那護蘭　胡蝶蘭　蘭の繁殖と培養法　蘭
に就ての逸話

目次終り

第一篇

帝國圖書館藏

第一章　江戸時代の流行

一　立花　（百兩金）

タチバナは唐橘の略名にして古くより橘の字を用ひたれども橘は柑橘の橘にて果樹類に屬し此に云ふタチバナとは全く別物なり、又一方には立花と書けるも有り當字なれども紛らはしきことなし又漢字にて百兩金と書けるは硃砂根を俗に萬兩と云ひ立花の萬兩に似寄たる所有るより百兩金と名付しものならん。

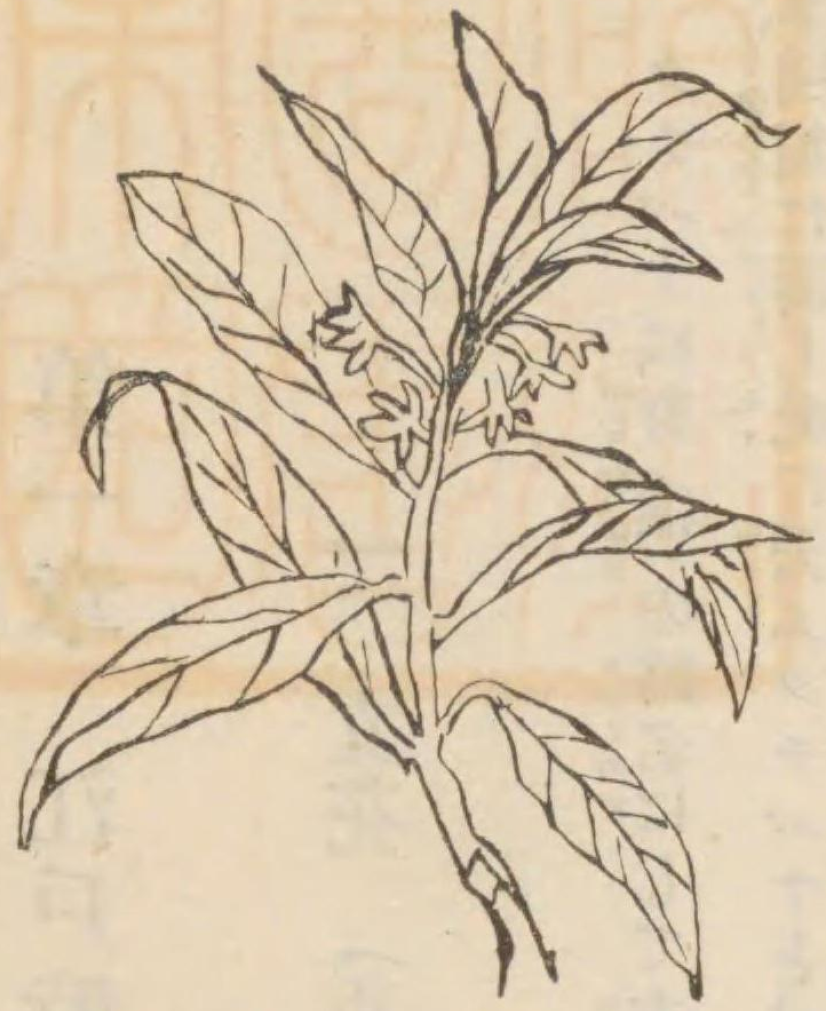
我邦には古くより橘と呼ばるゝものに花橘、唐橘、山橘等あり山橘は一に「ヤブタチバナ」ともいふ、花橘は柑橘類なれども其の花の香氣を賞するときに斯く呼び、山橘は今「ヤブカウジ」といへるものゝ雅名なり、此は猶後に說くべし植物學的に記述すれば

百兩金　紫金牛科　常緑小灌木

莖の丈一尺を越へず色青きを普通とし稀に淡紅色を帶びたるものあり。

葉は廣披針形長さ三寸より五寸に及ぶ幅一寸許り互生にして深緑色を普通とす其の質厚く緣邊に隆起せる細點有りて微鋸齒の如し。

夏日葉腋より一寸許の花梗を出し帶黃白色、先端の五裂せる小花を著く花後實を結び、秋に入り紅熟す、形南天燭に似たり又白色、帶黃色のもの有り。

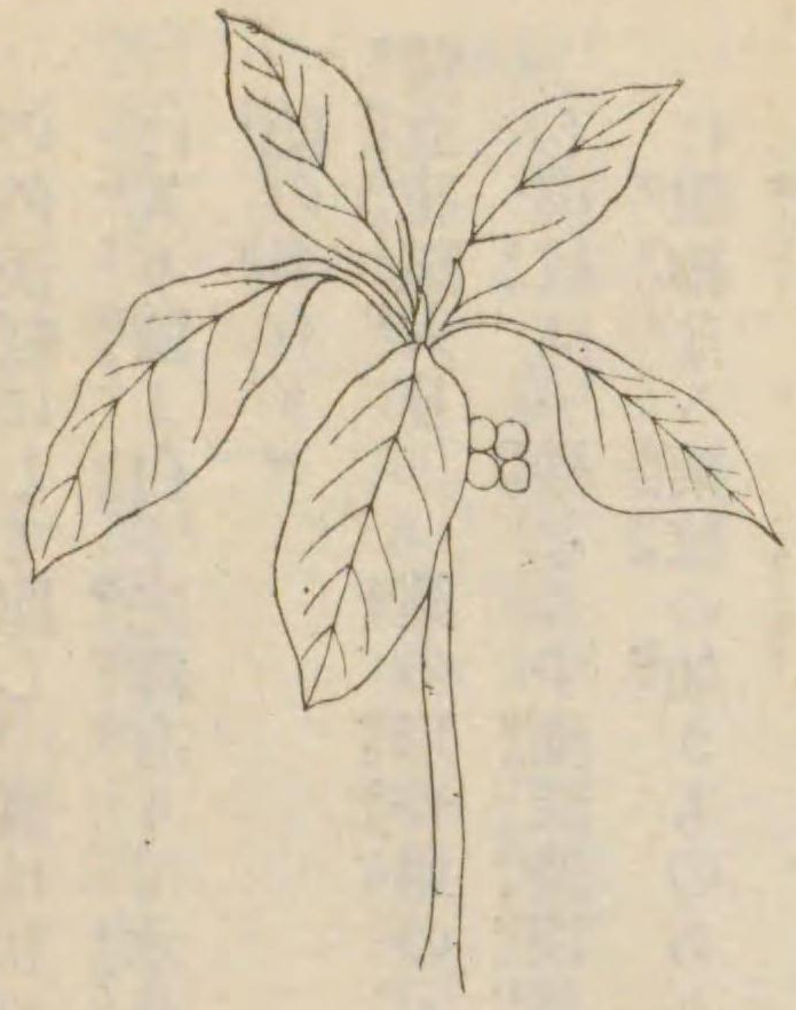


百兩金は今より百五六十年前安永より寛政享和の頃まで盛んに流行し其頃の著書にて現今帝國圖書館の特別書類として保存せらるゝものを觀るに葉變りの種類約五十種許りを載せたり因て其中より重なるものゝ圖、數種を拔萃して當時の流行を追想すべき資料の一端とす。

鳳尾　葉形細長く鳳凰の尾に似たり由つて名付く、莖の丈八九寸大なるもの、葉の長さ七八寸幅五分許り、葉の末の方曲り枝繁く出で、一様ならず葉面麗しく貴品として得難きものとせり。

第二圖　鳳尾

第三圖　輝葉



第四圖　水晶實

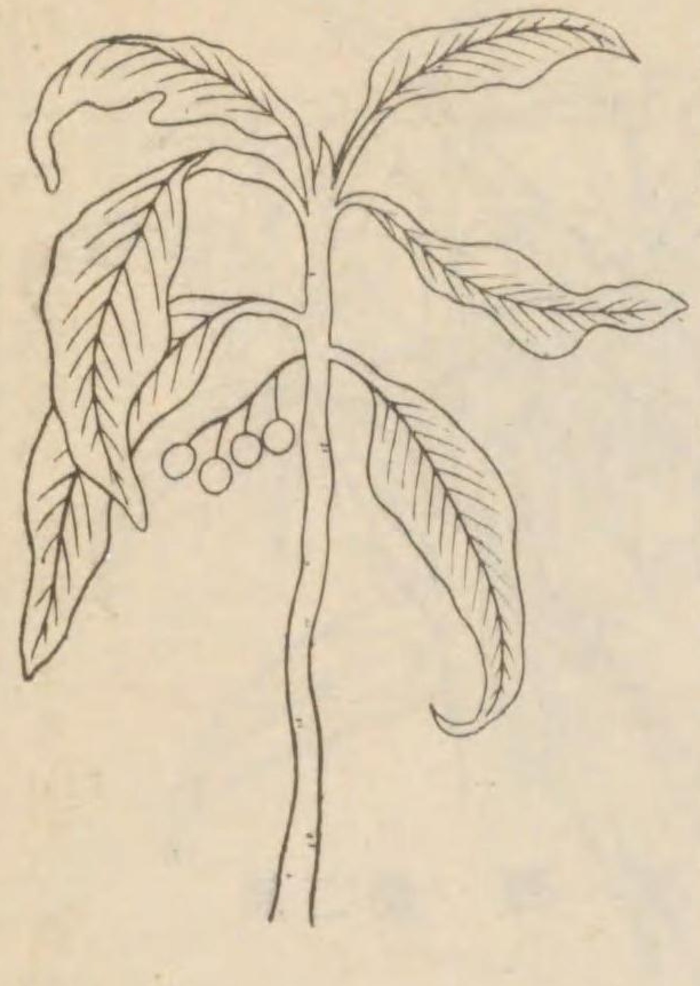
輝葉　葉の形長く濃青にして光澤極めて美なり因て輝葉と云ふ其の形一様ならず毎葉裏表に反有り葉の大小は木によりて等しからず

水晶實　葉の形長く圓み有り、色淡青、莖

の色淡紅にして麗し、實は初めより白く秋冬に入り彌よ白く光澤有りて水晶の如し、因て此の名有り。

黄立花斑入り　葉の形普通のものと變りなし斑紋は一様ならず淺深濃淡異同あり葉の縁に微細なる粟粒の如きものあり、實は初め青く晩秋に入り紅色となる。

目羅縮緬　葉の形赤黄の縮緬に似て

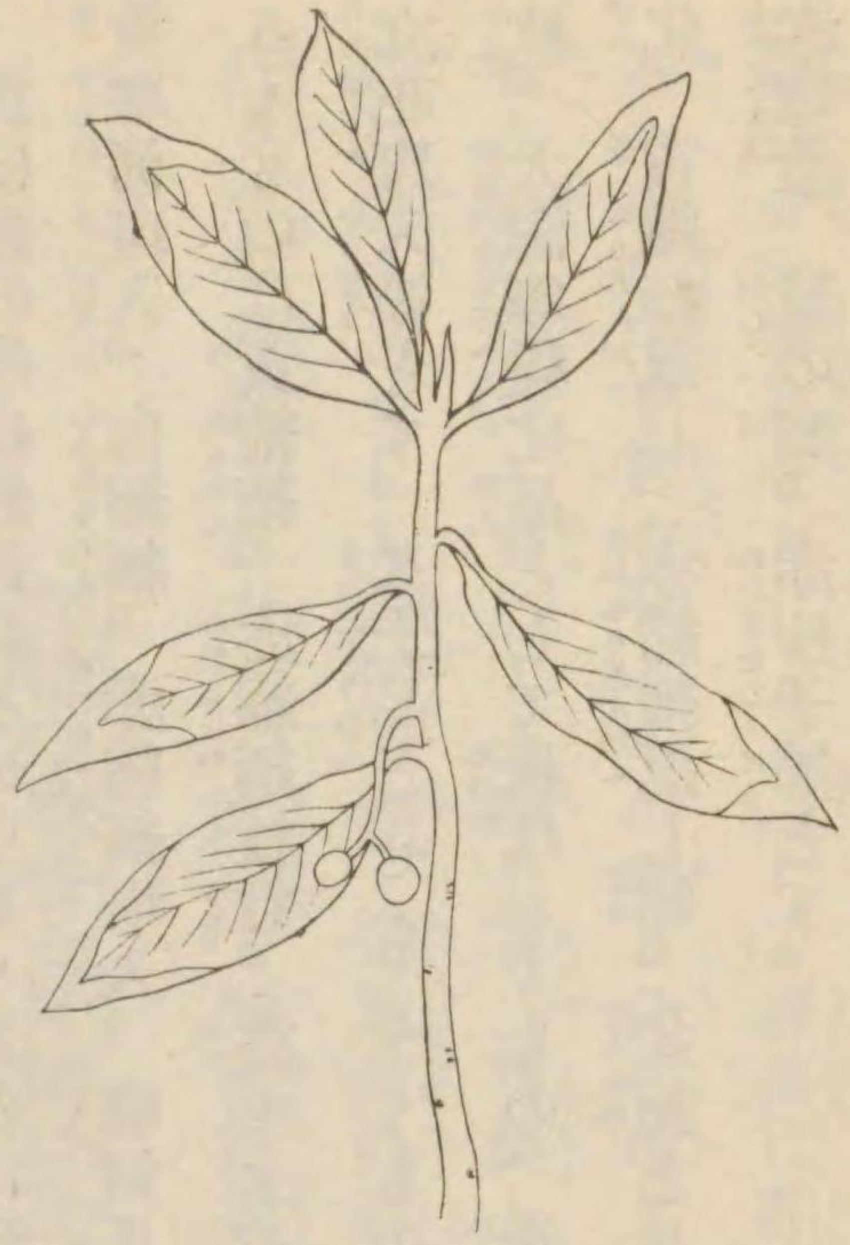


第六圖　目羅縮緬

第七圖　珊瑚樹

第五圖　黄立花斑紋

暢に、色濃青、關東より出づ實赤し。



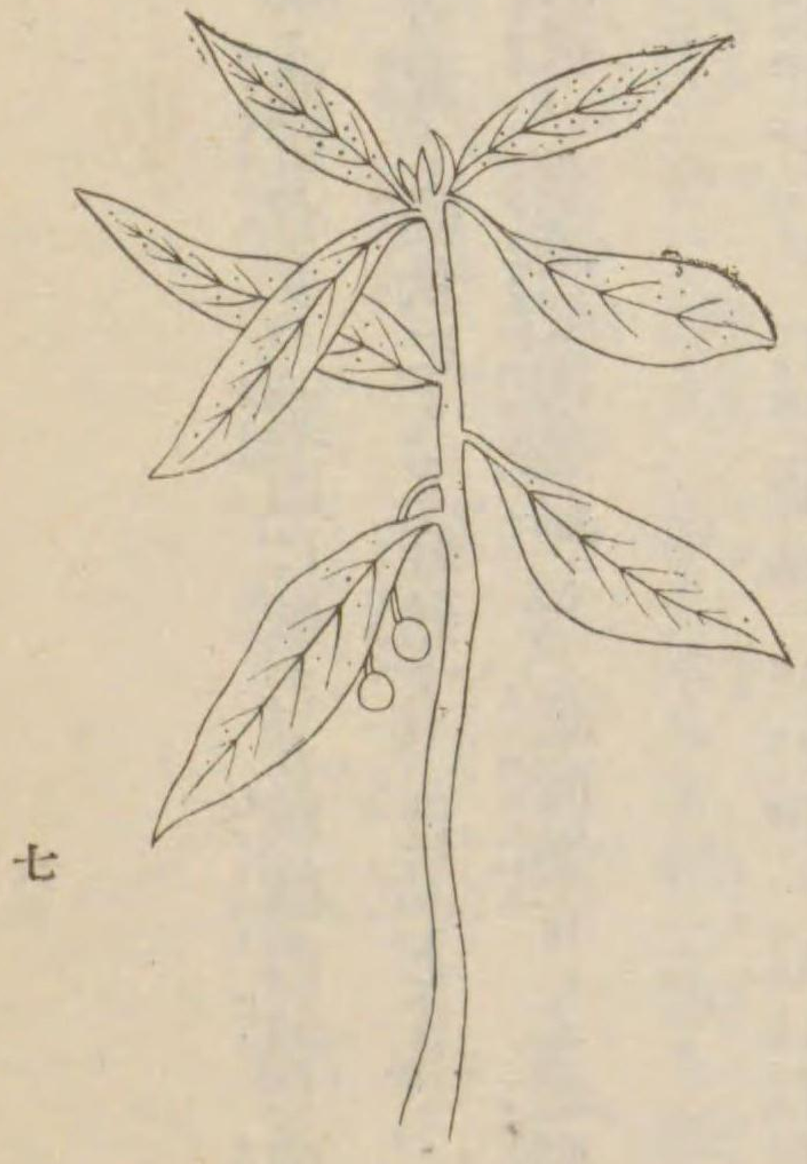
第八圖　爪白

黄沙子　葉は普通にして葉面に沙子を蒔きたるが如き斑有り實は熟すれば黄色となる。

黄縮緬枝打　葉形縮緬に同じ、樹形稍小なり枝繁く出づ、花麗し實を結ばず

珊瑚樹　葉形樹勢普通にして葉の色濃青、色極めて麗し、結べる實の珊瑚に似たるより此の名有り。

爪白　葉形普通、縁に白斑有り一様ならず、圖に示す如く縁に細く斑の入りたるあり又葉先に鋏の如く入りたるもあり、此の鋏の如き斑入を珍重す、奇麗賞すべし。



第九圖　黄沙子

關東より出づ希品なり。

多羅葉　葉の形長み有り、葉先細くして曲折有り、葉面に皺あり絨纈の如し由て此の名有り、色濃青、樹勢强し、實は初め青く晩秋に入り紅熟す、貴品とす。

駿河多羅葉　葉形多羅葉に等し、色淡青、莖淡紅樹勢弱し、葉面皺有り絨纈の如し、貴品とす。

猶ほ此の外に最貴品とせらるゝものに矮雞斑入。輝葉濁込。黄輝葉。水晶實斑入。黄駿河斑入。白縮緬。赤縮緬斑入。駿河爪白。駿河縮緬斑入等有り。猶ほ貴品と云はるゝものは黄縮緬。赤縮緬枝打。赤カシバ。白カシバ。白實輝葉。駿河斑入矮雞。黄立花斑入等とす。又上品とせらるゝもの、鷹の羽。赤縮緬。黄駿河。赤濁込。赤斑紋。大瀧等變化品として扱はるゝもの、彦根七變化。黄立花變化。目羅變化。八幡變化。黄縮緬返し。赤縮緬返し等。並物とせるもの、黄實立花。白實立花。駿河立花。赤輝葉。鷲の羽。赤沙子等とす。

以上數十種に就て品位の高下を定めたるは專ら葉の綵紋とその狀に多少變化有るに因ることは萬年青や蘭と變りなし――其の貴品と呼ばるゝものは一莖一盆にして當時數百金の賣買有りしこと決して虛誕に非ず、余の族人に宅地七百坪茅屋ながら四十坪許りの住宅を所有せるもの有り此の地と家とは先代が往時立花の流行せる頃京阪に持行き儲け得たる金にて土地を購ひ新築したるものと聞きしが大正の初めまでは依然舊態を改めざりしも幾何も無く電車道路に宅地の半を收用し、茅屋は毀されて石造の銀行支店が建設されたり、又以て時勢變遷の一面を窺ふに足るものあり。

立花の培養と其繁殖法

播種　春の彼岸に種子を卸す、養土は川沙三分に藪土（藪と限らず鬆土即ち輕き土ならば宜し粘土を忌む）七分を混せて用ふべし梅雨を過ぎれば芽を出す、露地に置き適宜に灌水すべし。葉の出たる後は乾を厭ひ濕を畏る乾けば勢を失ひ、濕に過ぎれば根を腐らす、速きは翌年花を著け遲きものは三年目位に花を著け實を結ぶ、實に紅白の二種有り。

挿木　前年伸びたる若枝又は幹を三寸位の長さに切り、鉢の中に挿込むべし養土は播種に用ひたると同じ土にて宜し季節は梅雨に入る少し前よろし日蔭に置くべし。

接木　季節は前の挿木と同じく入梅少し前を宜しとす、砧木は立花の普通のものを用ひるか又萬兩を砧木とするもよし接方は切接宜し。

害蟲驅除

貝殼蟲又シャケと云ふ蟲あり葉を傷ふことあれば「アルコール」を二十倍位の水に薄め時々柔軟なる刷毛又筆にて葉の兩面を洗ふべし。

立花の普通の種類は今も鉢植として花戸に見受ることあり、赤實と白實との二種にて葉數繁からず瀟洒なるものなり往時の如き流行を再び見ること有るや否やは今より逆睹し難し。

二　松葉蘭

松葉蘭は植物學の方にては松葉蘭科と稱して獨立し多年生の羊齒植物と云はる、異名甚だ多し長者蘭、箒蘭、竹蘭、棒蘭等の別名あり、琉球では松蘭と云ふ。

莖　は淡綠色を普通とし稀に中間白色の斑の入りたるものあり莖の中央より叉狀に分岐し、其の先端屈曲するもの少からず丈四五寸より尺餘に及べるものあり、寄生植物にて深山の老樹の腐朽せる樹皮に寄生するものと云へり。

根　地下に分岐せる根莖ありて細根なし。

葉　は鱗片狀にして極めて小く種類によりて葉の形を爲せるものを見るも葉を著けざるもの多し。

子嚢　無柄にして三室を有するも此れ亦極めて小にして分岐せる莖の左右に黄色の細粒を著けるを見るに過ぎず。

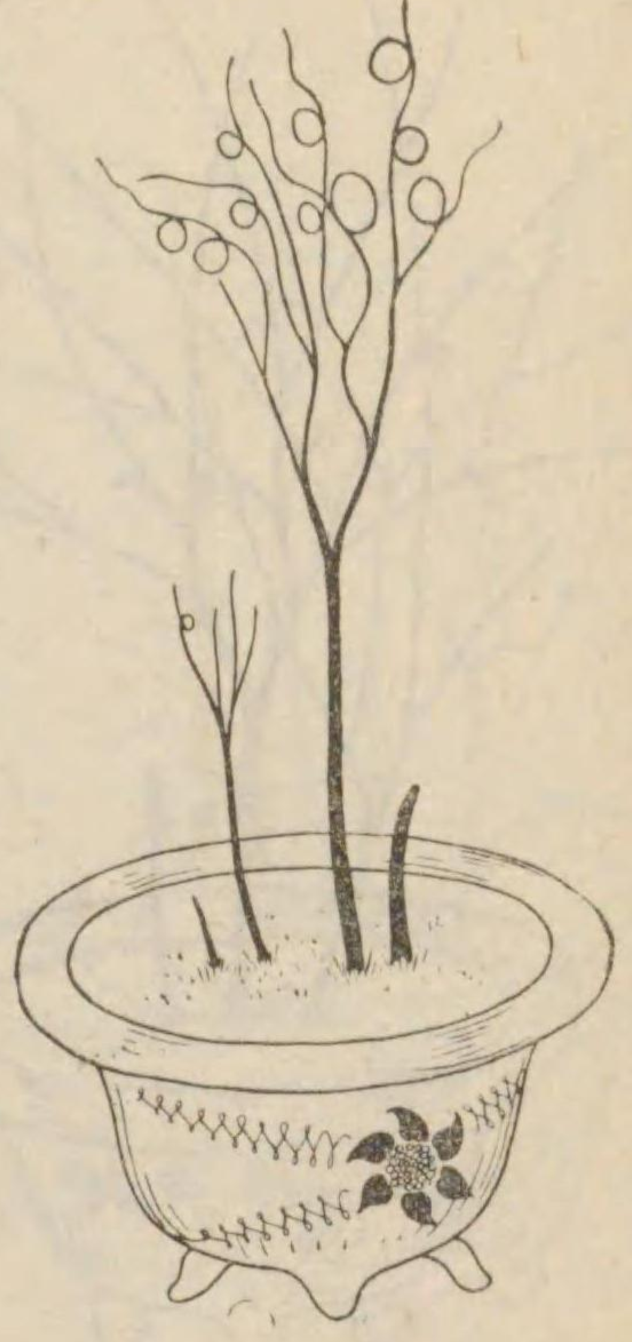
元來暖國の産にて内地の紀伊、攝津、播磨、豐前、肥後、日向、大隅、薩摩、東國にては參河、遠江、駿河、伊豆及び伊豆七島、海外にて琉球諸島に産すと云ふ。

松葉蘭の流行は百兩金流行の後を受け文化文政の頃より天保弘化に至り流行最も盛

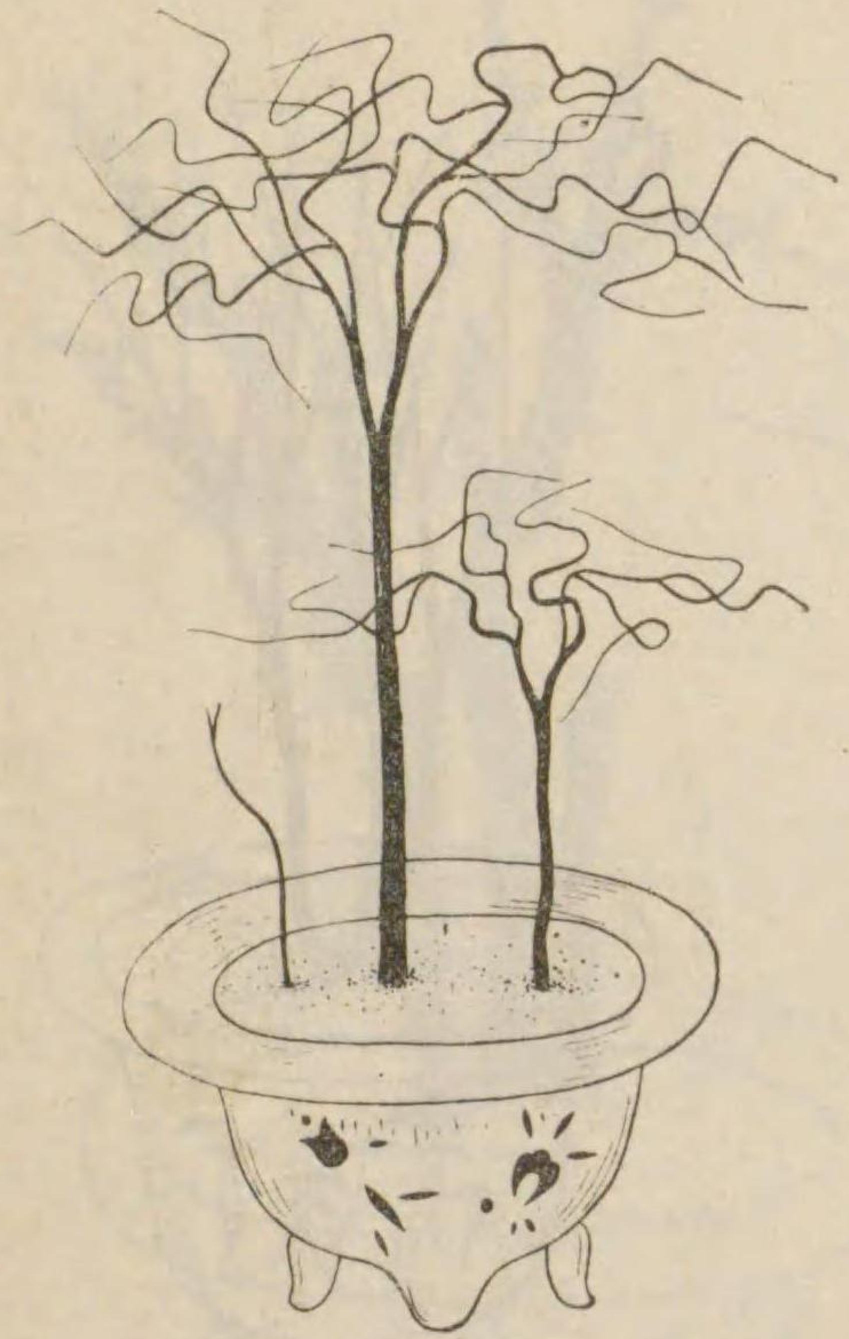
んなりしと見え其の著書も世に多く出で、彼の續武將感狀記の著者として世に知られたる栗原信充氏が松葉蘭百二十餘種を寫生したるものを帝國圖書館にて見たり栗原氏は幕臣なれども當時島津侯の知遇を得て鹿兒島に下りしことも度々有りしと聞く。故老の話に天保の頃上野輪王寺宮のお買上になりし折鶴は一鉢數本立にて百五十兩なりしと云へり當時の百五十兩は一枚の目方一兩（四匁）の小判百五十枚なれば現今の金額に換算すれば其の莫大なるに驚かざるを得ず。

第十一圖　雲龍獅子

數十年間斯く世の盛寵を極めたる松葉蘭も今は世に其の名を知る人すら幾んと無きほどに廢るゝに至れり榮枯盛衰は惟に人生の上のみに非ず非情の草木も亦免れざるか或人の說に最近松葉蘭の培養に趣味を有つ者現は



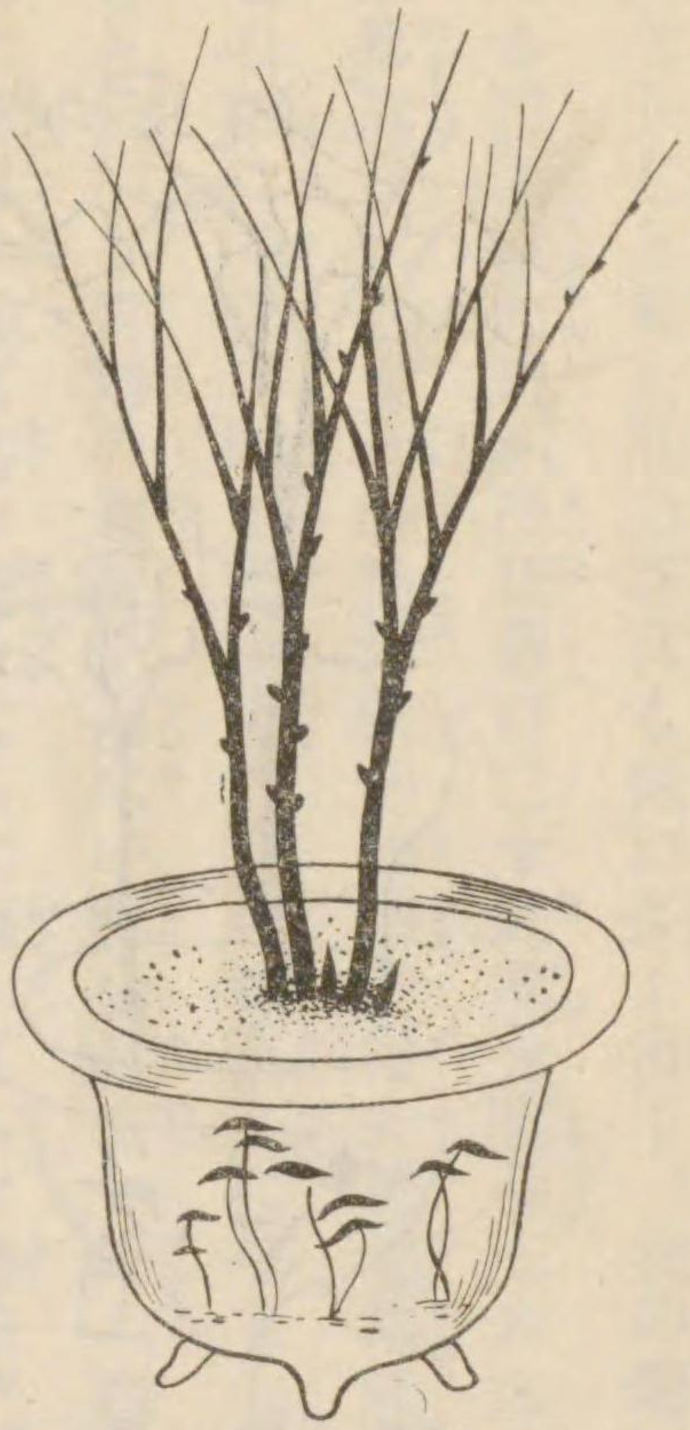
第十二圖　玉縮緬



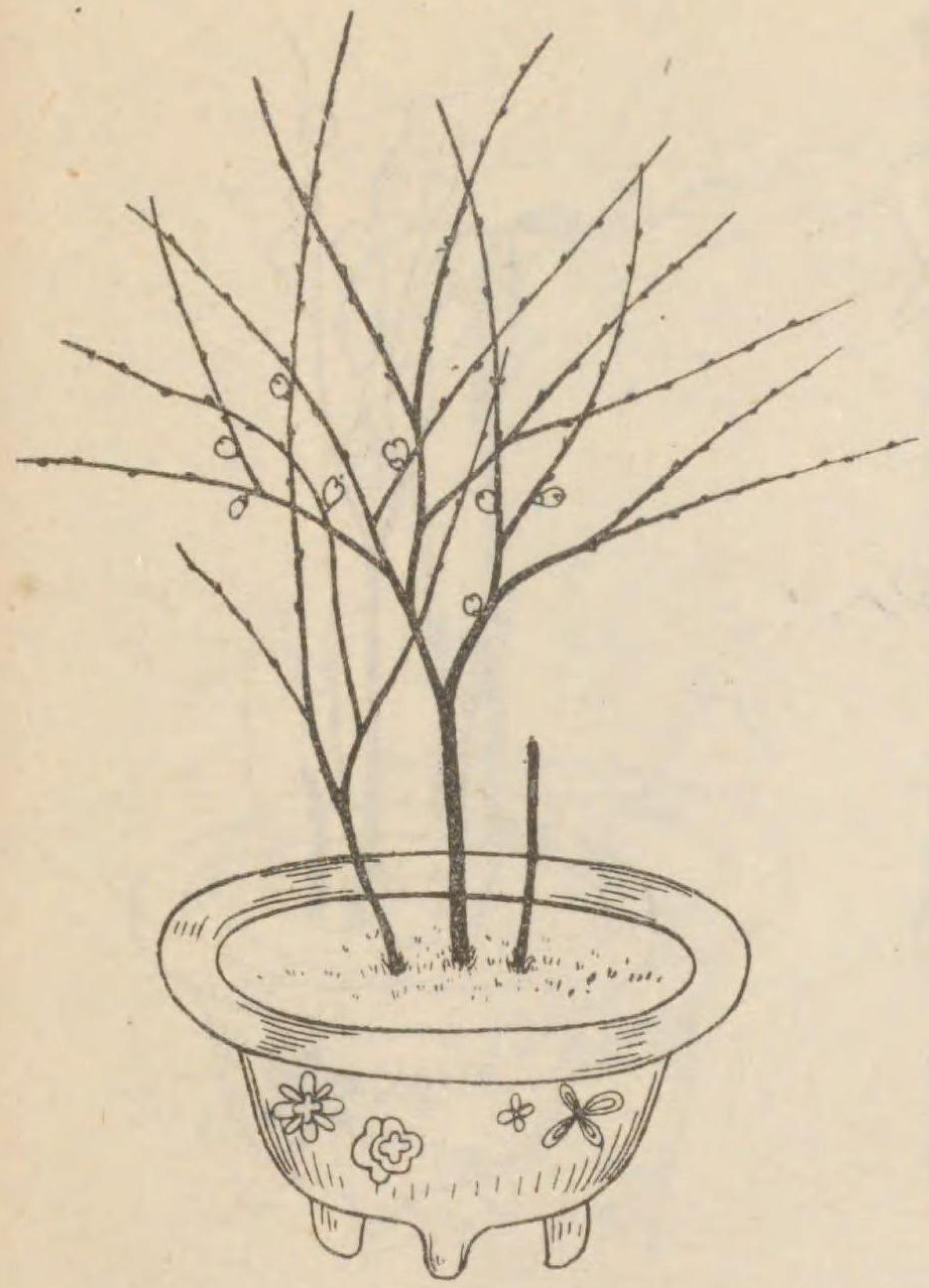
第十三圖　折鶴

るゝに至れりといふ、明治初年まで猶ほ松葉蘭を盆養せる花戶の有りしを見たり次に往時流行したるもの丶中より其の名高きもの數種の圖を轉寫し其の餘は名稱のみを揭ぐることゝせり。

雲龍獅子　上阪縮緬
玉光縮緬　玉獅子
新玉縮緬　鳳凰縮緬
玉縮緬　七寶縮緬
麒麟角　楊枝縮緬
玉鳳縮緬　文治縮緬
喜盛縮緬　雲龍縮緬

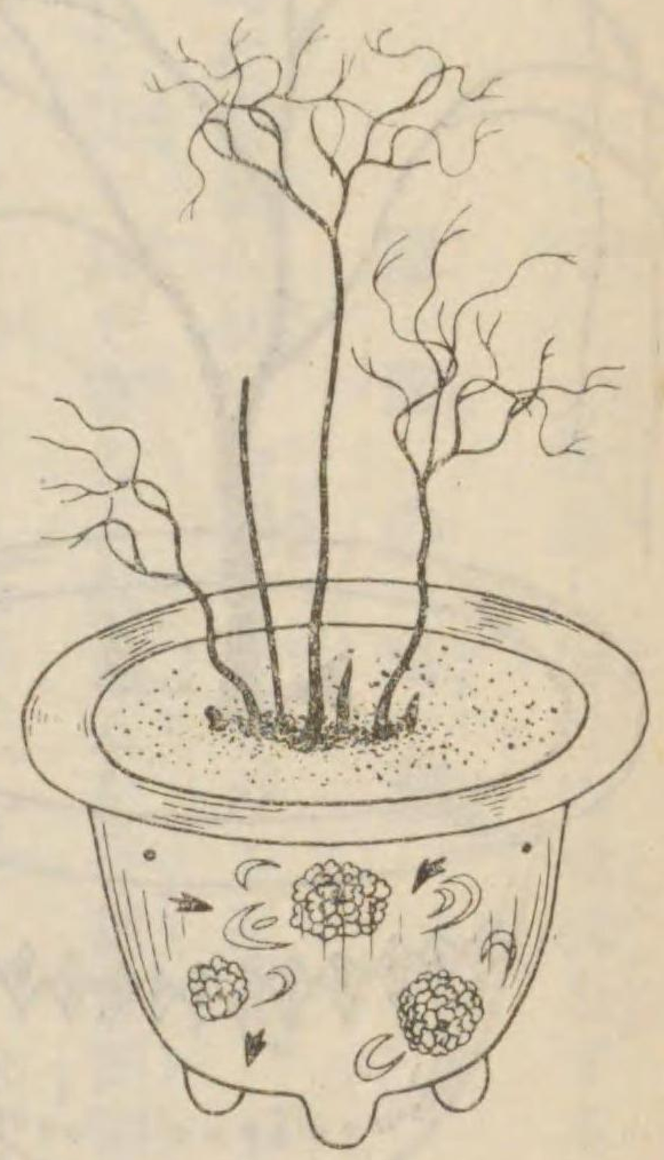


第十四圖 柴卯髭棒



第十五圖 梅咲カヽリ

折鶴　富士の雪
タドンヤ髭　玉折笠
萬代笠　夜叉縮緬
太郎斑　青珊瑚
朝妻縮緬　錦絲折鶴
錦絲玉鶴　玉麒麟
橋本捻れ　美髯縮緬
碇手金明　捻金明
玉華金明　燕尾
梅咲かゝり　文樓斑
友白髮　髭棒
眞大捻　勇獅子
青柳縮緬　鳳凰柳



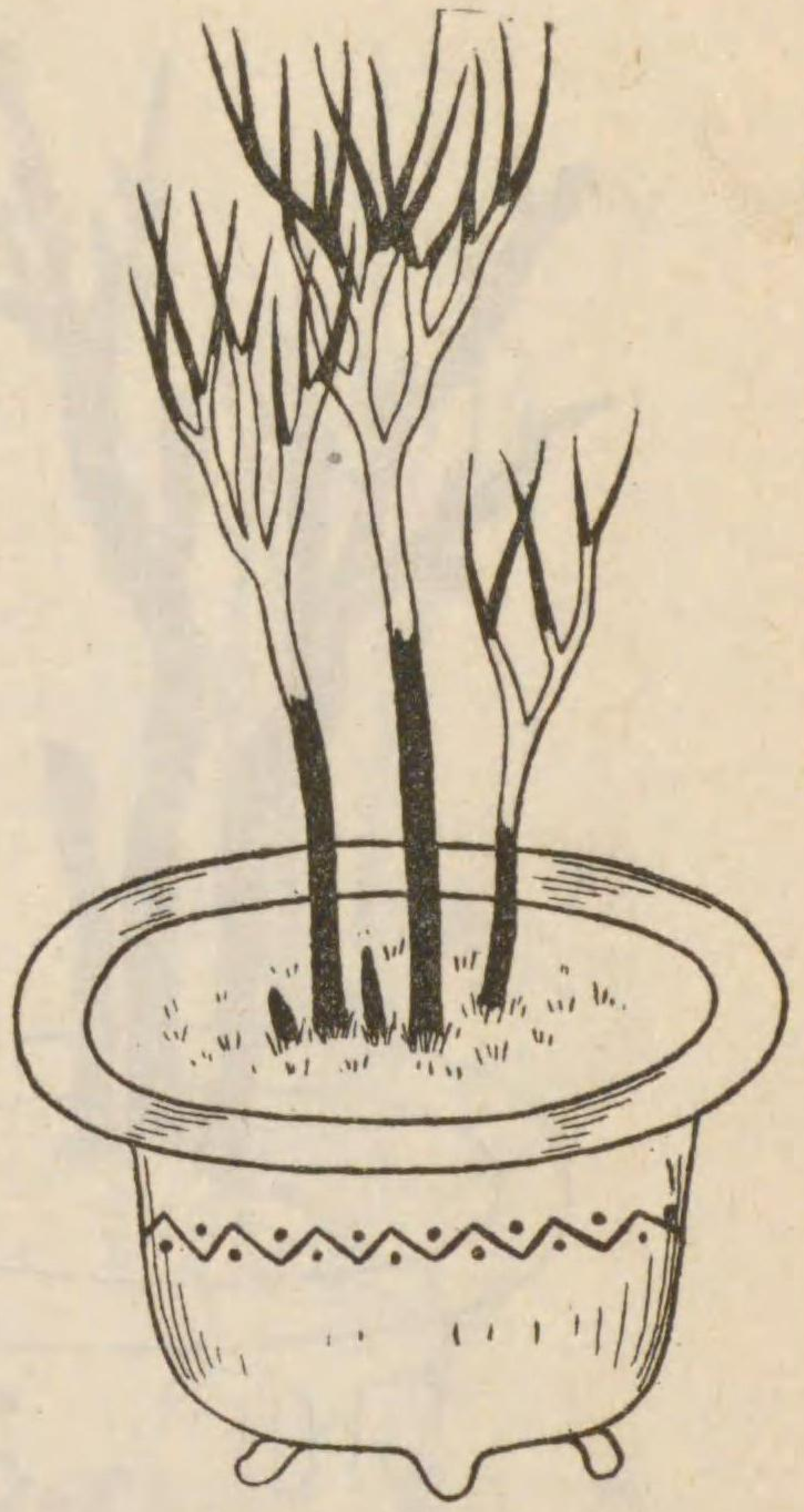
第十六圖 玉鳳縮緬

久保斑　柴卯髭

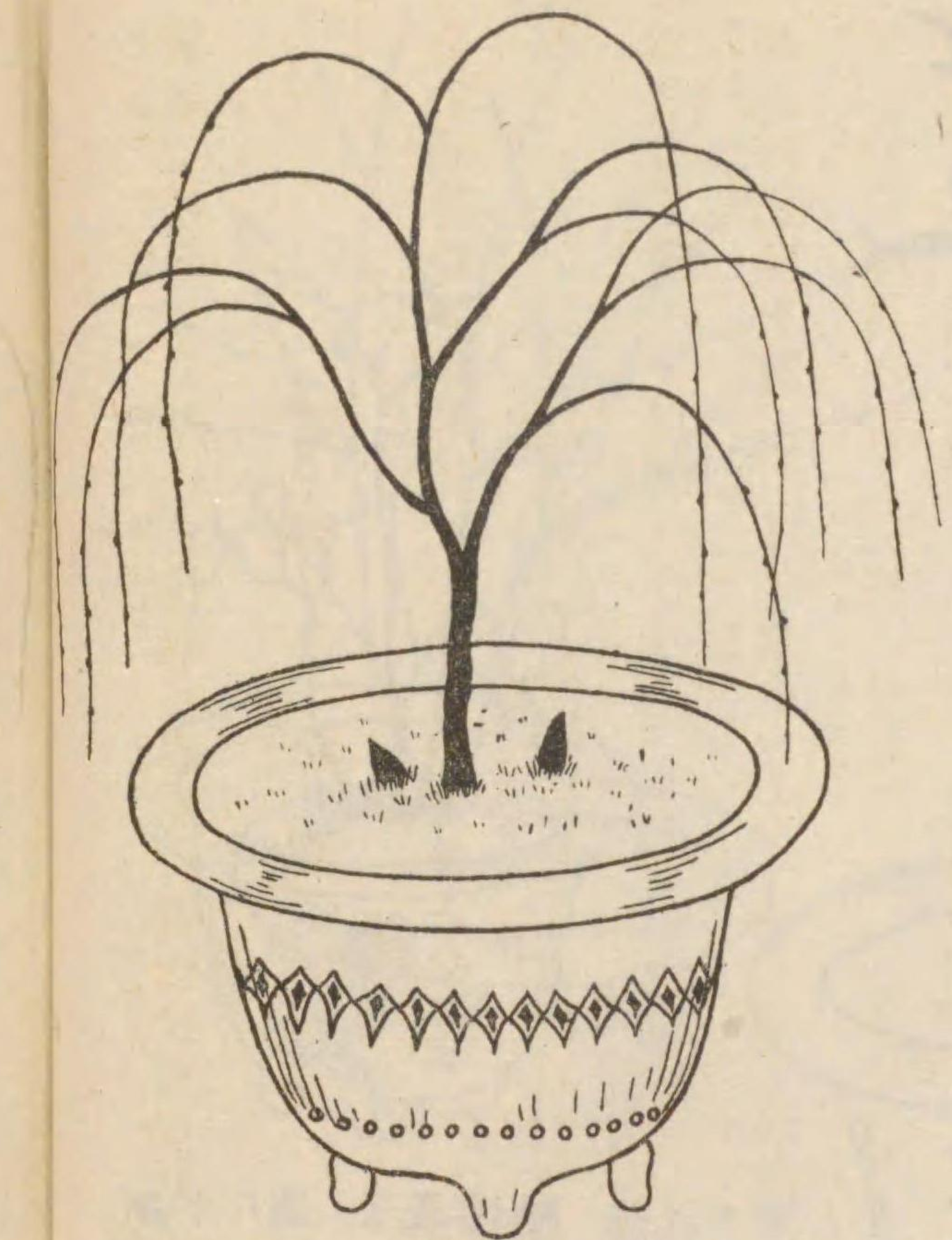
松葉蘭の變種は今は世間に多く見當らざるも自生のものは暖國の山中には相當に有りと云へり近年變種を培養するもの相應に多しとのことなり、左に培養法と繁殖法に就て其の大略を述ぶべし。

養土としては現今は彼の鹿沼土適當なるべし此の土の粉末と塊りとを

第十七圖 麒麟角



第十八圖　文樓斑



第十九圖　鳳凰柳

篩ひ去り米粒ほどの大きさのものを用ひるを宜しとす鉢の底には木炭の碎けを布くべし元産は樹上に寄生するものにて其の性强きも惟寒氣に傷み易ければ冬期は溫室又は室内に圍ひ置くべし。

肥料に往時何を用ひしか聞き及ばざるも薄く溶解たる油粕を春初より時々灌がば生育宜しく葉の光澤も良し。

繁殖は根分より外に方法無し春分の頃株分するを宜しとす。

鼠害の防禦

余の幼時松葉蘭の鉢に金網を被せたるを見、不思議に思ひ之を尋ねたるに夜間鼠に咬るゝことを防ぐ爲で有ると話せるを今猶ほ記憶せり鼠類の惡戯か又眞に松葉蘭を好けるにや其處までは問はざりし。

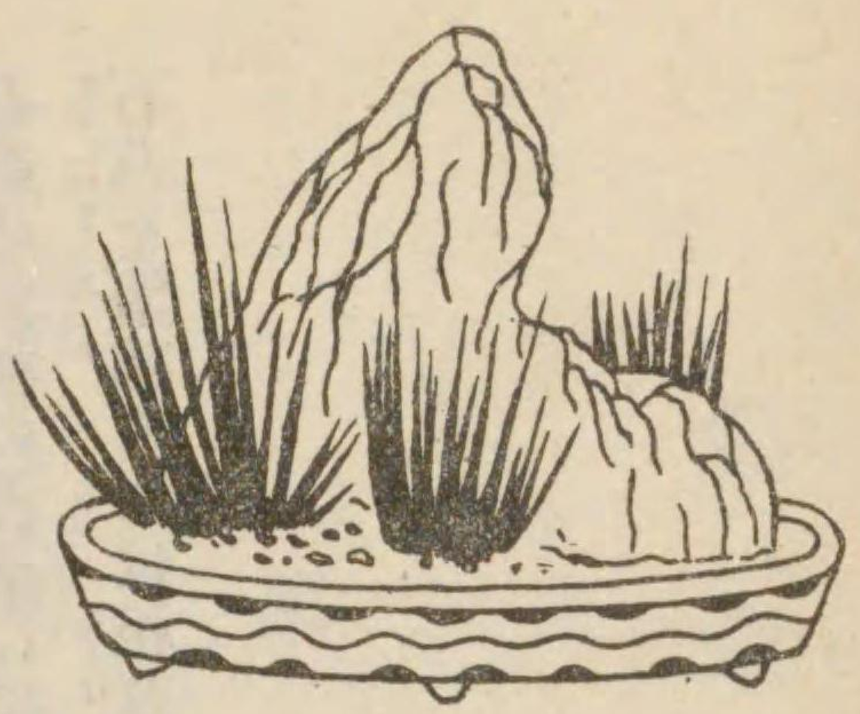
最近松葉蘭を賞觀する者少なからずと見え各處の花戸に見受ること有り今より六十年も前には萬年青と同樣に愛觀されしも其の後全く顧る者も無りしが復擡頭し始めたり流行は必ず繰返すと云へる諺の妄言ならざるを知れり。

三　石菖

石付の石菖は江戸時代より維新後まで廣く愛玩されたるものなるも今は全く其の影を潛めたり石は普通赤間石。加茂川石。鞍馬。其他水晶或は支那の大湖石等——自

然に形好き生石を用ひ、此の石の半面に石菖を附著せしめ其の細根の石の皺に食込み年を經るに從ひ、岩石に根を張り石と石菖と能く馴染み瀟洒な趣を生ずるので有る初め石に石菖を植付るにはまづ其の岩石を一箇月も油滓の溶液中に涵して養分を石の中に泌込ませ石の形と位置とを見計ひ石菖を著けるに適當の側面に轆轤錐にて深さ三四分の穴を左右二箇處づゝ上と下とに穿ち一方の穴にまづ銅線の一端を挿込み楔にて抜けぬやうに固く止め石菖の根莖を石の側面に密著せしめ之を銅線にて抑へ其の一端を他の穴に挿込み前の通り銅線の抜け出さぬやうに固く止め斯くして其の下部もまた前の如くして永久に根莖の石より分離することのなきやうにするなり都合四箇處の銅線を固く止め其の外側に粘土を固く塗抹すべし。明治初年染井に石菖專門の植木屋有りしが其の家に文政年間植込の石菖有るを見、其の外の盆にも一々植込める年月を記したる札を添へたり。石菖の盆栽は年數を經たるものほど價値有るなり。

石付石菖には多く長方形の水盤を用ひ稀に楕圓形のものあり。眞圓のもの又眞四角のものは釣合あしければ用ひたるもの少なし。



第二十圖　石付石菖

水盤の底に細石を淺く撒布して水に涵し此の中に石菖を置けば石の底より自然に水を吸上げ殊更に水を灌ぐに及ばず。

夏季は晝は簀の下に置き夜は簀を卷き夜露を受けさすべし。

石付石菖は冬の保護を最も大切とす温室又屋内に圍ひ凍らさぬやうに注意すべし若し一度凍らすことあれば折角石に食込みたる細根盡く離れ數十年の丹精も一夜にして水泡に歸するものである。

石付に用ひる石菖は金華山、有栖川、陽炎、劍背、天鵞絨等なり、天鵞絨は葉の丈僅に一寸に充たず石菖中の最も小形のものとす。

斑入りものとして往時愛玩せられし石菖は白瀧。天の川。雪山。翁。オボロ。殘雪。陰陽。晝夜等である。陰陽は葉の表面青く裏面白く、又晝夜は表面白く裏面青し此の

二種は其の表裏の色の異なるにより斯く名づけられたものである。

黄斑入りのものに虎の巻。金鶏。山吹。黒龍等有り。

普通鉢前などの根締に植込まれたる白斑にて葉の丈一尺ほどのものは正宗といひ最も多く見受けらるゝものである。此に擧げたる種類の外に猶ほ多けれども今は省略す、石菖は葉細く葉先の鋒のやうに鋭く垂れ下らぬものを上品とす。又石付には斑入りものは用ひることなし。

石菖の鉢植の養土には灰白色の粘土を宜しとす。

石菖を繁殖すには根莖を一寸位に切り春の彼岸の頃水分多き地に挿すべし。

第二章　江戸時代の流行後現今猶ほ其の聲價を墜さゞるもの

萬年青

江戸幕府三百年間に亙り鉢物界にて上下の階級を通じて最も廣く流行の盛況を極めたるものは第一に萬年青を推さねばならぬ天正十八年の秋徳川家康公の始めて江戸城に入府したる時長島某が一鉢の萬年青を献じて其の入城を祝せりとの記録今猶ほ殘れり。昭和の今日も移轉又は新築移居の時鉢植萬年青を其の家に飾り置けば假令方角の悪い方に移轉したりとも其の災害を禳ひ又新築の家は繁昌すべしと云傳ふ斯る慣習は遠く天正以前より既に行はれしものと思はる。

萬年青を吉例として用ひる習慣は支那より傳播したるものならん彼邦にては古くよ

り吉祥の草として用ひたりと見え祕傳花鏡に萬年靑一名千年蒀。闊葉叢生。深綠色。冬夏不萎。吳中人家多栽之。以其盛衰占休咎。造家。移居行聘。小兒初生一切喜事。無不用之以爲祥瑞口號。至於結姻。幣聘。雖不取生者。亦必剪造綾絹肖其形以代之。亦俗套也云々。

此の記事に因れば支那では一切の慶事を表するに萬年靑を用ひたるが如し。

祕傳花鏡は淸朝初期の著書にして專ら草木の繁殖培養に就て述べ猶ほ禽獸蟲魚の養殖法をも說けりされば一種の博物書と云ふべし。

吳中人家と有る吳中は楊子江以南福建省、浙江省等の地方を廣く指して云へるなり。

以其盛衰占休咎。休は吉事、咎は凶事、萬年靑が勢ひよく生育すれば其家の繁昌する前兆として喜び之に反して枯れたり萎れたりすれば其の家の不吉として忌み嫌ふなり。

造屋は新築、移居は轉居、行聘は我邦にて結婚契約の結納に當る。

剪造綾絹肖其形以代之。贈答品に添へて賀意を表するに綾絹にて押繪の萬年靑を造り實物の代用とするを云ふ。

我邦でも初めは吉例として用ひたるものならんも世變り時移り偶ま變種を生じたるを見て數寄者の珍賞するに會ひ爾後競ふて變種を出すことを勉むる風習となれり。

萬年靑の原産地及び其の原種

オモトと呼ぶ其の起りは琉球石垣島表岳に多く産するよりオモト蘭と呼びしに起ると言海に見ゆ然らばオモトは表の意なるか琉球を元産地と云へる說は一般に唱ふれども内地にて上總の淸澄山、相州の逗子に自生のもの多く、九州地方には到る處多く見受けられ特に豐前中津産のものに珍品多しと云へり又安藝の廣島、遠州朝比奈等よりも多く出せりと云ふ。

植物學の方より云へば常綠草本で地上莖を持たず地下莖から披針形の葉を生じ幅廣くして並行脈あり其の中心より新葉を生ず花莖は此の葉叢の中央に生じ長さ三四寸

に及ぶものあり穂狀に攅簇したる淡綠色の細花を夏初に開く花後指頭大圓形の果實數顆を結ぶ熟すれば其色紅或は黄となる變種には白色に青に縞有るもの又全然青色のもの又水晶實と云へる白色透明のもの有り、何れも十分熟したる後の色にして初めは皆一樣に綠色のものである。

萬年青は漢名にして冬を經て凋まぬ所より此の名有り。

盆養として愛觀する萬年青は地萬年青卽ち野生のものに非ず皆變種なり此の變種の原種とも云ふべきものに七種有りと言ひ傳へり左に其の名を揭ぐ。

一　日の本

一　長島　前に述べた家康公に萬年青を献上した長島其の人の苗字をそのまゝ萬年青の名とせるものなるべし

一　久晏寺

一　しかみ

一　大名性

一　神代

一　秋津島

此の七種の原產地は概ね琉球諸島なりと云へり此の七種の實生或は芽變りにて更に變種を出せるを第二の原種と呼べり流行の盛んなるに從ひ培養者は其の玄人なると素人なるとを問はず競つて珍種を出すことに心血を注ぎたれば天保弘化の頃は終に數百千種の多きに及べりと云ふ。

觀葉植物中變種の多きこと萬年青に比すべきものなく其の流行の盛んなるに方つて珍しきもの出づれば朝に百兩のものは夕に二百兩に買はれると云ふほどの熱狂的賣買となり觀賞の範圍を脫して專ら投機者が一攫千金の奇貨として取引きせられるゝに至り之が爲に破產する者も少からず幕府當路者は其の弊害の甚しきを見て斷然高價の萬年青の賣買を禁じたり此れ實に嘉永五年十一月の事なりき。

其後幾何も無く世上俄に騷がしく外交談判、志士の捕斬、櫻田の變、勤王攘夷の論熾んとなり上下鼎の沸くが如く人々一日も安き心無く如何に成り行くやと世を悲觀せる時に方り誰か花草を顧るもの有りや無論萬年青の取引などは全く杜絕し法令の禁

止を俟たざるなり。

王政維新後江戸を陞せて東京と稱し假皇居を設けられ諸官衙を初めとして文武百官の邸第羅列し復往時江戸の繁盛を觀るに至りしが當時は舊物破壞の思想盛んにして一時萬年青の如き舊式の盆養物は度外視されしも明治十年以後漸く擡頭し初め二十年頃には各處に陳列會を開かれ天保嘉永の盛況には及ばざるも名古屋を中心に京阪地方まで廣く取引せらるゝを見たり。

明治二十八年第四回　勸業博覽會の京都に開かるゝに方り畏くも　明治大帝は英照皇大后陛下への御土產品として於多福、鷲舞の二鉢の萬年青を御買上げ遊ばされしと承はる大后陛下には蘭、萬年青に就て御鑑識頗る高く在らせられしと洩れ承はる此の萬年青中、於多福は縞甲龍の實生にして鷲舞は折熨斗の縞なりと云ふ猶ほ於多福に就て冷泉爲紀卿の賛有り左に其全文を載す。

萬年青於多福の賛

近きころ世の中にもてはやすものゝなかに萬年青ばかりさかりなるものはあらじさる故にやめづらかなる品もあまた、いできて諸人の愛るもの多かりそれか中にもいとめでたきは大辻久一郎のぬしの家に生いでたる其名を於多福と名づくるものにぞ有りける葉の色かたちなども世に又類少きものなるよしなり、今年五月の二十五日我天皇第四回の勸業博覽會に行幸ましましければその場にこのオタフクといへるを列ねて天覽に備へたてまつりぬさるを此一鉢畏くも大御心にかなひしよしにて御許人をして今より御許に參すべく仰せたまひしはいと畏き事也けり抑もオタフクといふはいかなる故にて名づけしや知らざれども大宮賣命とたゝへ中天宇受賣命を世にはオタフクと白といへれば此萬年青も名に負もちてながく久しく大御前に侍ひて常磐の變らぬ色に榮つゝ我　大君の愛給ふことを草ながらも願ひまつるなるべしあはれ大辻ぬしの家よりかくもめづらかなるもののいで來しはいと目出度いとかしこきになんありけり

萬年變らぬ色に今よりは惠みの露を受けて榮えむ

明治二十八年秋　　從三位伯爵　爲紀

二十八年は日清戰爭の起りし第二年目にして我軍連戰連勝傲慢なる支那も正義の前には終に屈服せざるを得ぬことゝなれり家康公の入城に萬年青を得たると、明治大帝の此の御買上げとは共に萬年青の吉祥を示すものゝ如し。

猶ほ御買上の萬年青は二鉢とも黒樂に白く浮出しの菊の御紋章あり。

萬年青の系統に就て

前に擧げたる七種の原種の葉形彩紋を記し更に此の七種より出でたる第二の原種に說き及ぼし猶ほ第二の原種より出でたる各變種に就て說明すべし但し現今珍種とせらるゝものゝ中に系統の判然せざるものも少しとせず斯る種類は暫く不明として猶ほ專門家の示教を俟つことゝせり。

彩紋とは葉の模樣ともいふべく卽ち縞、鼈甲、覆輪等を云ふ。

長島

長島は前に言へる如く家康公に献上したる時より其の名既に世に傳はり萬年青中の最も古き系統のもので從つて其の變種も甚だ多し。

長島

葉形　中葉にして稍細く葉面光澤有り白縞にて高尙の品位を保ち此の實生より珍らしき變種を出すこと有るより昭和の今日猶ほ比較的價を保てり。

長島より出たる變種に劍先有り、御劍、喜見城鼈甲、青龍、

天國、栗本等を出せり、御劍以下の五種は皆長島の孫萬年青なり。
又煙草葉、業平、織姫、牽牛、燕尾の五種も長島より出でたるものと云はれ、煙草葉よりは御鏡、雲鶴縞を出し。燕尾より楊貴妃、赤阪無名を出せり、又小萬年青の關止も長島より出たるものと云へり。

赤阪無名は燕尾の實生である此の名は天保年間江戸赤阪の紀州邸(今の赤阪離宮)に住める一藩士が燕尾の實を蒔いて發生したるものなるも命名せんとするに適當の文字なきより無名と云はれしに由ると云へり。

關止は安政年間江戸の關口某なる旗下の士の培養されし變種にして門外不出の意味よりして關止と名附しものと云ふ(以上二件オモトの見かたと培養に據る)

久晏寺

葉形　葉の大きさは長島より小形で間葉に屬し稀には小葉卽ち小萬年青に屬するものも有る葉形は皆亂形なり黄白交りの縞有るを普通とす。附記間葉とは中葉に次ぐ大

きさのもので短きは五六寸長きもの七八寸に過ぎず亂形葉は葉の兩縁にたるみありて凹凸の波狀をなせるものをいふ。

久安寺

久晏寺系統のものは頗る多し、其の重なるものは花屋敷。偕白髮。褥の錦。春駒。肴屋。金生精等で有る。又一時最も流行を極めたる甲龍も此の久晏寺より出たるものである。

偕白髮より天惠龍。寶代を出し寶代より更に錦玉、錦獅子、金孔雀を出せり。此等は何れも久安寺の孫若くは曾孫に當る。甲龍より出たるものに珍種とせらるゝもの

最も多し。

縞甲龍。らしや甲龍。孔雀甲龍。二面龍。金龍。龍頭。瑞鳳。鳳尾等で有る此の外に鴛鴦。還暦有り。

縞甲龍の實生に天照海。小天狗。鸞舞有り。

二面龍の實生に天光龍。金光龍。金星。萬寶龍有り。

ラシャ甲龍より萬代。麒麟丸を出せり。

現今、最も珍種として推重さるゝ大統領も甲龍の系統に屬するものと云はる。

肴屋は萬年青師中にて有名なる根岸の篠常五郎氏の屋號を肴屋と云へり、此の家より出たるにより其の屋號を取りて名附しなり。

甲龍は葉根より葉端まで中央に一條の筋高く梁の如く通れるより高梁と呼びしを後に甲龍と改めしなり。

志加美

葉形　葉の大きさは中葉（説明後に出す）にて形は久安寺と同じく亂形なり縞の入り方は白の浮縞に點々と吹掛け斑の入りたるを特徴とす。

小萬年青の松の雪は此の志加美より出たものと云はる。

志加美は金屬の火鉢の名にして三本の足に獅子の嚙み付ける形有り、此の萬年青の葉の此に似たる所有るより斯く名づけしなり。

しかみ

神代

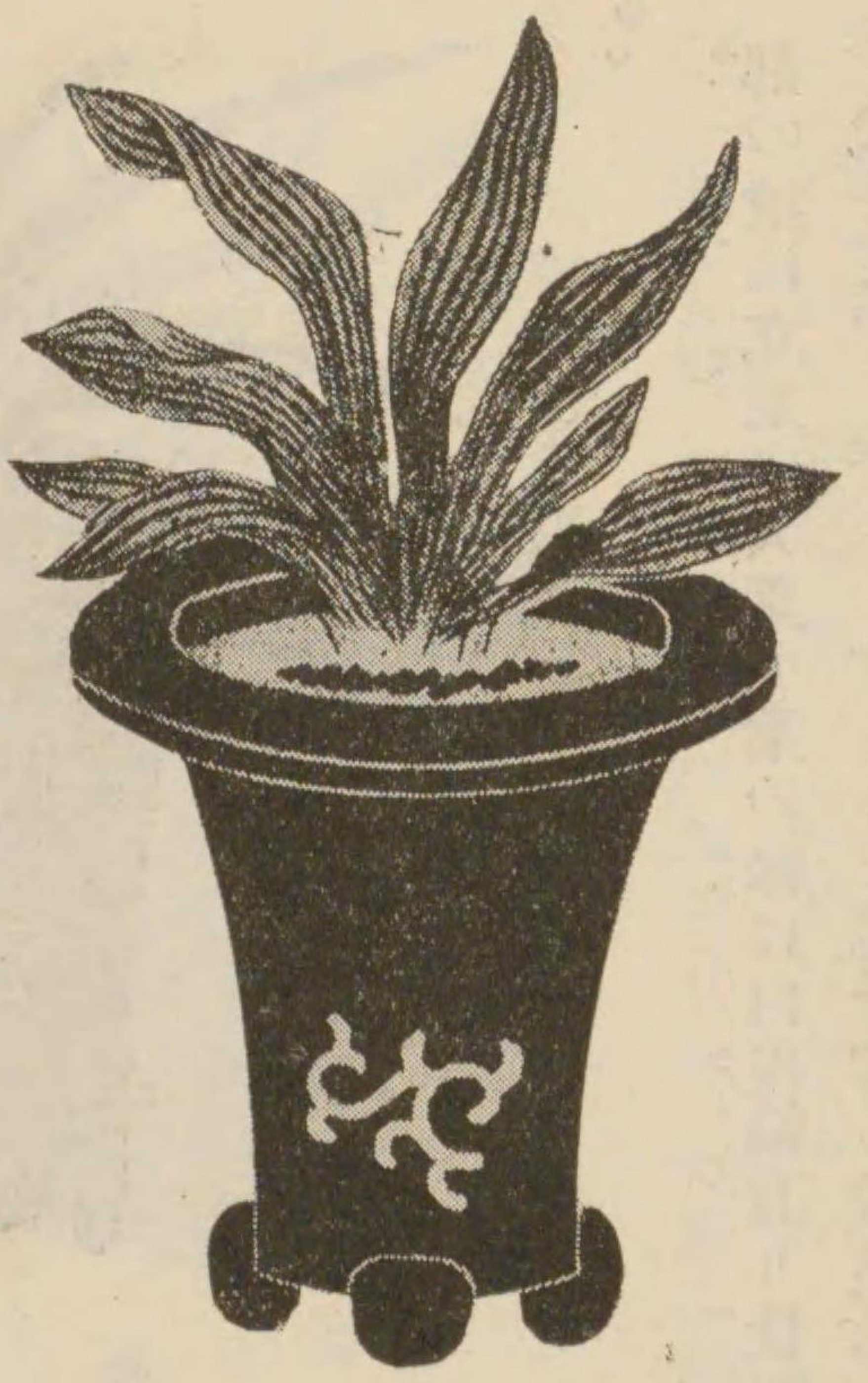
神代

葉形　大きさは中葉にて垂葉なり葉の縁は白覆輪にて葉面は縞と斑と入り交れり。

神代より出たるものに松の霜あり。松の霜の實生に寶玉と寶玉覆輪。寶船有り、寶船の變種に桐生鳳有り。寶玉の實生に細石有り、桐生鳳は寶船の變種相葉の圓葉に白覆輪あり、産地は群馬縣桐生の附近なるより斯く呼べりと云ふ。

秋津島

葉形　大きく日の本と共に大葉の原種と云はる。葉形は鍬形（解後に出す）にて青の無地、但し葉の地合に芭蕉布に似たる縞目有り。



秋津島

秋津島より出たるものに宗碩。宗碩縞。殘雪有り。殘雪の變種に若松有り。又宗碩縞より出たる根岸松有り。殘雪は濃緑色の大葉にして鮮明なる白鼈甲あり。

大名性

葉形　中葉にて細き巻葉（解後に出す）なり葉面に白斑に吹掛を交せ珍種として重んぜられるも其の白斑と吹掛斑の鮮明なると否とに由り優劣を分つ、但し此の種よりは未だ變種を出せることを聞かず。

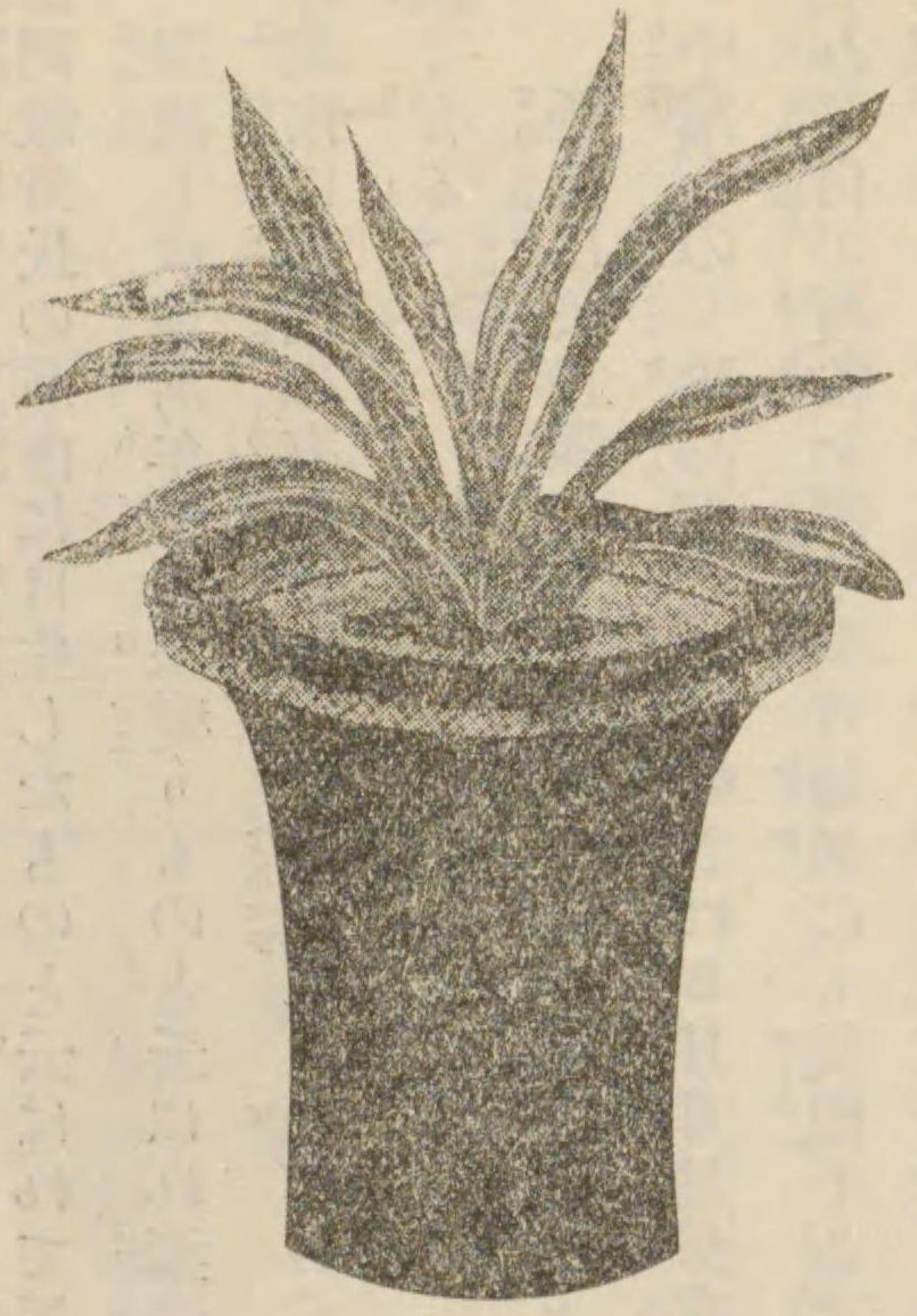
大名性

日の本

葉形　大葉もの〻原種と云はれ立葉（解後に出す）にて葉面に薄白い縞がある、此の種のものは、最古に移植されたものと云はれるも變種少く原種も今は殆んど絶えなんとして居る但都の城と長龍は日の本から出たものと云はれて居る。

都の城は立葉の大葉で葉の縁に白覆輪有り世間に最も多く見らる萬年青中の普通品なり都の城から出たと云はれる都の雪、都錦、都縞有り。又系統未詳とせられて居る都の花も立葉に覆輪をかけたもので有る。

右七種の外に系統不明のもの數種有り其の一に鍬形と云ふのが有る葉形は兜の鍬形に似た所より斯く名づけられたもので、大葉の無地で並物で有るが此の實生に福包あり、福包から寶牡丹が出たので有る福包と寶牡丹は世に珍賞せられ從つて鍬形も知られるに至り、子孫の光りで親萬年青の名が現はれた譯なり。



日ノ本

鍬形は兜の目庇の上に雙つの角の如く立てるもの〻名、一角の形、慈姑の葉を側面より見たるが如く其の端外へ反る、されば クワイ形の轉訛せるなりと云へり。

大葉ものは又薩摩性とも云ふ此の種の中に高限と呼ばる〻中品ものあり殘雪に似

たる鼈甲あり葉形稍薄し。

猶ほ大葉ものに萬歳。鳳尾。大和錦。牛王閣有り、皆名品なり。中葉ものに吾妻鏡三島龍。富士の雪。月影。旭扇。司丸。墨流。七變化等有り此の中の旭扇は明治初年山岡鐵舟氏の邸内に自生したものと云はれて居る。

墨流しは地萬年青の根變りものと云はれ葉形は鍬形で其の縁に墨色の覆輪を深く掛け葉面に墨縞の有る所より、墨流しと名づけられたので珍種とされて居るが培養が困難で有る。

墨流は染模樣の名を取りて附けたるなり。

中葉もの丶稀品として持噺される日月星が有る立葉で左右の兩縁が中央に向つて卷込み純白の覆輪を深く掛け如何にも美觀である。

中葉もの丶中七變化は葉の地色深緑色で白縞がハツキリ現はれ眼の覺めるやうである此の萬年青の實生ば種々の變種を出すと云ふ所より斯く名づけられたものである。

立葉の中で最も珍種として推重せられるものに横綱が有る、葉の縁に白覆輪を掛け葉面は發芽の時から夏季まで白色で漸次黄色を加へ最後に深緑色の斑點が現はれるのである。

亂形葉に折熨斗有り葉の縁の「オリノシ」を疊みたる形と爲つて見える所より此の名有り熨斗は鰒引と書くを正しとすれど暫く慣用に從ふ

萬年青の系統

- 業平
- 劒先
  - 御劒
  - 喜見城鼈甲
  - 青龍
  - 天國
  - 栗本
- 織姫

- 長島
  - 煙草葉
    - 御鏡
    - 雲鶴縞
  - 燕尾
    - 楊貴妃
    - 赤阪無名
  - 牽牛
  - 關止（小萬年青）

- 褥の錦
- 偕白髮
  - 寶代
    - 錦玉
    - 錦獅子
    - 金孔雀
  - 天惠龍
- 金生精

- 久安寺
  - 花屋敷
  - 甲龍
    - 縞甲龍
      - 鸞舞
      - 天照海
      - 小天狗
    - 還暦壽
    - 孔雀甲龍
    - 二面龍
      - 萬寶龍
      - 天光龍
      - 金光龍
      - 金星
    - 金龍
    - 龍頭
    - 瑞鳳
    - 鴛鴦
    - ラシャ甲龍
      - 萬代
      - 麒麟丸
  - 肴屋
  - 春駒

○志加美──松ノ雪（小萬年生）

○大名性──未だ變種を出さず

○神代──松ノ霜
- 寶玉覆輪
- 寶玉──細石
- 寶船──桐生鳳

根岸ノ松

○秋津島──宗碩
- 宗碩縞──根岸松
- 殘雪──若松

○日ノ本
- 長龍
- 都ノ城
  - 都錦
  - 都ノ雪
  - 都縞

右七種以外の系統不明とせらるゝもの、親種とも云ふべきものに

○鍬形──福包──寶牡丹

小萬年青

小萬年青は其の形状極めて矮小、葉の丈二三寸幅は五分許り、年を經て葉數殖るも

狀は少しも變らず如何にも可憐ものである實を結ばざれば株分より外に繁殖すべき方法なし。

普通萬年青の實生は發芽のとき單葉なれども稀に雙葉のもの有り此の雙葉のものが後に小萬年青となるものであると云傳へり。

小金

小萬年青中の珍品松の雪は志加美より出しものなることは既に前に說けり猶ほ松の鷹、喜見城、桂山、松島、白綾、小金有り、何れも系統は判然せざるも珍品と云はれ其中には縞も有り覆輪もあり、丸葉もあり。

小萬年青中にて最小なるものを白綾とす、白綾は葉面に純白の胡麻斑有り一見白綾の織物のやうに見ゆる所より斯く名づけたものと云はる。此の白綾と小金とは格外の珍品とせられて居る。

萬年青の葉に就て

觀葉植物中蘇鐵、棕梠竹の如きは其の全體優雅にして氣高き處を愛觀するものなれど萬年青の觀賞は其の主眼とする所、葉の紋樣に在り從つて其の品種の優劣を定むるは專ら縞、鼈甲、覆輪等の如何に因るものとす先づ葉の大小よりして順次に其の綵紋に說き及ぼすべし。

○大葉　長さ一尺以上幅二寸餘に及ぶもので萬年青中葉の最も大形のものを云ふ。此の種類は一名薩摩性と呼ばれて居る。都の城などは最も廣く世に知られたるもの丶一つである。日向地方の人の話に四斗樽の底を拔き都の城に被せ二三年其の儘に爲し置けば葉端は樽の上に出ると云へり、此れは同地方の溫度の高きに因るは云ふまでもなけれど橫に擴がれぬこと丶風に吹き曝されぬ爲なるべし。

大葉に屬するもの丶重なるものは都の城、日ノ本、秋津島、高隈、宗碩、鍬形、殘雪などで有る。

○中葉　長さ六七寸より八九寸を止りとす、長島、久安寺等を初めとし高價のものも此の種より出たるものに多し。

○間葉　中葉と小萬年青との間に在り其の長さ五六寸を止りとす、春駒、天國、天惠龍、錦玉、寶代などは此の種の中にて廣く知られたものである。

○小葉　一に小萬年青と云ふ。萬年青中の最小なもので、葉の丈三寸位より長きものなし。

形狀

葉の形狀にも變化多く其の最も多きは立葉にして最も少きは垂葉なり。其の他丸葉大平葉、細葉、細卷葉、蘭葉、亂形葉、大波葉、小波葉等有り。其の性質に就て云へば立葉は眞直に上に伸び、垂葉は葉端が下に垂れ下り丸葉は他に比較して圓有るものを云ひ細葉は細目のものを云ひ細卷葉は葉の兩邊が中央に卷込む癖有るを云ひ蘭葉は細長くして蘭の葉に似たるもの、亂形葉はすらりと伸びずして屈曲有るものを云ふ。大波葉、小波葉は波瀾の起伏せるやうに葉面に高低有るものを云ふ。

立葉に日の本、長龍、御劍、牽牛、都の花あり。

垂葉に神代あるも其の他は未だ世に知られず。

亂形葉に久安寺、しかみ、花屋性、金獅子、寶牡丹、折のし、甲龍の類あり。

細卷葉に大名性、大和錦あり。

細葉に赤阪無名、楊貴妃、天惠龍、春日龍あり。

大波に松の霜、三島龍、寶玉、覆輪、吾妻鏡あり。

小波に偕白髮、褥の錦、月影、栗本有り。

大平葉に煙草葉、丸葉性、燕尾、金孔雀、五大洲あり此中にて煙草葉、丸葉性は亂形をも兼ねたり。

栗本は旗下の士栗本鋤雲翁の祖父某、長島の實生より得たるものにて初め藍田と名

付しが世人は其の出たる家の姓によりて遂に栗本と呼び傳ふるに至れり。

地合

葉面の地合にも種々變化有り綾地、魚子地、繻子地、縮緬地、厚板地、羅紗地、天鵞絨地、芭蕉布地、雛綾地、黒地、竹皮地、砂子地、畝地、等有り。

地合には厚板地に鴛鴦あり、羅紗地に萬代あり、麒麟丸あり、芭蕉布地に鶴氅あり、繻子地に大和錦、赤阪無名あり、五大洲あり、竹皮地に御代の錦あり、畝地に根岸松あり、魚子地に金生精あり、牽牛あり、天鵞絨地に青龍あり、此の外は概して羅紗地のもの多し。

彩紋

萬年青の葉面に縞、覆輪、斑などの現れたるものを總稱して假りに彩斑と呼ぶ。縞に白縞、黄縞、爪縞、墨縞有り。覆輪に白覆輪、黄覆輪、紺覆輪が有り、覆輪とは葉の縁を白又黄にて縁取したるものを云ふ。

斑に白紋、更紗斑、影斑、吹掛斑、黄斑あり、白斑は普通に鼈甲と呼び、黄斑を虎と云ふ。吹掛斑とは、霧を吹掛けたるやうに點々と斑の現はれたるを云ふ。

白縞のものでは御劔、赤阪無名、栗本などを著名のものとし、黄縞のものに春日龍、楊貴妃あり、劔先にも黄縞ものあり、三島龍、鳳尾は何れも黄白交りの縞である、又久安寺にも縞の黄白交りのものあり。

白覆輪にて多く見受けるものは都の城で、珍品と云はるゝものに横綱、牛王閣、五大洲などあり、猶は寶玉覆輪、大統領なども白覆輪中の稀品とせられ、此の外に富士の峯有り。

黒覆輪に萬歳、司丸、墨流し有り。紺覆輪に吾妻鏡有り、青覆輪に根岸松有り。

白斑のものに殘雪有り、白斑に覆輪を兼ねたるものに都の錦、都の雪あり。吹掛斑にしかみ、大名性有り、胡麻斑、還暦壽、鴛鴦あり。小萬年青にて白綾、松の

霜は、何れも吹掛斑なり。
此の外霜降に寶船有り櫛目縞に天照海有り。
前に述べたる件々を一株の萬年青に就て言へば、其の一例として
○長島　中葉の細形、光澤有る白縞なり。
○大統領　大葉の鍬形、甲龍有り、葉面は羅紗地、葉の縁に深く白覆輪をかけたる白縞なり。

右の例に因り福包なる萬年生の詳細なることを知らんとせば先づ七種の原種に就て其の系統の何れに屬するかを調べ然る後に葉の種類、形狀、地合、綵紋の四點を順次に詮索して之を綜合すれば此に擧げたる大統領、長島の如く其の形狀色彩等に就て一目瞭然たることを得可し。

萬年青は往時の如き熱狂的の流行は期待されぬが愛觀者は今猶ほ世間に尠からず鉢物の二三個も並べ有る家には其中に必ず萬年青を見受けざることなし。今猶ほ關西地方にては相當に賣買せらると云ふ。次に其の培養と繁殖とに就て要點を摘記し萬年青の盆養を試みんとする人の參考に供す。

培養

萬年青は元温帶植物なれども冬季の雪霜にも夏の炎天にも損傷せず割合に强いもので有るが、盆養のものは自然生のものに比すれば寒暑共に抵抗力の弱きはまた止むを得ざるなり、されば冬季は温室又屋内の日當りの好い處に置くを宜しとす。
眞夏は鉢物棚に載せ日中は其上に葭簀を掛け、夜分は簀を巻いて十分に夜露を承けさすべし。
暴雨の時は屋根下に取込むか又は雨除を爲すべし。
一般に入梅中は雨に當てぬを宜しと云へり。
强風は害あり殊に秋季の西風は避けねばならぬ又平生朝日に當るやうにし夕日を避けるを普通とす。

植替

春秋二季の比岸の頃何れが一回植替るを普通とすれども春四月中に植替るを最も廣く行はる植替は根の腐れたものは剪み取り芋（地下莖）に故障の有無を檢べ若し障りあらば削り取り切口に藁灰又は木灰を塗り置くべし、發育の弱きものは毎年植替へず其の儘年を越す方却つて無難なり、されどもし根部に故障有らば鉢より抜き出し能く檢べねばならぬ。

鉢は普通に黒樂と云はるゝ京燒のものを用ふれども素燒のものならば他の種類にても差支無し瀨戸今里の如き硬質のものは宜しからず。

鉢の形は普通に底の方少し窄み細長きものを用ふ、萬年青、蘭などは葉の長く伸びるを望むものなれば深く細長き鉢を用ひるのである、箇樣な形は灌水も停滯せず、外觀も蘭、萬年青には適當するもので有る、植替後二週間は絶對に施肥せぬがよろし。

用土　關東地方到る處高燥の地には必ず數尺の地層を爲せる俗に赤土と呼ぶ赤色粘

土有り往時江戸方面にて蘭、萬年青の植込用に廣く知られたるものにて現今も猶ほ之を用ひる人有りまづこの土の塊を掘り出し碎いて風化させ全く水分無きものとなりたるを篩ひ微塵を去り、大さを三通りに分け第一は指頭大のもの第二は大豆粒ほどのもの第三は米粒ほどのものとし之を鉢の底より上部に向け三段に入れる、底の方に一番粗き指頭大のものを鉢の深さの三分の一ほど入れ中央に大豆大のもの三分の一ほど入れ上面に細きものを入れる、鉢の底に木炭の碎けを入れ置けば排水の工合よく一方には與へたる肥料分を此の炭の吸收により自然植込みたるものゝ肥料となる利有り。

猶ほ植込用としては京土、一に七條土と呼び下水土を一定の大きさに丸め乾燥したるものにて肥料分を相當に含めるもの又沙としては白川砂、朝明砂等廣く用ひらる。

要するに蘭、萬年生の用土は朝顔や菊と違ひ用土は肥料を含まずして單に植込みに用ひるを主眼とし肥料は別に與へるのである從つて專ら排水能きものを擇べり、されば普通品には前に述べたる三段法に由り手近に得らるゝ土、又は沙を用ひるも別に障り無し。

肥料　一般に油粕を水に溶したるものを用ひる其の割合は油粕一合を水二升に入れ腐敗したる後に用ひる、腐敗する日數は春は一ヶ月位夏季は二週間位かゝる。

又削り鰹節約五十匁を水三升に入れ腐敗させて用ひる人有り冬の間に造り置き之を與ふるときは茶漬茶碗一杯を「バケツ」一杯に薄め毎朝一回與ふると云ふ。

施肥後一時間程も過ぎ一回灌水すべし此は肥料のむらなく行き渡ると又一部に殘れるもの有りて腐敗を釀す懼れ有るに因る。

施肥の手加減は眞夏は比較的濃いものを與へ夏の土用後は薄いものを與へるを順序とす。

與へられたる肥料は沙又土に浸込みそれが灌水の時滲み出し植物の根に吸收されるので有つて與へたものが直に根に吸取られるものではない。

灌水　水には雨水、井水、川水等有り何れを用ひるも差支へ無きも井水は汲立のものは冷過ぎて宜しからず冬春の間は日向に數時間曝して後用ふべし、雨水、川水も冬期は直に用ひず少し日に當てゝ後用ふべし。

灌水の度數は四月植替後一日に三回乃至五回、盛夏には七八回も澆け、秋に入りて後一日に二三回冬季は一日一回にて十分なり、但し土地によりて夏期は溫度に高低有り右に述べたるは名古屋地方を標準とせるものなれば彼の地方より溫度低き處ならば回數を減ずるもよし萬年青は水草に近きものと云はるゝほどなれば夏季の灌水は成育を助くるものとせらるされば夏季は如何に多きも害とならず。

夏季中は度々毛筆や柔かき細い刷毛にて葉の表裏面を洗ふべし此れは葉に附著せる塵埃と微細なる蟲類とを除き、自然葉の光澤を良くするものである。

繁殖法

萬年青は實蒔株分芽吹の三通りの繁殖法有り先づ實蒔より述べるに秋の彼岸を過ぎ紅熟したるものを其儘親木に附置き春の彼岸に切取り二三日日に當て表皮卽ち紅色の皮を剝げば芽と根とを生ずる點一箇有り、前に述べたる赤土を三段に淺き鉢に入れ發芽の點ある方を下に向け一粒づゝ竝べ種子の隱るゝ程度に薄く土を被ぶせ、土の乾か

ぬやうに注意すれば五月末には大抵發芽するものである秋になりそれぞれ移植し肥料は與へぬを宜しとす、但し移植前は朝は日光に當て上等ものならば日中簀下に取入れる。

又冬期實のつきたる莖を剪取り莖のまゝ貯へ置き前に述べたる方法にて來春の彼岸に蒔くもよし。

株分法

年數を經たる萬年青は其の地下莖より萌蘖を出し二三年後には立派に地下莖も出來て一株となる之を掻取り鉢植とするを普通とすれども、本年の春芽出したるものにても既に根を幾本か出したならば翌年の春親株より切離して一本立とするもよし、但し根のまだ出ぬもの又餘りに根の數の少きものは決して親株より切離さず其儘に置き十分發根せるを見て分植すべし。

芋吹法

萬年青の地下莖には節のやうなる横筋幾筋も有り、其の筋の間に微細なる芽有り之を芽點と云ふ玄人は之を當りと云ふ此の芽の上部を一分程添へて親地下莖より切離し雙方の切口には藁灰か木灰を塗りて腐れ込みを防ぎ、さて切離したる地下莖は一般に水苔植とする、其の植方は水苔を一度水に浸し引上げて十分に固く絞り之に四割程の乾いた水苔を加へ能く交せて稍濕りの有る位の程度にて此の切離したる芋を完全に包み亜鉛製の平箱に切口を上に向けて並べ其の上に濕したる水苔を薄く布き風の當らぬ所に置くか又其上を風呂敷やうのものにて覆ふもよし一ヶ月位經て表面の乾くことあらば霧吹にて輕く濕し決して水氣の過ぎぬやうに注意すべきである少し位の乾燥には害無きも過濕は腐敗の惧れあり、斯くして四五十日か遲くも六十日間を過ぎれば芽の動きを見るべく追々本葉の出初めるを見て抜出し鉢に植込むべし水苔か朝明沙、白川沙にて植込むもよし、初めは風通しよき處にて二枚簀の下に置き當分肥料を與へず灌

水に注意し、本葉二枚とならば一枚簀の下に出すべし、以後は一般に植替たるものと同様の取扱ひにてよろし。

親芋より切離す時期は一般の植替時卽ち四月中に行ふべし。

以上述べたる播種、株分、芋吹の方法にて繁殖法は盡されたるもので有る、播種、株分は一般の草本類と異る所無きも惟り芋吹法は親株の力を削ぐかのやうに思はれるが決して然らず萬年青に限らず草本の地下莖は其の養分を根から吸收して生育することは地上の莖や葉と變り無く地下莖の膨大となるに從ひ其養分を吸收すること多く、之が爲に莖や葉の養分を少くするもので有る、されば芋吹法の必要無くとも地下莖の大き過ぎるものは適當に除き去るべきである、但し根の多少を檢べ親株の方には相當に根の數を多く持たしむることに注意し、此の細根が最も生育に對して大切なるものなることを忘れてはならぬ、又切離したる芋にも數本の細根有るを必要とす。

樹木に陰木と陽木と有りて杉の如きは陰木の方に屬するもので大なる杉林は溪谷の間の風の強く當らぬ日當りも十分ならぬ處に伸長し松の如きは陽木にして風の吹き通す日當り能き處に非れば繁茂せず草本にも陰草と陽草と有りて萬年青の如きは陰草に屬し且つ水濕を好むものなれば盆養のものも夏季は灌水多きを好しとす如何に陰草なればとて晝夜共に室内又物陰に置くは宜しからず斯くすれば葉は軟弱となり地下莖は瘠せ、分蘗する力なく只現狀を維持するに止まる、されば床の間又書棚などに飾り置くものも朝半日位日に當て夜間は冬季の外は必ず屋外に出し夜露を承けさすべし。

理髮店などにて萬年青の鉢に鷄卵の殼を積重ねたるものを往々見ること有り此は經驗より肥料となることを知り得たるものなるべし、何處の家の厨房にも鷄卵の殼は他の料理屑と共に捨去らる、余は此の殼を拾ひ集め古「バケツ」に入れ之に水を加へ殼の色の稍薄黑くなれる頃更に水を加へて稀薄にし蘭、萬年青の肥料に用ひたるに至極工合良きやうなり記して素人培養家に奬む、又初めより多量の水に漬し置くも宜し水の腐敗よりして少し臭氣あれども灌水後は別に臭味を殘さず。

本書に載する處のものは多くは普通の種類にして現今玄人社會に珍品として持囃さる丶ものに根岸松の系統に屬する千代田の松、寶田松、祝田の松有り、又今より八十

年前既に珍種として培養され今猶ほ相當の聲價を有てる龍頭あり、明治年間のものに天照海、日月星あり、其他年代と系統とを略して豐授樂、富士の雪、春輿殿、慶賀覆輪、瑞鳳、錦明鳳等の數十種有り一々枚擧に暇有らざれば之を省略したり。

百金二百金の高價のものは別として萬年青は玄關前、又店頭の裝飾、床の間の飾りとして棕梠竹、蘇鐵など〻共に將來廣く愛用せらる〻こと〻思はる此の方に向くべきものは大葉もの卽ち薩摩性の都の城、高隈、宗碩縞、殘雪の如き普通品にして掌上に載せて珍賞する、百金二百金の種類は專門家の間に取引せらる〻ことは有らんも一般向としては何れとも明言し難し。

往古伯樂有り一人の弟子に千里の馬を相することを敎へ一人には凡馬を相することを敎へたり其の弟子慍り我平生師の信愛を受くること彼に劣らず然るに今師は彼に許すに千里の馬を以てし我には凡馬を以てすと師之を聞き諭して曰く千里の馬は常に有らず凡馬は之に出會ふこと日に月に幾回なるを知らざるべし今汝をして虛名を避けて實益に就かしむるなりと弟子始めて悟る果して利を得ること頗る多く終に巨資を積むに至れりと。

近頃或萬年青師が盜難の防ぎに番犬を飼置くとのことを聞きしが往時天保年間萬年青の盛んに流行したる頃染井の槖駝師某が一夜、中庭に置ける萬年青一鉢竊まれたるを知り周圍は朝鮮矢來にて嚴重に締り有る處を如何にして入りしかと疑ひしが矢來の竹の端に藁草履一隻掛れるを見つけ之を取りて檢べしに草履は全く新しきものにて竊みに入る爲に買求めたるものなるを知り且つ遠方より來りし者ならざるに氣付き近處の荒物屋に此の草履を賣りしこと有りやと一々尋ねしに一軒それは昨日某に賣りし品なりと答へたり然るに其草履を買に來りしものは近所の商店の丁稚にて萬年青などには全く無關係の者なれば不思議に思ひ其の丁稚に草履を示して何の用有りて此の草履を買ひしかと訊したる所、丁稚の言に其は自分の使用する爲に非ず某家の檀那の云付にて買ひ直に其の檀那にお渡ししたので有ると答へたり、某家の檀那と云はる〻人は相當の身分有る者にて常に藁草履など履くこと無く又自らかやうのものを買求める人に非ずされば丁稚に買はしめたものであると判明したり、初め萬年青を竊み朝鮮矢來

を乗越え外に出んとしたるとき過つて一隻の草履を矢來の竹の端に引掛けたるも之を取る餘裕無く其儘慌てゝ逃げ去りしが惡事露現の因となりしなり。

第二篇

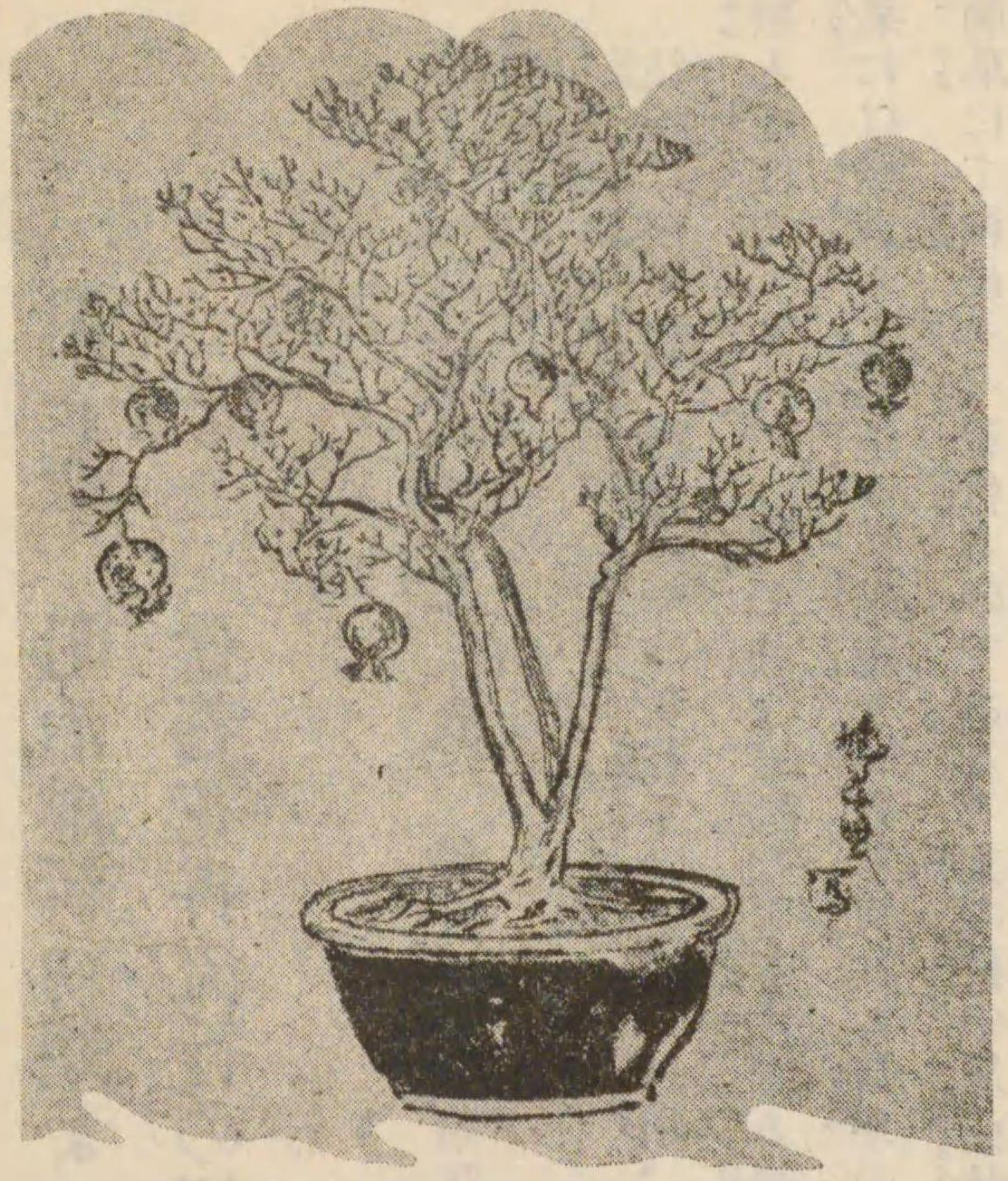
第一章　明治維新初期より現今に至る盆養花卉流行の變遷

一、文人盆栽　附江戸時代の鉢物

往時は梅、櫻、海棠のやうな花ものと松、竹柏、矮柏のやうな葉のものと、其の他柑類と呼ばるゝ蜜柑、橙の如き實物などを主なる盆養物とし其の造方も梅、櫻、桃、海棠には蛸造りと篠造り枝垂造り等あり何れも新芽の長く伸び枝となれるものを梅雨中藺草にて枝にクセを付るのである。其の枝の屈曲せるさまの蛸の足に似たる所より蛸造りと云ひ篠造りは細き篠竹を盆の大小に應じて幾本も建て此の竹に梅又は海棠の新枝を行儀よく竪に括しつけ秋になり枝の固く締れる頃は藺草も腐れ一々之を掃ひ去り温室に入れ一般の開花前に花を咲せるのである。

松、竹柏矮柏の類にも此の蛸造りに似たる造り方あり蘭草の代りに蕨縄を細く解して用ひ之にて枝を括る、蕨縄は永く腐らぬためである。

柑橘類は惟伸過ぎたる枝を剪詰めて實を結ばせるのみにて他の細工を施さず。



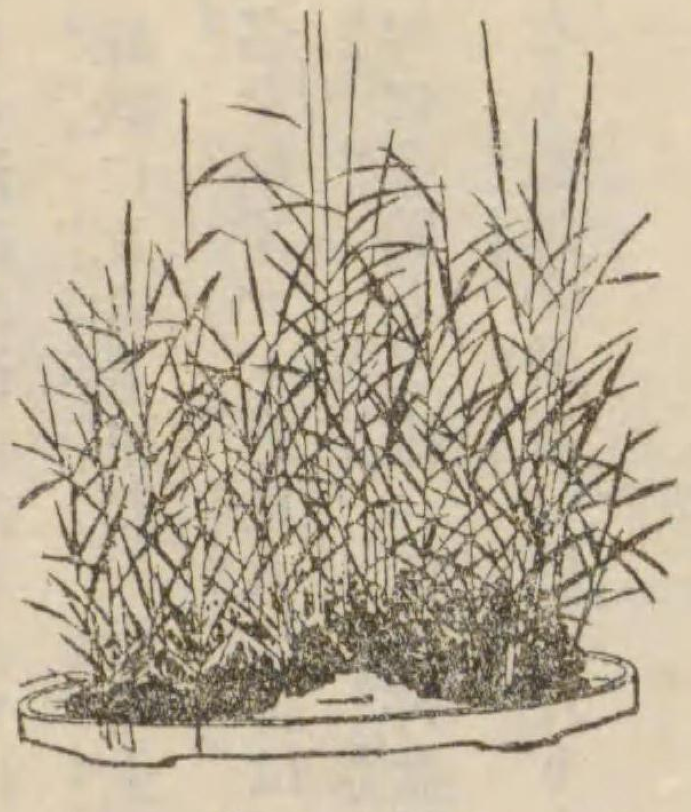
朝鮮石榴

明治三十六年國會開院式に貴族院便殿の裝飾に用ひられ天覽の榮を荷へる朝鮮石榴にして愛藏家は喜谷市郎右衛門氏なり

今より見れば斯る兒戯に類したる造り方のものを愛觀せるは何如に其の趣味の低くかりしかを思はしむるも當時一般の娯樂又興行物も卑猥のもの多く歡迎され惟り盆養物にのみ趣味低級なりしにあら

ず。

文人盆栽の流行し始めたるは明治維新後間も無きことにて當時は政體文學のみならず一切の舊式は之を打破し人氣も豪放磊落に傾き彼の繪畫の如き奥村晴湖女史の佛掌薯か頑石か區別し難きほどの極めて粗鬆なる南畫の流行したる時なれば鉢植物としても蛸造りや篠造りなどまた顧る者無く、大明竹、寒山竹の鉢植、又西湖の蘆と稱し普通の蘆よりは小形なるものを水盤に植ゑたるものなど主として細工を加へず自然のまゝなるものを專ら愛好したり然るに竹類の盆栽のみにては物足らぬより松、樅、杉、又落葉樹にて槭樹、欅、ソロの類まで鉢植として觀賞するに至れり。



西湖の蘆

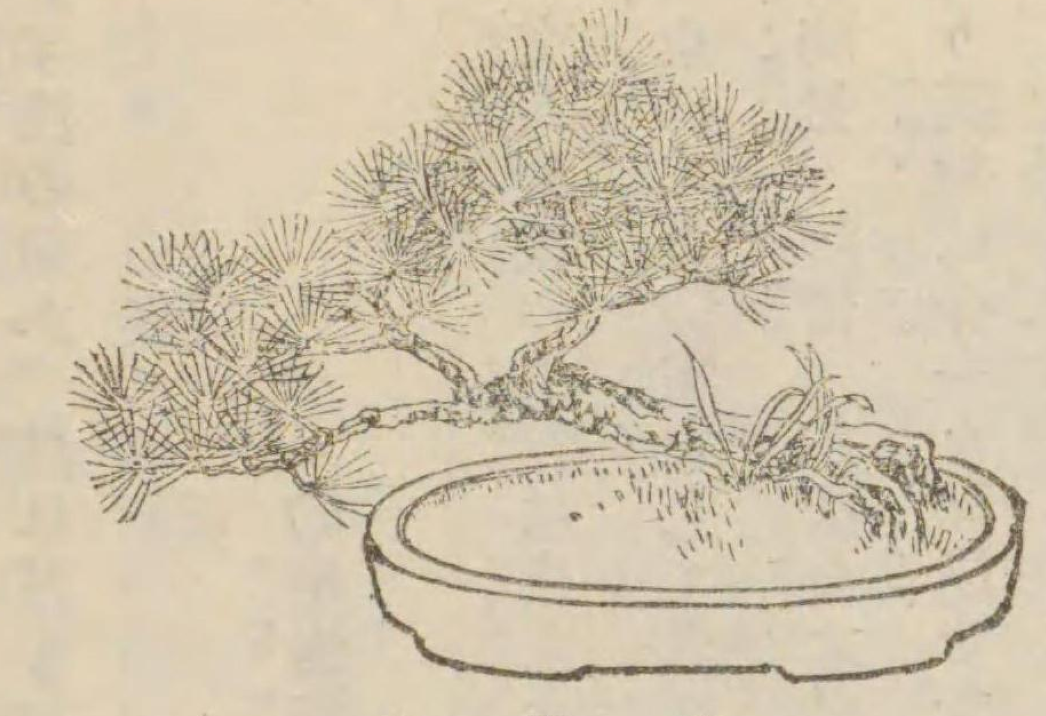
文人盆栽と名付たるは其の趣味の南宗畫風に似通へる所有るより斯く呼びしものにて盆栽は國語に譯せば鉢植であるが或る盆栽好の人に盆栽と鉢植とは同じ盆養物で有るか如何なる區別有りやと問ひしに其人の答は奇

抜である曰く盆栽とは淺い鉢に植込めるものを云ふ鉢植とは從來の梅松の類の如く深い鉢に植ゑられたものを云ふと此の答へは實際には當嵌るも盆栽は只鉢植の二字を雅馴なる漢語に改めたるまでにて特に區別せるためにあらず。

餘談に亙るも維新の當時土佐の藩主山内榕堂公は藩籍奉還に就て當路の某公（暫く其名を秘す）と意見大に合はざりしも遂に屈服するの止む無きに至り欝憤に堪へず花柳界に豪遊し又盛んに花卉盆栽を賞翫して其の晩年を送れり之が爲に盆栽界の奨勵となり急速の發展を促したりと云ひ傳へり。

遠州松

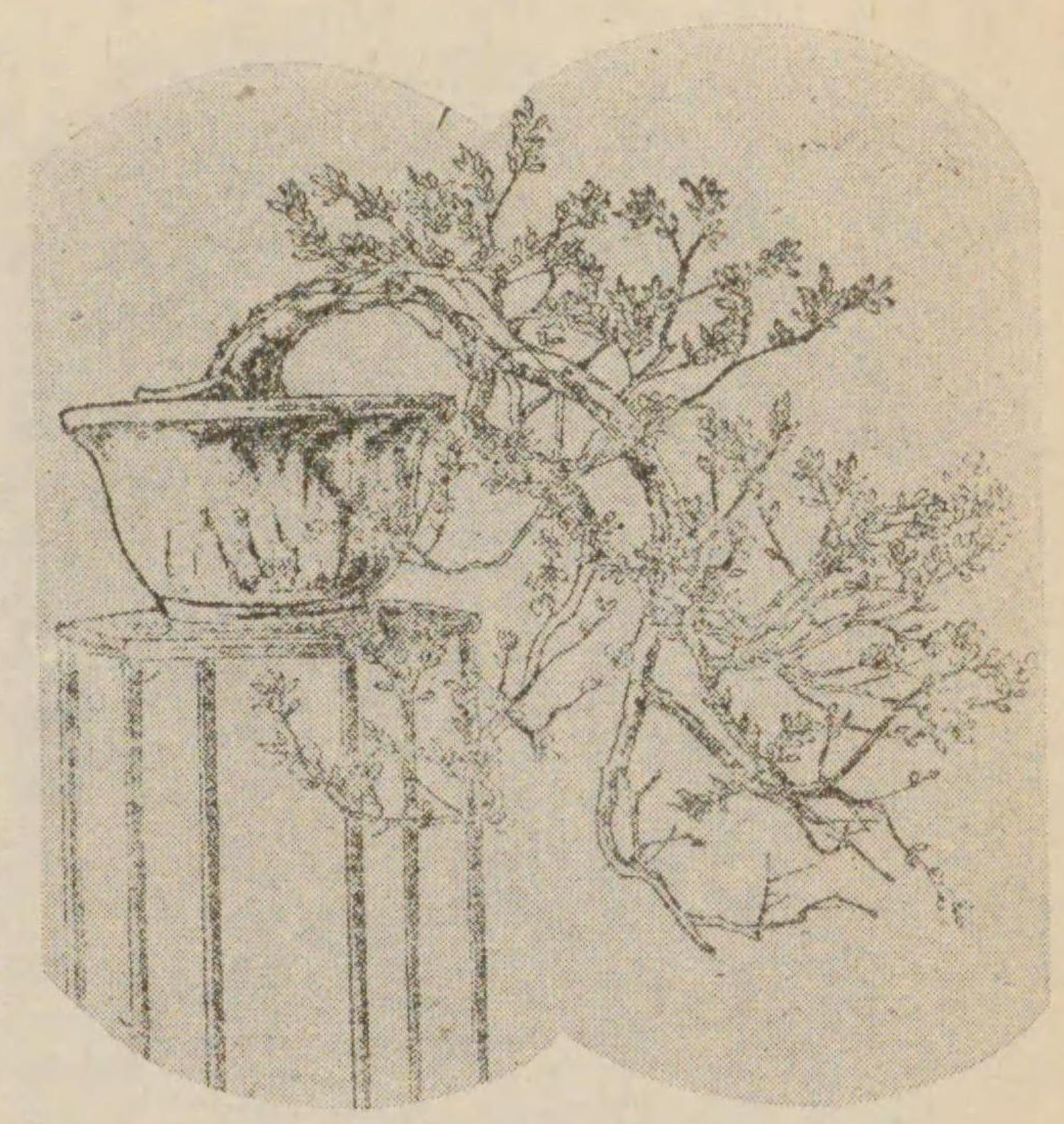
松の盆栽中遠州松に就て一の哀話有り、遠州濱松在の神職の息子なりと云へる御手洗某なる者落魄して東京大塚に移住し常に余の知れる花戸に出入したりしが當時盆栽流行の最中にて特に黒物と稱して松、栂、樅、眞柏の類の持囃さるゝ時にて玄人筋にても其の種類を手に入れることの困難なるに苦めるを見て御手洗某の云へるやう余が郷里濱松の山林には數十年經たる松の丈僅に尺に充たざるもの多く親松が鹽風に揉まれて蟠屈せるより其の實生なれば遺傳的に眞直に伸びず横に枝を張り地質の沙交り粘土なるため幹も太らず若し此の松を盆栽とせば一擧に巨利を博すべし然るに自分は漂泊人にて一錢の貯へも無しとの話に花戸某は直に御手洗を案内者として濱松方面に出向き數百本を掘り取り根拵して箱詰として東京に送り其の季節は二月寒明の頃にて、之を假植して夏の土用を過ぎ其の活著の確なるものを玄人仲間に競賣し、思ひ懸けぬ利を得しなり、土用を越さぬ中に枯れるもの約一割と云ふ初めは何人も其の出處を知らざりしが終に嗅出され後には我も我もと毎年春の初めに駿遠地方に推出し殘す處無く掘取られたりとのことなり、皆相應に利益を占めたるならんも獨り主唱者たる御手洗


遠州松

は金は人に儲けられ自分は依然として貧困に暮せり　諺に犬骨折つて鷹に攫はるとは御手洗の謂か、然れども初め事を共にせる者の善らざりしにも因るなり。

○明治年間に於ける東京著名の盆栽家

文人盆栽の流行は東京を初めとし延て京阪地方に及ぼし年を逐つて盛んとなり其頃東京にて盆栽家として名高きは京橋實母散本舖喜谷氏、伊東巳代治伯、渡邊千秋男、岩崎男、堀留の加藤金之助氏、岡田平太郎氏、猶ほ太田某、新井某の兩替業家の如き有り其他は今一々記憶せず大隈侯（當時は伯爵）は最も數多の鉢物を培養したるも當時の盆栽は掌上に載せらるゝほどのものを標準とせるより或人は大隈家の鉢物を評して「ごて物」と云はれたりとて侯は笑つて余は時流を逐つて殊更に矮小のものを擇ばぬので有ると云へりと侯の盆養物は多くは朱泥、交趾、其他支那の染付類の鉢なれば其の價格は鉢だけにても莫大なものである、因に「ゴテ物」とは無骨なる、又大きすぎるなどの意なり。



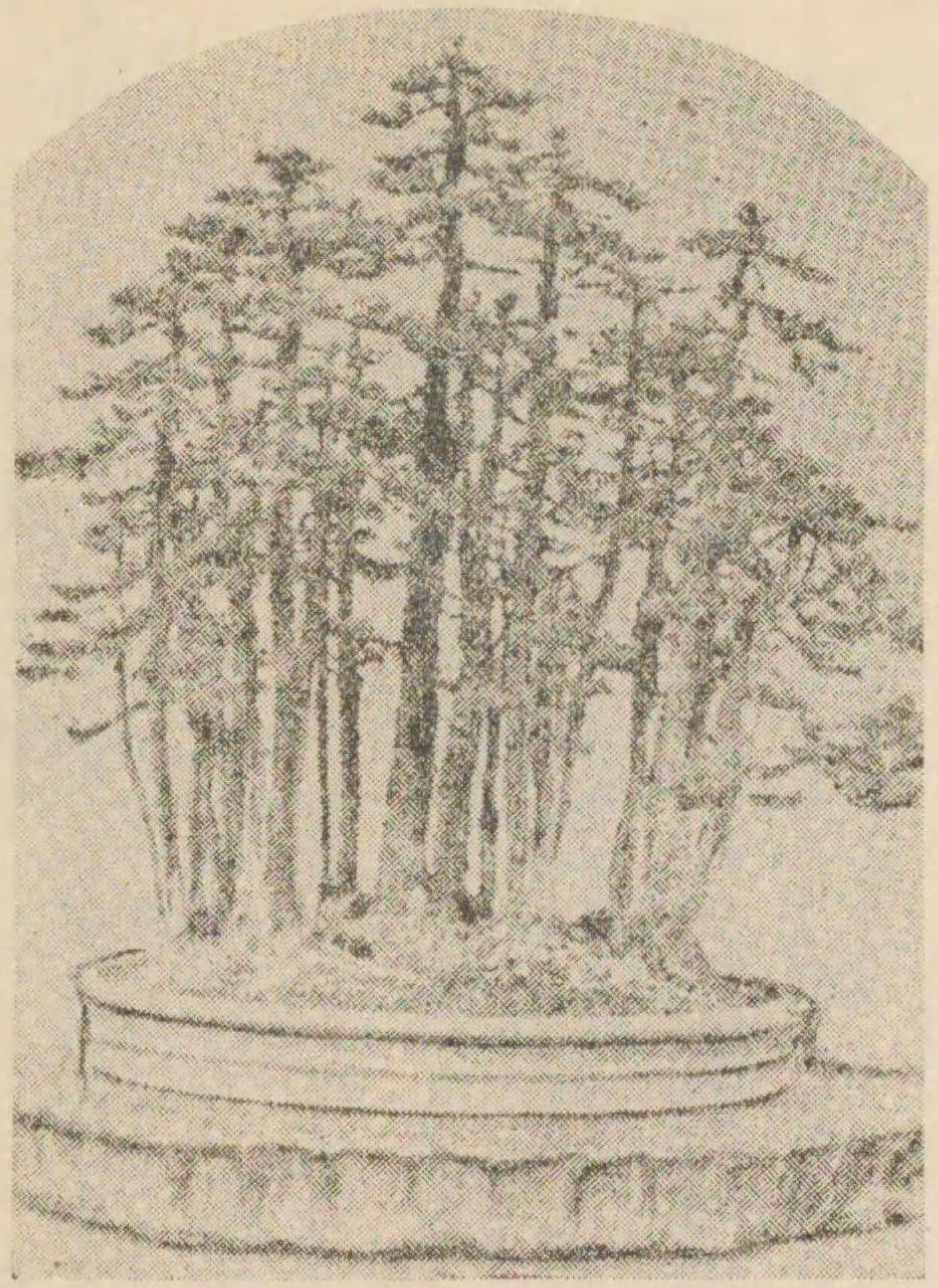
櫻桃
加藤金之助氏愛藏

前に云へる喜谷氏は江戸時代より盆栽家として世に知られたり又伊東伯の如きは長崎より始めて東京に來り一書生の頃赤毛布を被り余の知れる花戸に屢々來りて盆栽を物色せりと聞く。

文人盆栽に淺鉢を用ひたる理由

或人の盆栽とは鉢の淺いものを云ふと語りしは一の笑柄に過ぎざるも淺鉢を用ひることの多きより斯く考へしならん第一盆栽は樹木の丈の伸びるを嫌へり淺ければ根は横に張り從つて丈の伸びること無し總べす草木は立根の深きものほど丈は上に伸びる

もので、濕地又岩石多き處に喬木無きは其根の深く地中に入ることの出來ぬに因るなり。盆栽は此の理を應用したのである又他の一面には深植は體裁宜しからず盆樹との調和を得ぬもの多し、但し實付もの丶柘榴、山柹又佛手柑の類は淺鉢では十分に養分を取り難ければ普通の深さの鉢を用ひるも不釣合に見えぬのは松柏の類とは觀賞の著點の異なるに因るのである。



蝦夷松林

村田久造氏愛藏

猶ほ序に一言せんに蘭、萬年青、棕梠竹の類は成るべく丈の伸びるを望むものなれば盆栽類とは反對に鉢の幅よりは割合に深き堅長のものを用ひる體裁も亦良し。

支那古代の盆栽

我邦では此に述べたやうな盆栽物は恐く明治時代に入つてよりのことで有らふ、彼の日野資朝卿が棄擲したと云へる盆養樹とは全く趣が違ふやうで有る然るに支那では古くより我邦現今の盆栽と同樣の趣味のものが廣く愛觀されたやうで有る五石瓠と云へる書に次の如き文有り。今人以盆盎間樹石爲玩。長者屈而短之。大者削而約之。或膚寸而結果實。或咫尺而蓄蟲魚。概稱盆景。元人謂之些子景。云々

之を直譯すれば

今人盆盎に樹石を間るを以て玩と爲す。長き者は屈して之を短くし大なるものは削りて之を約し或は膚寸にして果實を結び或は咫尺にして蟲魚を蓄ふ概して盆景と稱す、元人は之を些子景と謂ふ。

盆盎とあるは單に盆と云ふに同じ盎は盆也、水又酒を盛る器とあり我邦の洗面器に似た形のものと思へば間違なからん膚寸は數寸と云ふほどのことにて膚は扶に作れる

もあり扶は廣さ四寸とあり、些子景は小景の意なるべし、屈して之を短くすることは出來るとしても削りて之を約すとは只細く見せることの形容なるべし。

又明の王鏊の姑蘇誌に、虎邱人善於二盆中一。植二奇花異卉盤松古梅一。置二之几案一。清雅可レ愛。謂二之盆景一也。

姑蘇は地名唐詩選の姑蘇城外寒山寺と有るは此の姑蘇なり又虎邱も地名なれど有名な寺有りて士女の多く集り我邦の京都の祇園清水の如き繁華な處で有る直譯すれば

虎邱の人善く盆中に於て奇花異卉盤松古梅を植ゑ之を几案に置く清雅愛す可し之を盆景と謂ふなり。

奇花異卉は珍しい花、かはつた草、盤松は盤屈した松と云ふほどのこと眞直で無く幹のうねれるものを云ふ、几案は机で此等の鉢植を机の上に置くと云ふので其の矮小なること推して知るべし。

五石瓠は何人の著なるか不明なるも元人云々とあるより推せば盆景即ち我邦現今の盆栽と同樣のものは支那では元以前既に賞玩されしものと思はる。

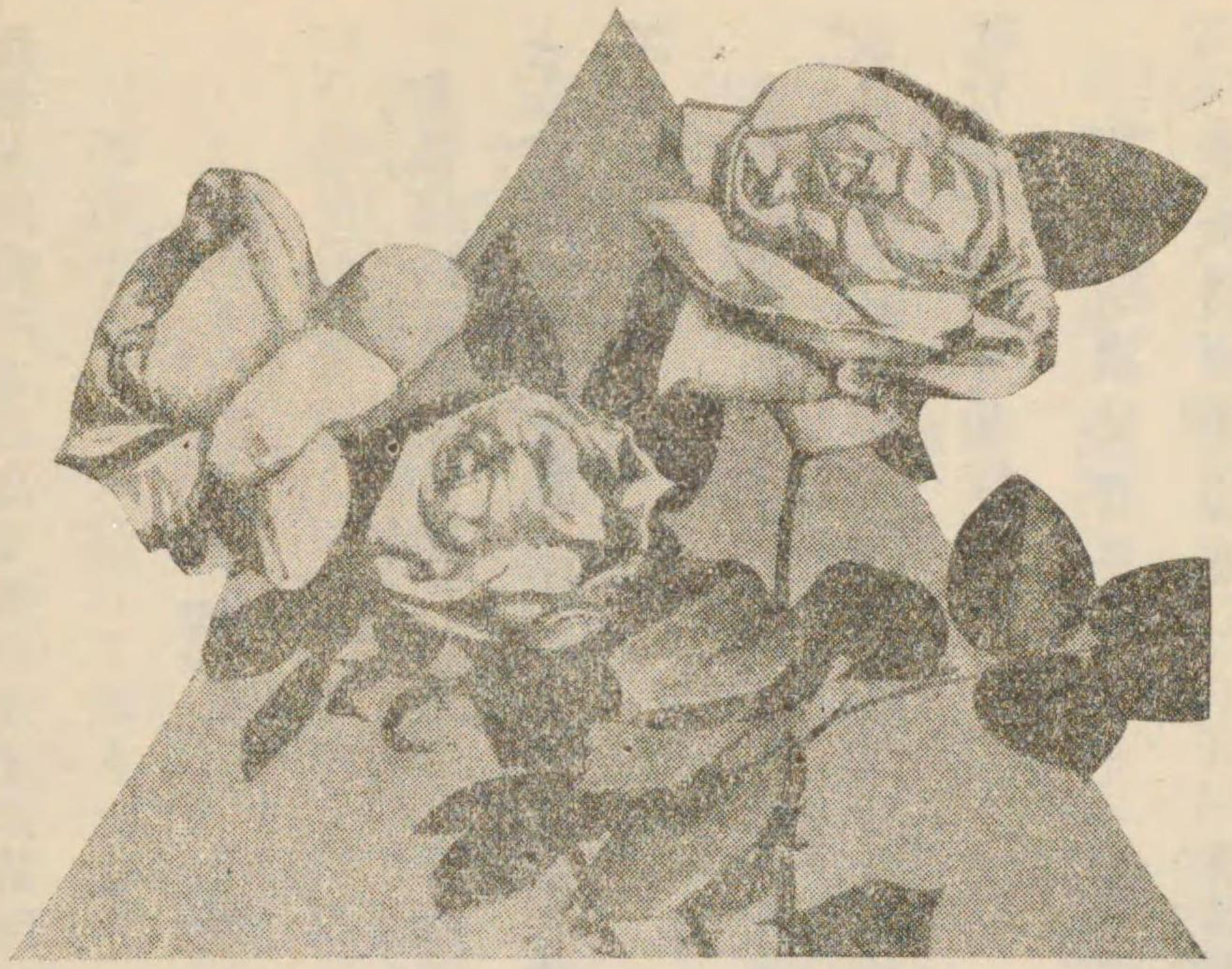
二、薔薇

薔薇は西洋の花卉中にて最も東洋趣味に適合せるは葉と花との調和好きと香氣有るとが主なる原因なるべし、花は艶麗なるも俗氣を帶びず雅俗共に愛好するは偶然ならざるを覺ゆ。

薔薇は英國の國花と云はるゝほどなるも最初東洋より輸出したるものゝ彼の地にて改良されしには非るか今より二千年前支那にては既に薔薇を鉢植として愛翫したることは左の詩にて證す可し。

綠樹陰濃夏日長。　綠樹陰濃にして夏日長し
樓臺倒レ影入二池塘一。　樓臺影を倒にして池塘に入る
水晶簾動微風起。　水晶簾動いて微風起る

一架薔薇滿院香。



薔薇

一架の薔薇滿院香し

此の詩の第四句一架の薔薇と有るは一架に載せたる薔薇を云へるので當時既に一般の花卉類を盆養することの盛んに行はれたるを知る。

薔薇は維新後間も無く我邦に輸入され其頃白黄、世界の圖などゝ呼ばるゝもの一鉢數十圓の賣買なりしことは今猶記憶せり、白黄は其の名の如く白花に淡黄を帶び香氣の特に高きを以て賞され、世界の圖は大輪の淡紅色にて瓣の重ね數個に分れ地球儀に見る東大陸、西大陸と分れたるやうな趣有る所より斯る名を得たるものならん。

其後年々新種の輸入さるゝに從ひ舊花は價も低落し且つ繁殖も速なるよりして一二年前まで一本數十圓のものも俄に一圓以内の相場となるは珍しからず大正十年前後に新花として賞美されしものゝ中より數種を摘出すれば

（一）神代　濃き桃色、千葉、花の徑四五寸

（二）慶賀　純白、千葉、蘂薄茶色花徑四五寸香氣高し

（三）御旗　濃紅、千葉、花徑五六寸

（四）磨墨　濃紅、重瓣、花徑四五寸香氣頗る高し

（五）神樂　藤紫色、千葉、花徑五六寸香氣高し

（六）豐明　藤鴇色、亂れ咲、花徑六七寸香氣高し

（七）九尾　金樺色、花徑五寸、千葉、木性

（八）神風　雪白、花徑五寸許り香氣高し

最近輸入したるもの數百種の多きに上れり、今其中の主なるものを色別により其の

名を擧ぐ。

（一）歡聲（レット、プレミャー）紅色、重瓣、芳香あり、四季咲

（二）紅蘭（シート、クロス、ホージユ）深紅色、大輪

（三）エッセンス　濃緋色、香氣高く花梗強く株立よし、此花は英國ばら協會にて優等の地位を占めたるものと云へり

（四）白樂天（カレドニヤ）白色、單瓣、花梗長くして強し、瓣端尖り、香氣高し

（五）白鶴（フリテイッシユ、クイン）雪白、重瓣、受咲、大輪

（六）含雪（ステラ、マレリン）白色、花蘂僅にクリム色を帶ぶ、千葉、盃狀、大輪、花瓣厚く完全なる盛上咲き芳香有り、棘刺幾んどなく樹性強健なり

（七）金閣（ゴールデン、オペリヤ）有名なるオペリヤの實生クリム色の中心濃黄色、花形良く高氣高し

（八）帝錦（ジユリアン、ボテン）長蕾にして重瓣、大輪、盃狀の抱咲き、葉はプローンズ綠色の輝葉なり

（九）フランシス、スコット、キー　朱赤色劍瓣、盛形咲、千葉、最大輪、芳香高し

（一〇）秋輝（ロース、バークレー）色彩は桃色に橙色を帶び、千葉大輪、盛上咲、葉は濃綠濶大、秋季の花殊に鮮明、多花性にして花の絕えること無し

ナニハイバラ

以上は何れも木性の四季咲なり、次に蔓性バラの種類を擧ぐべし。

我邦在來蔓性バラは「ハトヤ」バラと木香バラとである。「ハトヤ」バラは一重五瓣にして花容瀟灑、蔓莖なれば地上を匍匐し四五月頃開花す、東北地方の田塍間などに多く見受ること有り野生

モクカウバラ

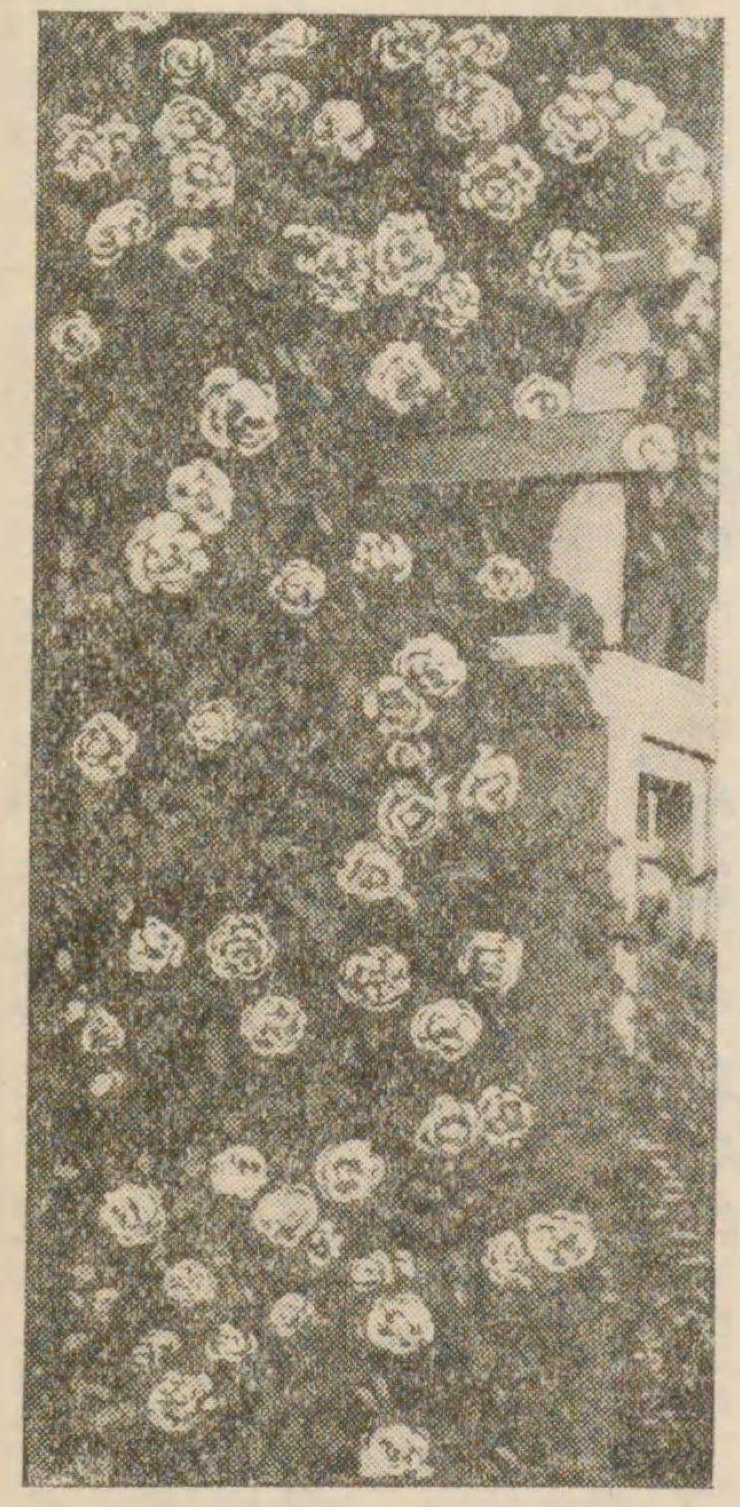
のものには紅色のもの無きも近年花戸に多く栽培せらるゝを見る。「ハトヤ」一名ナニハイバラ

木香バラは花形「ハトヤ」よりは一段小く、千葉白と黄との二種有り、梢頭數花を著け香氣高し盆養として懸崖に仕立てば頗る雅致有り、木香花一名スダレバラと云ふ。

西洋種蔓性バラの中盆養に適せるものは

(一) オレンヂ、バーフェクション　花瓣桃紅色にして花心白色、單瓣小輪房咲

(二) ジョーヂ、エルガー　黄銅色小輪房咲立性



蔓性バラメリーワーレス

(三) メリー、ワレス　半八重中輪、濃ピンク色、底鮭色香氣あり

(四) 白雪閣、エヴエレスト　雪白大輪、滿開時の偉大なること牡丹に等し

右の數種なり(興農園園藝便覽に據る)

薔薇類の繁殖法と其培養法

薔薇類は挿木にてよく根を出すもので有るが速成を要するときは接木を宜しとす、砧木は野バラの根株を用ひる、但し接木のものは年と共に漸々花の劣るものなれば之を避くるには鉢植ならば初め鉢に植込むとき接口の隱れるほどに土を盛り上げ置くなり、かくすれば二年も過ぎれば穗より根を出し初めるものである、十分に穗より根の出たるを見て砧木を切離して植直すべし斯すれば長く親木と同じ美花を著けるものである。

接木は春秋二期に行ひ春の彼岸と秋の彼岸少し早く九月に入り直に取掛るを宜しとす、接方は普通の梅櫻の接方と變りなく砧木の側面を皮を添へて七八分ほど剝べし。

穂は長さ二寸ほどに切り本の方五六分斜にそぎ砧木の剝ぎ取りたる部分に挿込み穂のそがれたる部分に間隙なきやうに密著せしめ打藁にて幾重も巻き最後に上部より藁を斜にかけて穂と砧木との合せ目より水の浸入せぬやうになしもと巻きし藁の上にて結ぶ、方法は以上述べたる如く簡單なれども刄物の鋭鈍と手練の熟否とに因り其の結果に大なる差ひ有り接木の濟しものは圃に砧木を斜にして植込み穂のかくるゝほどに土を盛り置くべし、春なれば一箇月も過ぎ穂より新芽を出すを見て周圍の土を拂ひ除け眞直に植直すべし。

挿木も春秋二季彼岸の頃行ふを良しとす、鉢に挿込む前に其の土中に油粕などを交ぜ置けば根の出し方早し。

移植と鉢に取る季節は冬季と眞夏の炎暑中の外は何時にても差支無けれど春秋彼岸の頃、最も宜しとす。

冬季は盆植のものは鉢を土中に埋めて凍らぬやうになし、上に霜除を爲せば葉の枯損することなく、春になりて花を著けること早し、温室又温床ならば冬季中にも花を著る。

三、仙人掌（サボテン）

「サボテン」の漢名仙人掌は其の形に因て名付られたもので史記漢武帝紀に作㆓柏梁銅柱。承露。仙人掌之屬㆒。注に仙人手掌を以て盤を擎げ、甘露を承る也と有り。

支那産サボテンの原種は平扁手掌に似て毎年頂點に一枚を生じ今歳頂點の左角に一枚生長すれば來年は頂點の右角に一枚を生じ左右交互に層纍して上に伸び行くさまは我邦にて束帶の時に用ひる笏を倒にして竪に接續したるが如き觀有り、植物中の最も奇異なるものである。

秘傳花鏡に之を家中に植うれば火災を鎭すべしと有り。防火の厭勝になると見ゆ。

原種の「サボテン」は今は茨の垣に代用さるゝ位のもので鉢植には見ること少し。

原種と大小の別あるも其の形狀、樹性と稍近きものは現今の銀世界、赤烏帽子などで

有らう、皆メキシコ産なり。
サボテンは又覇王樹、覇王鞭の漢名有り、又サボテンは石鹸より轉じたもので物に油の著きたるを能く吸ひ取る故に名とすと言海に見え、支那の辭源にも、嫩幹之液、可㆑去㆓衣垢㆒。と有り、此等の説に據れば石鹸に代用せること有りしものと見ゆ、又辭源に實多㆓毛刺㆒熟可㆑食。と有りサボテンの實の食用となることも曾て聞ぬことである。

香花丸

仙人掌の元産地は大部分中部亞米利「メキシコ」とせらるゝも熱帶地方又亞熱帶の地には自生のもの多し、南米ブラジル、アルゼンチン、北米テキサス、カリフオルニヤ其他阿弗利加又支那の南方、臺灣の南部にも自生のもの多し。
サボテンの輸入は横濱開港後間も無きことならん、明治以前に鉢植として賣出されたるもの有るを今猶ほ記憶せり、近年は其の種子を輸入し實蒔にて繁殖すこと行はれ、其の種類も數百に上り猶ほ新種の輸入するもの年々益す多し左に形狀の最も異るもの數種を擧げて其の一斑を示さん。

カニハサボテン

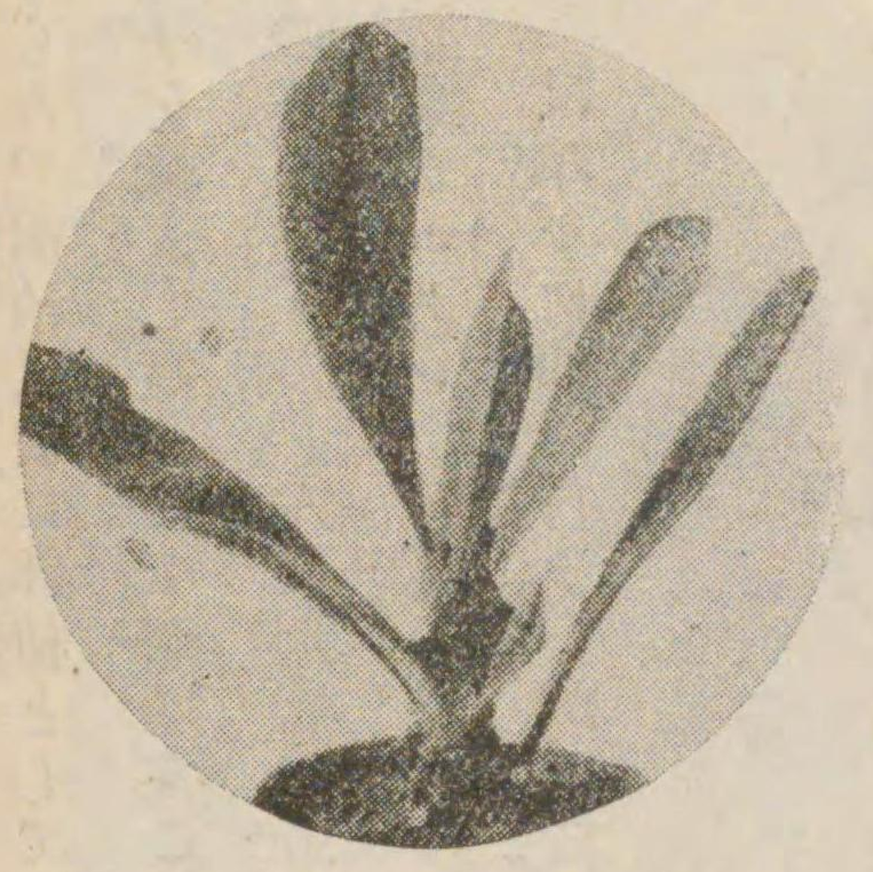
蟹葉サボテン　葉の左右に缺刻ある狀、蟹の螯に似たる所より斯く呼ばれ其の葉は年々に伸び行きやがて枝となるのである每葉その先端に長さ二寸徑一寸ほどの漏斗狀の紅紫色の花を著け十一月頃より開き清楚愛す可し、冬期花の乏しき時なれば特に歡迎せられ、今は到る所に見受けらる、原産は「ブラヂル」なりと云ふも臺南にも自生のもの多し。
瑞雲丸　莖は扁圓形濃綠褐色の横縞あり頂部に直徑一寸位の淡綠色、重瓣の花を著く、四季咲にして著花殊に多し、南

米バラクエーの産なり。

七寶樹　莖は圓筒形にして三出複葉を出す莖には濃藍色の縞あり初夏の頃、莖頂に白色中輪の美花を著く。

香花丸　莖は楕圓形にして白刺密生す、花は純黄色徑一寸許り、香氣高し、百合花の如き薫り瀰漫す。

銀世界　原産メキシコなりと云ふ團扇形にして白き長刺あり「サボテン」の原種に近いもので有る。



麒麟角

麒麟角　圓筒形の柱狀の莖に六稜角あり、莖の伸びるに從ひ長さ二三寸の厚き綠葉を出す、裏面白色、此の葉壯大となればその側部より小枝を出す亞弗利加の原産なり。

（京樂園趣味之仙人掌に據る）

夜會草　臺南地方に多きサボテンの一種なり、

莖葉共に淡綠色、葉は厚く肉樣にして長く幅二三寸缺刻あり、莖の丈二尺より長きは四尺以上に及ぶ、七八月頃莖頂に尖銳なる重瓣白色の花を開く、花形大體他のサボテンの花と異ならずその花の開くは午後十時頃にして朝は早く萎み晏起すれば見ること能はず故に一に夜開草とも云ふ花は比較的優雅なり。

サボテンの繁殖法と其の培養

サボテンの繁殖法は播種と挿芽とである。

挿芽　親莖の種類によりそれ〴〵豆粒大より指頭大の子を根元又莖の側面に生ず、夏季之を搔取り砂土の中に淺く挿込むべし、サボテンは水分多ければ腐れ易きものにて之を防ぐためにその搔口に灰を著けて挿すを宜しとす、常に多く水を灌がず何時も乾き目にすべし。初め四五日間は强き日光と風とに當てず雨天のときは雨のかゝらぬ處に取込むべし、一箇月も經れば十分に發根す。

猶は挿芽の外に莖を横に切りて其の切口に灰を塗り一日日に當てゝ土中に植込めば

一箇月も經れば根を出す、又元の莖の方の切口は自然に皮の生ずるもので有る、莖の長きものは三箇に切るもよし。

播種　夏季淺き瓦鉢の口徑六寸深さ三寸位のものに川沙を鉢の三分の二位まで入れ之に種子を播き更に大形の水盤の中に此の鉢を入れ水盤には水を少し入れて鉢底より水分を吸上げさせるのである、鉢の上は硝子板にて蓋をすべし硝子は晴天には日光を透し雨天なれば雨水を防ぐためである。一週間より三週間位の中に發芽す。

種子は近來は國内にて培養せるものにも結實するものあり、但し發芽力の弱きは氣候の關係上如何とも爲し難し。例へば芭蕉は臺灣小笠原島の如き熱帶地なればよく結實するも內地にて實を結ばぬは溫度の不足に因るなりサボテンも我邦にてよく結實せしむるは稍困難なるべし。

養土と肥料

畑　土　五　輕鬆（サラサラシタ土）なるもの宜し粘土質のものは害あり。

腐　葉　土　三

川　　沙　二

右の割合に配合したるものを適當とせり、但し腐葉土の代りに藁を腐らしたるものもよろし、何れもよく腐化したるものにて十分乾燥せるを見て後に用ひるを安全なりとす。

猶ほ種類により孔雀サボテンの如き丸形サボテンと違ふものは腐葉土を主とし其割合は腐葉土六、畑土三、川沙一、とするをよしとの說有り。

肥料としては油粕を溶し之に水を加へて薄くしたるものを與ふべし施肥の季節は夏の初めより土用明の頃まで二三回與ふれば可なり。

植込に用ひる鉢は他の盆養物と違ひ成るべく小さきものを擇び丸形のものならばサボテンにて鉢一杯になる位にてよし蟹葉サボテンの如き丈の伸びたるものは口徑の廣く扁平たきものを用ひて其の釣合を取る其他の種類にありては口徑廣く尻の窄めるもの

を用ひて一般に素焼ものを撰ぶべし。

前に述べたる蟹葉サボテン又孔雀サボテンの如き丈の伸びるものゝ養土は鹿沼土と水苔とを等分にして用ひるを宜しと云へる説有り。

防寒法　冬は「フレーム」に收容し硝子板にて蓋を爲し日中は硝子を透して日光に當て夜は莚又菰を掛けて十分に寒氣の防ぎを爲すべし又二三鉢のものならば縁側の隅などに取込み置くもよし。

猶簡單なる方法としてはサボテンを鉢より拔取り乾燥して紙袋に入れ室内の稍〻温き處の天井などに吊し置き翌春舊の鉢に植直せば夏の初めには青々と元氣を回復す、但し此方はすべてのサボテンに行ふことは出來ぬ重に丸形もの又丈夫なるものならば差支なし。

害蟲驅除　サボテンは普通には害蟲少きものなれども時としては貝殼蟲又「スリップ」に襲はれること有り之を除くには「アルコール」を二十倍乃至三十倍に水で薄め毛筆にて蟲の付きたる莖に塗れば容易に驅除し得べし。

四、紫金牛（カウジ）

紫金牛は漢名なり、和名藪柑子又ヤブタチバナ、山タチバナなどの名有り、古くより世に知られしと見え古今集、紀の友則の歌に「我戀を忍びかねてば足引の山立花の色に出ぬべし」と詠める山立花は今のヤブコウジのことなり、コウジの實の色の赤を心の誠に比して詠しものなるべし。

常綠の小灌木、丈四五寸より一尺ほどに及ぶものあり葉は厚く縁に鋸齒あり互生にして楕圓形又長卵形のものあり。花は帶黃白色にして夏日莖頂の葉間より小花梗を抽き開花後南天燭に似て稍小なる赤色の實を結ぶ。

一種蔓カウジと稱する稍蔓狀にして地上に匍匐するものあり普通之をヤブカウジと呼ぶ新年橙、交讓木などと共に飾物の中に加へらる。コウジは好事と同音なるより新年を祝する意に用ひしものなるべし。

産地は林間の樹木の間、又その根元に繁殖し耐寒性にして關東より北陸地方の林間には到る處に之を見る。明治二十年頃紫金牛の葉變りもの〻大流行せること有り新潟縣の市島氏の培養せる朱の司は一鉢千圓にて買入れしものと聞けり其の流行熱の旺盛なるは天保時代の萬年青の流行當時を偲ばしむるもの有り、之が爲に正業を擲つ者も少からざるより新潟縣知事は其の賣買を禁じたり然るに最近また其の流行を一部數寄者の間に見るに至れり、其の種類の主なるものを擧ぐれば

朱　司

朱の司、一に日の司とも書く、新葉深紅にして最も美觀なり。

宇宙の司　錆地に白斑入り

松島　白地に青、莖赤し

東洋　黃覆輪、虎斑入

八州　白覆輪、偕變

君が代　黃覆輪、厚葉

京錦　白覆輪、白木斑

鷄冠　黃覆輪、鷄頭白

黃金花　光澤有る金覆輪

大陽　黃覆輪、白偕變

御代錦　莖赤く黃斑入り

帝冠　黃覆輪、白

金光　淺黃覆輪、白

鴉澤　黃中押赤莖

舞衣　雪白覆輪、青

波の光　淺黃覆輪

福包　黃覆輪、白偕變

御寶錦　　黄中押、白斑赤軸

（以上名稱與農園園藝便覽に據る）

繁殖と培養

カウジは前に云へる如く林間樹陰枯葉の推積する處に繁殖するものなれば輕鬆の土に適し粘土性の重き土には適せざるべし。されば變種物の鉢植には普通水苔と腐葉土に植えるを常とせり水苔も腐葉土も無き場合は林間の上土の輕きものを篩ひ之を代用するも宜し。水分は多きを厭はず一日に二回位灌水すべし。肥料としては油滓を溶解して時々用ひるを宜しとす初冬降霜前に薄き追肥を施し温室か又は霜雪を防ぐ覆の下に圍ひ凍らぬほどの手當を爲せば宜し。

繁殖法は播種と挿芽となれども變種のものは容易に實を結ぶことなかるべし稀に實を結ぶこと有りとも實蒔なれば多くは原種に還り普通のヤブカウジとなるか或は時に親種と同種のものを得るか又一種變りたるものを得るかは確と定め難し。

分根と挿芽

根分は春彼岸の頃より行ふ、幹は何れも初め根莖より芽を出したるものなれば根分のときは必ず幹と共に根莖を添えて切離すべし切離したるものは一本宛鉢に植込み五六日間日に當てずよく根著たるを見て簀の下に出し半ケ月ほど過ぎて薄き油滓の汁を與ふべし。

挿芽は入梅の初め頃頂芽より下一寸五分乃至二寸ほどの長さに切り之を赤土玉（赤土粘土をよく捏ねたるものを拇指頭大の團子としたるもの）の中に本の方五分ほど挿込み鉢か又露地に植込み日除と雨除とを兼ねたる覆を三尺位の高さに造り半月も過ぎその覆を取去り、よく發根せるものは他に移植すべし。

五、皐月又杜鵑花

サツキは漢名杜鵑花、支那にて此花の咲く頃盛んに杜鵑の鳴くより斯く名付しものにて漢詩に杜鵑花を詠せるものを多く見ず宋の眞山民に杜鵑花の詩あれども比喩に用ひられしものにて杜鵑花に適切ならず和歌俳句にも未だ見受けず、次の絶句は杜鵑花を題とせるものに非るも此に掲げて本題に代へたり。

疎林密竹兩三家。滿袖薰風一路賒。
兩足秧田蛙鼓鬧。深叢紅放杜鵑花。

疎林密竹兩三家。滿袖薰風一路賒なり。
兩足つて秧田蛙鼓鬧し。深叢紅は放つ杜鵑花

初夏郊外所見　九皐

我邦にては陰暦の五月の異名を早月と云ひ、支那は古くより皐月と書きて同じく五月の異名とす今は專ら皐月の字を「サツキ」とよませ「サツキツツジ」の代名詞とせり、我邦にて此の花の咲ける季節が早月の頃なるより斯く呼び往時は「サツキツツジ」即ち早月に咲くツツジと云ひしを後に略して單に「サツキ」と呼ぶに至れり但し支那の杜鵑花は我邦の「サツキ」と大體は似たる所有るも全く同一のものに非ずと云ふ。

今より二百三四十年前貞享、元祿の頃皐月と躑躅とは流行の全盛を極め其の種類も驚くべきほどの多數に上り當時の著書に載せたる花名は皐月のみにても其數百五十種を下らず其の盛況は今より想像するに難からず然れども當時は主として躑躅と共に庭園に植えて觀賞し鉢植とせるは稚木若くは新種の珍花に止まりしものゝ如し。

其後文化文政の頃に至り一般流行の盆養物は立花、松葉蘭、萬年青類を初めとし專ら斑入ものに移り苟も斑入とさへ有れば交讓木、八角金盤より、路傍の芣苢、野原の薄に至るまで珍賞する世と爲り、今猶ほ斑入の草木を見受ること有るは當時の流行の餘波と云ふ可きか。

流石に一時流行の盛んなりし皐月、躑躅の類も復た顧る者無きに至りしが物變り星移り王政維新の世となり明治初年より文人盆栽の流行は全國を風靡したるも明治の末年に至り其の熱の稍冷却せると同時に幾んど二百年以來沈淪して世に知る者無りし皐月は勃然と擡頭し大正昭和に亘り其の流行の迅速にして區域の廣汎なること各階級を通じて流行の視線は盡く皐月に集注したり。

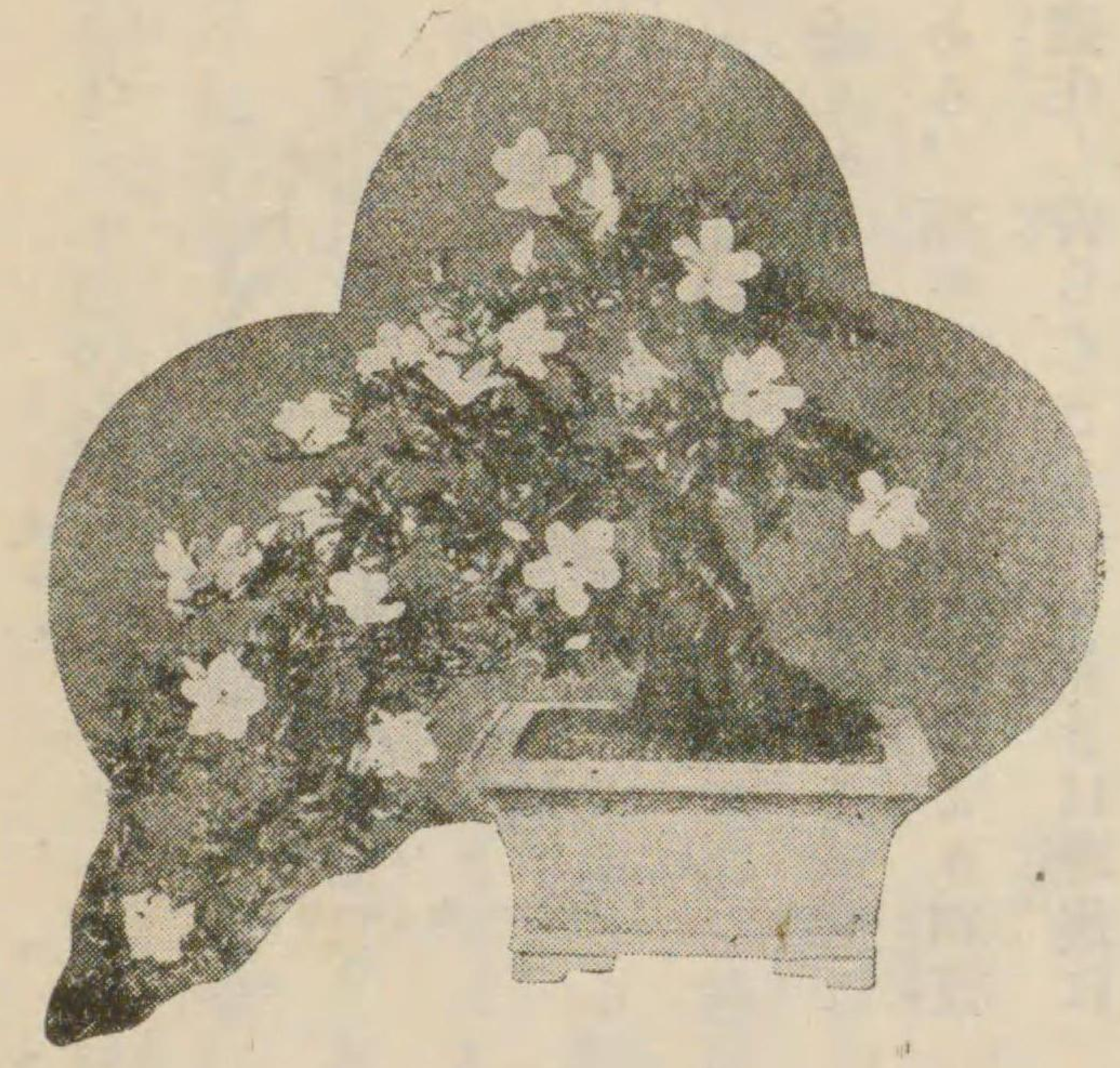
皐月が斯く未曾有の流行を來したるは比較的繁殖法の容易くして培養も困難ならず

寒暑にも傷まず何人にも扱ひ易く價も普通品はさほど高價ならざる等は流行に大關係有るは勿論なれども猶ほ其他に見逃し難きことは第一に「サツキ」の樹性は幹枝がよく締り現今の盆栽物に適せること第二は石楠科の植物なれば花品の濃艶に過ぎず、さりとて澹泊に失せず雅俗共に觀賞に適すること、第三は常綠葉植物なれば花時ならざるも樹形の古雅なるものは常に觀賞の價値有ること第四は繁殖の容易なるより利殖の意味も加はれること、以上擧げ來れる件々は流行を盛んならしめたる最大原因とも云ふ可きものなり。

躑躅花と皐月とは同じ石楠科の植物なるも樹性には大分の違ひ有り躑躅類は一般に高燥の地に適すれども皐月は之と反對に濕地又樹陰にてよく繁茂す、又多くの人の氣の付かぬものであるが皐月には全く花を著けぬもの有り俗に盲目皐月と云ふ花を著けぬ代りに葉は冬季も其の色青々として活氣有り、往時は築山の岩石の間などに多く植込まれたものである。

「ツツジ」「キリシマ」の類は灌木なるも其の丈の軒端に届くほどのものを往々見受ること有り、之に反して皐月は多く横に擴がり幹の眞直に立つもの少く從つて其の丈の五六尺以上に達するものは甚だ稀である。

「ツツジ」「キリシマ」には花の赤色のものは幹も褐色を帶びたるもの多けれども普通の皐月の幹は其色多くは灰白若くは暗黑色である。



松波懸崖作り

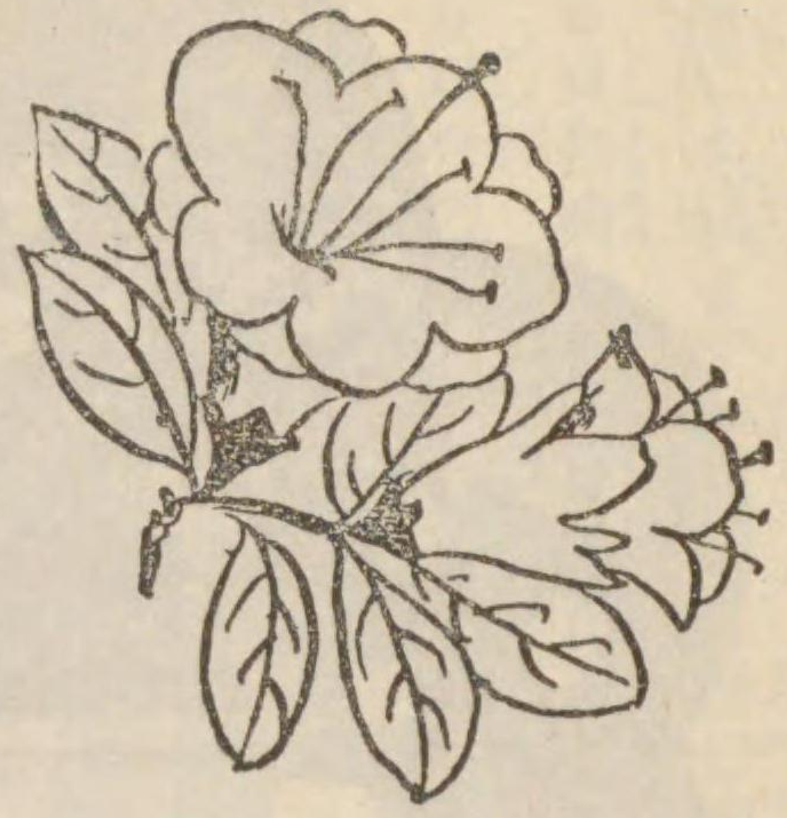
皐月は新芽伸び終りて新葉となれる頃に花を開くより觀賞上如何にも其の調和の宜しきを得たるも「ツツジ」「キリシマ」類は開花の早きもの多く古葉枯葉の花の周邊に附著するもの有つて其の美觀を損することあるは甚だ遺憾なり。

「ツツジ」「キリシマ」類は葉形は大なれども冬季凋落するもの少からず然るに皐月は葉形小なれども厚くして雪霜に抵抗する

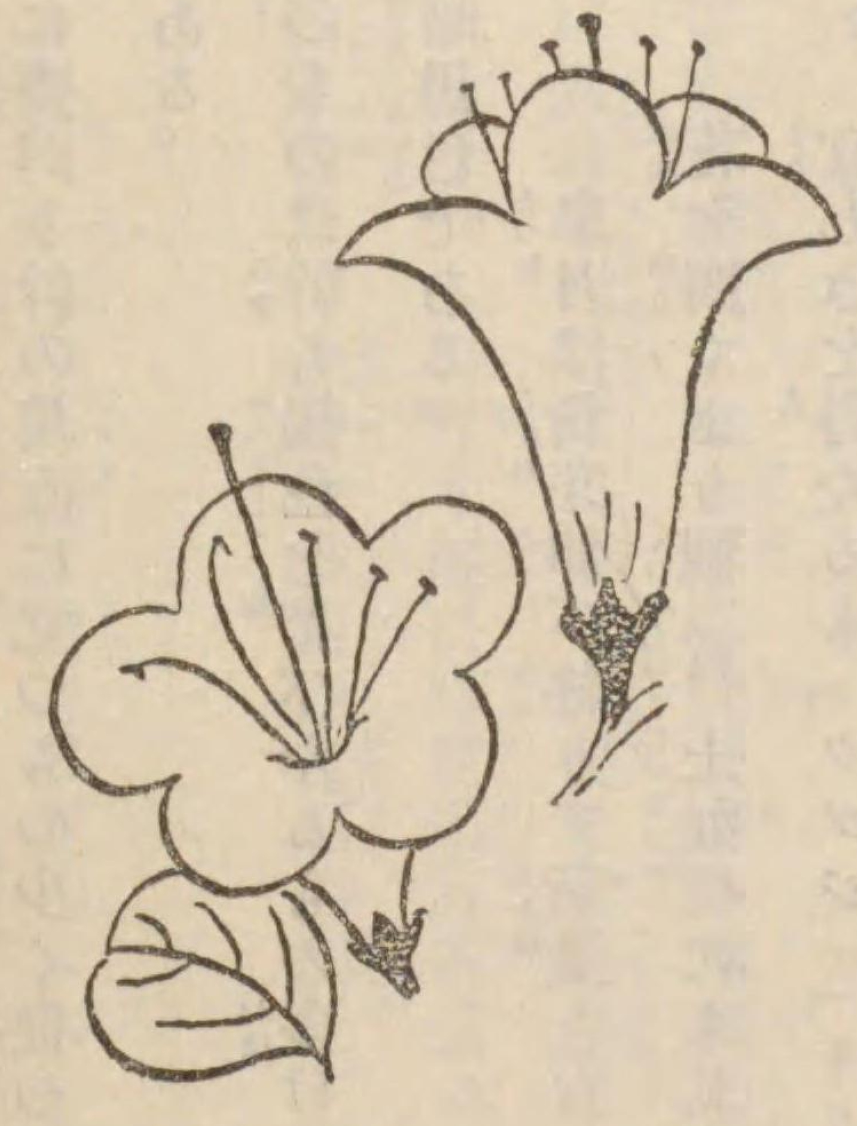
力の強きことは、他の常綠葉樹と幾んど異る所なし。

以上は大體に於て皐月と「ツツジ」「キリシマ」類との差違の點で有る。

猶ほ皐月の種類中に加ふべき「コキンシバ」と呼ばるゝもの有り、花は普通の皐月と違ひ朱



フヂバカマ



コンアサガホ（サツキ）

色の赤で燃え立つやうな映へた色である、極めて小灌木で根株より細枝叢生し幹らしきもの丶無きは野邊に見受る草ボケ（一名デナシ、又シドメ、とも云ふ）と略同樣にたゞ地面に著いて横に廣がるのみである、花を多く著けると其の色の目覺めるやうなるとを愛して多く庭の飛石の周圍、土手の上などに植込まる、開花の時期早く、早咲のツツジと同時に咲くよりして皐月と呼ばれぬので有らう。往時春咲く皐月有りと云はれしは恐く此の「コキンシバ」を指して云へるならん、未だ其の本名を聞かず識者の示教を俟つ。

繁殖法

鉢植物の二三個も持つ程の人は皐月の繁殖法位を知らぬ者は無いが順序として一と通り其の要點を說くべし。挿木の季節は五月下旬より六月末頃までを宜しとす挿木に用ひる枝は其年の夏の初めに伸びたる新枝は活著後發育が好いと云はれるが餘程勢力の有る若木でなければ挿木に適するほどに新芽が固らぬもので有る。普通は前年の枝を三寸位に剪り、但し皐月は梅櫻などと違つて一つの節より三四本に分れて新芽を生じそれが伸びて枝となり其の枝の先端に一つの節を生じ此の節より前と同樣に數本の新芽を生ず此のやうにして一年一年と枝の數を增すもので有る。此の節を附けて挿せ

ば發根も發育も早いのである其の方法は前に云へる挿木にすべき枝の元の方を斜に少し削り、準備し置ける土中に一寸位の深さに挿込むべし。挿木又は樹木の假植は、直立よりは斜なるを宜しとす、斜なれば水を吸上げるに易く、風に揉れること少く、日光の直射を避け自然傷みも少い譯である。

挿木と挿木との間隔は餘り密接せぬ位にてよろし新枝の軟弱にして挿込めば折れ易きものは箸にて土を穿ち其の穴に挿込むべし。

挿木後一月位は日除をすることと、强い雨に打たせぬこと、直面に風に吹曝されぬ防ぎを爲ること等で有る。但し雨も小雨ならば反つて當た方が好と思ふ、又晴天ならば夜露を承けるやうに夜は日除を取去るべし、晴天つゞきの間は一日に一回朝又は夕方如露にて少量の水を注ぐべし。

少量の挿木にて植木鉢又明箱類に挿込むときは水の停滯せぬやうに注意し植木鉢なら底の方に木炭を入れるか、又大なる土塊を詰めるもよろし、若し箱の類ならば明炭俵を幾枚も重ねて敷き其上に土を盛るべし、すべて鉢植物は水分の停滯することを忌むもので此は鉢の土が水分のために冷却過ぎるよりして植ゑたる草木の生長力を阻止し、又細根のものは腐朽する惧れ有り特に挿木類は土の冷却より發根を促さぬことあり、地面に植ゑたるものでも、水分の多きは好まざるも大地の地熱に因り全く冷却することの無きものなれば鉢に植込みたるものとは大分差違有り。

用土は芥溜の土、又汚泥などの外は如何なる土を用ひるも障り無し、但好く篩ひ土塊や礫を去り稀には水苔を剉み土に交ぜて用ひると云ふ說有れども單に發根を促すまでのことならば土のみにて差支なし。

往時は赤土（赤色ルーム）をよく捏ねて團子程の大きさに丸め其中心に挿木の元の方を五分乃至一寸位挿込みその團子を付けたるまゝ土中に斜に植込んだものである、此の赤土は赤色を帶びた一種の粘土にして有機物を含まず適度に濕氣を保存するもので灌水せざるも乾燥の惧れ無く又餘分の水分を停蓄せざるより挿木の腐敗をも防ぐのである、山茶、茶梅、柏類の挿木には以上述べたるやうに行ふを普通と爲たり皐月のやうに活著易きものは團子を省くも差支なからん。

皐月の接木に就ては未だ聞かぬが既に試みし人有るやも知れず、すべての樹木は、挿木にて活著ほどのものは接木を行ふことの出來るもので有る皐月も往時のやうに單に花の美を愛することのみに止まるものならば接木などの煩はしき手數を掛る必要無きも今は盆栽として雅致あるものを愛する風盛んなれば前に云へる盲目皐月、又躑躅キリシマの古株にて盆栽に適するものを選び之に皐月の珍花を枝接せば一層觀賞の價値を增すことならんと思はる。枝接の方法は臺木の幹又は枝の適當と思はるゝ處に幾箇處にても外皮を附けて竪に長さ五六分位削ぎ其のそぎたる間に穗枝を挿入れ、外皮にて被ひ麻又厚紙にて幾回も卷き固く結び外部より水の浸込ぬやうにすべし、穗枝は長さ一寸五分乃至二寸位とし本の方を一面斜に削り、此の削りたる處は臺木の削ぎたる處に密著するやうに爲すこと肝要なり、之に用ひる「ナイフ」又小刀は最も鋭利なるものを用ふべし。

凡て接木は何れも簡單なるものなれども、其の著と不著とは手腕の熟練と否とに由るものなれば一二回失敗せりとて見限るものにあらず繰返し度々試みる中に自然要領を得るに至るべし。

枝接せるものは半月位は雨にも日にも當らぬ處に置くべし、但夜分晴天ならば夜露を承けるやうにすべし。若し臺木が地植のものならば雨除と日除をせねばならぬ、一日一回如露にて接穗に灌水すべしされど多く水を注ぐべからず若し水の接口に浸込こと有れば接著せぬもので有る。

肥料

苗木と盆栽とでは肥料の種類を加減すべし、苗木は專ら其生長を謀るもので有れば之に適する肥料を用ひ、盆養のものは枝幹の生長を望むものに非ずして其の勢力の衰耗を防ぎ毎年花を多く著けるを目的とす。されば苗木類には油粕を水に溶かして稍薄目にしたるものを度々與ふべし。

盆栽の古木には油粕と鯡とを水に浸し十分に腐敗したるものに木炭の粉末、又藁灰などを加へ笊にて滓を去りて澆ぐべし、又之に米糟を混ずるもよし。

施肥の時季は春の彼岸の頃二三回、花後秋末まで二三回與ふべし。

秘傳花鏡に杜鵑花は切に糞水を忌む宜しく豆汁を澆ぐべしと有り。

或槖駝師の話に石楠花には人糞を忌むと云へり石楠花、杜鵑花、躑躅類は同科の植物にして根の構造全く同じ。されば杜鵑花に害有りとすれば躑躅にも石楠花にも有害なりとせざるを得ず、余は少壯の頃石楠花の鉢植を多く仕立たること有りて肥料として薄き人糞を用ひたること有るやうに記憶すれども、五十年も前の事なれば確と覺えず。

鉢植物の肥料は植込まれたるもの丶十分根著きて勢ひ良きものならば二三の種類を除き下肥の古きものを薄めて用ひるは有效にして無害なりと信ず肥料の爲に傷むこと有るは施肥の時季の早きに過ぎると濃厚なるとに因ること多きやうなり。

杜鵑花は開花後花心に米粒ほどの種子あるを見る樹の勢ひを保たしむるには花後油斷なく此の種子を摘去るべし。

冬季は葉の色を損せぬ爲に雪霜にかゝらぬ所に置く。又露地ならば鉢のまゝ鉢の見えぬほどに土中に埋め片庇の屋根を造り日のよく當るやうになすべし。

盆養の土は近來一般に鹿沼土を用ひるもの多きも鉢數多ければ畑又は庭前の土をよく篩ひて用ひるもよろし。

害蟲驅除

害蟲の種類も多く有るが殊に皐月に附易きは軍配蟲、蕾蟲で有る軍配蟲は其の成蟲の形狀の軍配に似たる所より斯く呼ばるゝもので此蟲は皐月の葉裏にたかり葉液を嘗めるので葉は薄く吉野紙のやうになり木の發育も止まるもので有る。

又蕾蟲と呼べるもの有り蕾の側面より小穴を穿ちて花心に侵入するもので極めて微小なる茶褐色の蟲である、此蟲の害に罹りたるものは蕾は枯死するもので外觀に變り無きも花時に至りて開花せぬものである。

害蟲驅除劑は近時其の種類も頗る多きやうなれど何人にも使用し易くして草木に害無きは今津の殺蟲劑がよいとのことで有る其使用法は效能書に記載し有れば改めて說

明せず、前に擧げたる害蟲の驅除又は豫防にはすべて盆養のものは鉢を斜にし噴霧器にて葉の裏面に灌ぐべし灌ぎ終らば樹の根元に清水を注いで藥劑の鉢の中に侵入せるを洗ひ去るべし、但し今津液は草木に害無しとのことであるが念の爲に附加へて置くのである。

驅除法を行ふ時期は鉢を園の中より出したる後、卽ち八十八夜前後に行ふべし。

鉢の選擇

皐月に用ふべき鉢は蘭、萬年青の鉢の如く一定の型に由らぬことは他の盆栽類と同樣で樹形根張の工合に由つて其の大小、方圓、深淺を擇び適合か不適合かを考ふ可きである、但し文人盆栽の鉢は重に淺いものを擇べども皐月は普通の鉢物と同樣の深さにても其の釣合を失ふやうなことはない。横に擴がれるものは平たき鉢を用ひ之に反して幹の丈稍伸びたるものは深目の鉢にても決して見惡きものに非ず。

すべて不釣合に深い鉢は盆樹の勢力を保存する方より云へば至極宜しけれど何となく不恰好に見ゆるものである。

形は眞丸眞四角よりは楕圓又は長方形の方が趣きを添へる。

鉢の質は概して硬質ならぬものを擇ぶべきは他の盆養樹と異ならざれど土器鉢は仕立鉢としては至極適當なれども觀賞用に適せず普通は常滑燒位が適當なるべし稍上品な物を好まば支那産の朱泥烏泥又交趾燒など宜しからん、鉢は無地なるを宜しとす靑花は皐月には適當せぬなり。

盆養物の觀賞の際感じの好惡は植込方の巧拙に大なる關係有り常に盆栽を培養するほどの者は其の植込方にも熟練して手際好く決して素人臭き見惡き植方はせぬもので有るが素人は概して鉢に土を盛り過ぎる僻有り此は見惡きのみならず灌水の十分に鉢の中に浸込まぬ惧れ有り、まづ鉢の上端より小鉢ならば五分大鉢ならば一寸程鉢の緣の見ゆるほどあけおくべし。

皐月の種類

近年流行する皐月の種類も年々其の數を増し其の名を一々記憶するは容易に非ず此に小林憲雄氏の著「サツキ」に載せたるものを更に色別に由て分類し、左に其の名を列記す。

狂獅子

紅色の部

一 大盃　紅色の一重大輪

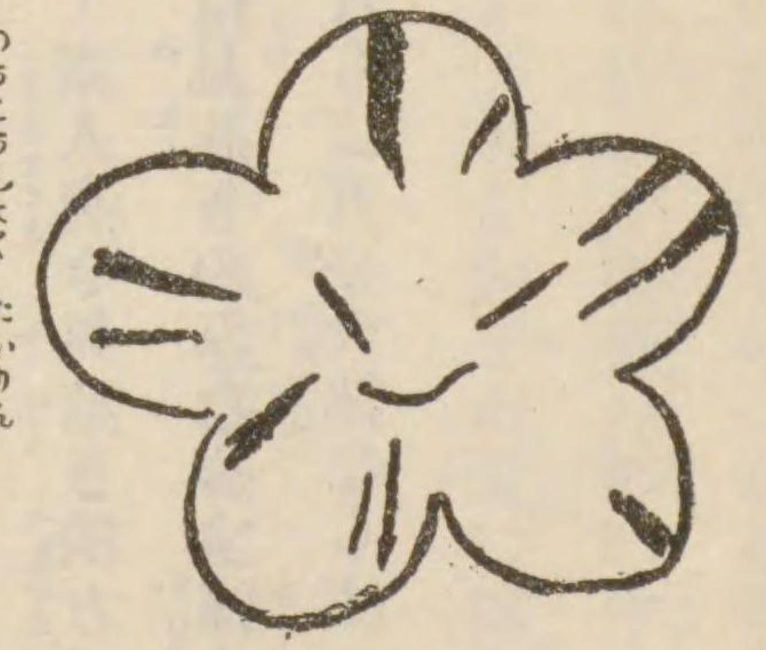
一 薩摩紅　一重濃紅色の大輪

一 金の采　濃紅色、花瓣細長く裂け采配の如し因て此の名有り。

一 狂獅子　濃紅色、袴咲

一 紅萬重　朱紅色、菊花の如き重ね咲

一 江戸錦　薄紅色、一重大輪、花形朝顔に似たるより一に朝顔咲と呼ぶ。



トビ入リシボリ〔サツキ〕

白色の部

一 博田白　大輪純白、紅色の大盃と好一對の花

一 銀世界　純白一重大輪

鴇色の部（白色に少し赤味を帯びたるよりとき色といふ）

一 峯の雪　鴇色の地に白覆輪の縁一重の大輪、絞りも交る

一 九重錦　鴇色に紅絞り、夏秋の二回に咲く

一 十六夜　鴇色、花瓣の肉厚し

紫色又藤色の部

一 高砂　藤色の大輪、花瓣厚く大きく滿月狀に咲く、實生の母樹に用ひらる

一 夕霧　一重の大輪、薄紫

一 恩賜　一重の大輪、鮮美なる濃紫色にして花心純白

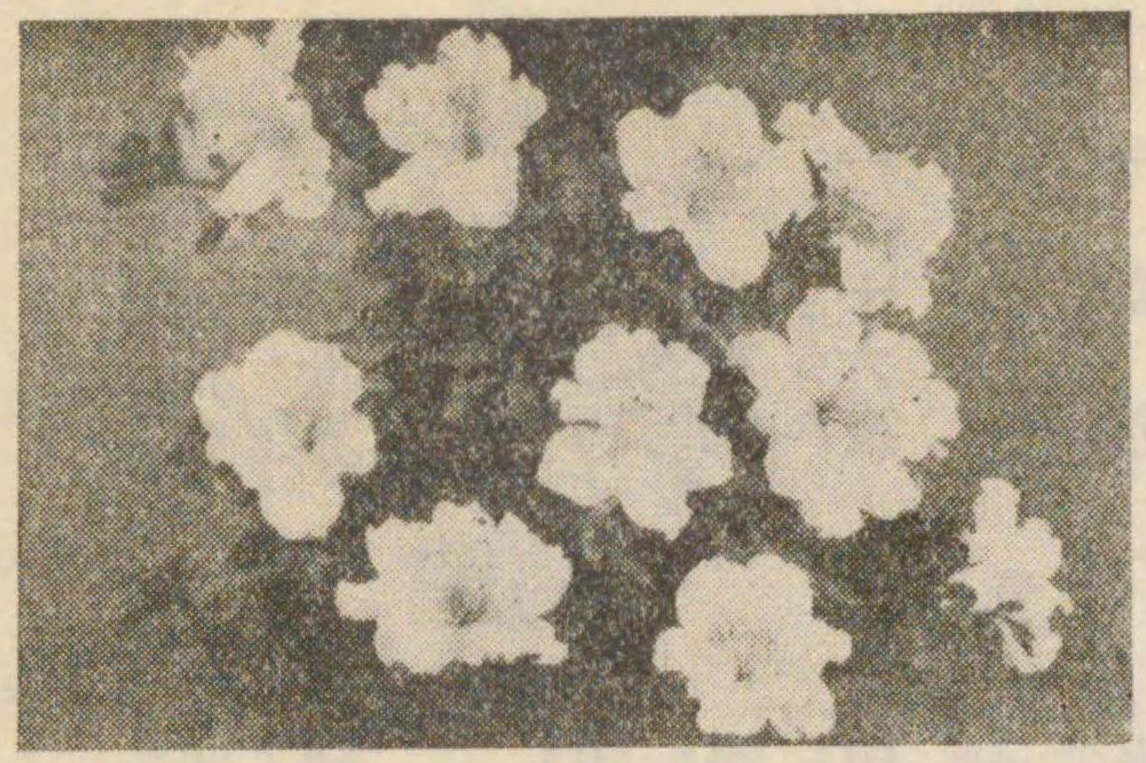
一 叢雲月　一重、紫色の底白

一 廣樂　一重大輪、濃艶なる紅紫色の底白

一 偕樂　一重大輪、藤色の底紫

一 貴公子　紅紫色の底白、花形桔梗に似たり

一 絞朝顏　濃紫色、花形朝顏に似たるより斯く呼ばる、開花最も早く霧島と皐月の中間に咲く、此の種に一重と八重と有り



新花阿古耶姫

一 春雨錦　一名賞春雨、白地に藤紫絞り、半染と覆輪とあり

一 大鵬　紫竪筋絞りと飛白模樣とを出す

一 阿古耶姫　濃紫色の絞り

一 藤御殿　白地に藤紫絞り

一 天慶　赤の底白花と紫竪絞り半染無地

一 雲峯　紫の絞り

底白の部

一 聖代　桃色の大輪、底白

一 楊貴妃　紅色の底白

一 麟鳳　朱色の車咲、底白

覆輪の部（覆輪は花瓣の上部を別の色にて緣を取れるものを云ふ）

一 峯の雪　一重大輪、鴇色に白覆輪

一 旭鶴　大輪、色淡紅の暈に緣の白きもの

一 瑞龍寺　一重大輪、淡紅色、白覆輪、地色に濃紅の絞りを交ふ

一 富士の雪　紅色に白の深き覆輪

重ね咲の部（重ね咲は花瓣の重れるものをいふ）

一 長壽樂　二重大輪、乳白色に濃紅の絞りと底白との咲きまぢり

一 酒中花　二重咲にて蘂長く抽き出し色丹紅色にして底白なり

一 帝國　大輪の二重咲、色青白色、瓣厚く紅紫の絞りを出す

一　旭の錦　白地に桃色の絞りを染出す二重咲なり

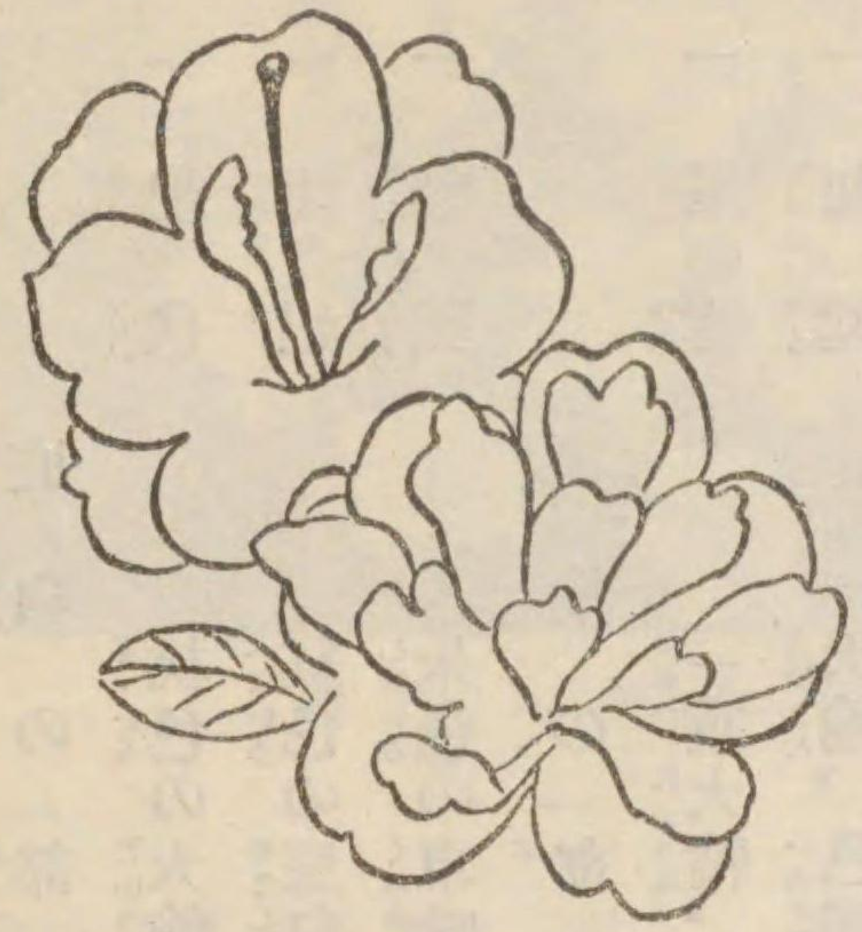
一　霞が關　鴇茶色の地に紅絞りと白の絞りを交へた二重咲

一　天明開　紅絞りの底白二重咲

一　笑獅子　一重と八重と交り咲き桃色の大輪なり

絞り咲の部

一　松波　白地に紅絞り花は中輪、樹の締りよく最も盆栽に適したる樹性なり往時より世に知られ從つて他の種類より古木多し



八重朝顏（サツキ）

一　千歳錦　一重大輪、紅紫の絞り紅紫とは紅色の勝ちたる紫を云ふ

一　護美錦　一重大輪、變化多き絞り咲きなり、護美は人名に因て名つしものと云ふ

一　難波錦　白地に紅の大形絞り掌狀花と采咲とを交へたる奇種である

一　松島　大輪、白地に紅の絞り、又白無地、赤無地等混じ咲く、此花は往時杜鵑花の流行したる元祿享保の頃は第一の優品と云はれしものなりと云ふ。

一　月山錦　大輪雪白の地に紅の絞り咲き往時より傳はれるものと云へり

一　東明錦　地色薄紅色に濃紅の絞り咲き

一　人丸　一重大輪、十二三瓣までの多瓣花出づ。地色薄柿色に丹色と白の絞りの交り咲き

一　蜀紅の錦　白地に赤の飛入り絞りに又紅白の咲交り無地花

一　源氏車　淡紅の地色に濃紅の絞りあり縁に白覆輪を現はし八九瓣より二十瓣位までの車咲である因て車咲の代表花と云はる

一　金華山　大輪、青白地に紅の竪絞り半染あり吹掛あり花瓣も七八瓣を

出す

一　博多錦　力ある大輪、雪白の地に鮮紅の絞り、花付最もよし

新花絞り咲の部

一　廿世紀　朱色の底白なるは谷間の雪に似て絞りを交へ五六瓣より十瓣餘のものあり

一　群　鳳　雪白に鴇色の絞りと吹掛とを交ふ此花は花瓣の屈曲せるさま波の起伏せるに似たり、斯様なものを波打花と云ふ

一　麗　峰　雪白に濃藤色の荒き絞りと半染とあり近年新に産出せる美花と云はる

一　玉織姫　白無地、絞り、底白、種々變化多し、色彩の美しきこと他に及ぶもの無しと云へり

一　不二錦　大輪中の一二に置かるゝもの雪白に濃紫の飛入絞り竪絞り半染絞りなど打交れる波打花である

一　萬　歳　白地に紅紫の絞り底白、底白は普通稚樹には出ぬものなるも此種は挿木後二年目より底白を出すと云ふ

一　雲の上　白地に紫の粗絞り、又吹掛絞り、半染、峯白、又稀に紫無地に白飛白の花あり、色彩の變化多き波打花なり

以上　五十八種

第二章　時代に拘らず流行に變り無きもの

朝　顏　　其の來歴

朝顏は奈良朝時代の名高き歌人山上憶良が秋の七草を詠みし歌の中に朝顏の花と有るより早くも世に知られたるものとせり然るに近年說を爲す者有り朝顏は其の種子を藥用として支那より輸入したるものにて其年代は奈良朝以後なれば憶良の詠みし歌に朝顏と有るは今の朝顏に非ずして恐く桔梗なるべし云々。桔梗は今も秋の七草中主なる位置を占むるものなれども上古之を朝顏と呼びしや甚だ疑はし元來朝顏は晝顏に對して呼べる名なるべく日中に咲くを晝顏と呼び早朝に咲くを朝顏と呼びしならん此の二種は花葉共に酷だ能く似、惟開花の時刻に朝と晝との違ひあるに過ぎず。

朝顏は奈良朝或は其の以前既に支那より輸入したるものなるも當時は文學の初期に

て記錄も備らず從つて後世文獻の徵す可きもの無きより其の輸入を奈良朝以後とせるならん。

憶良の詠める七草の歌は

秋の野に咲きたる花を指折りかき數ふれば七種の花
萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、又藤袴、朝顏の花

一首の聯體歌である。

すべて草木は其の原產は皆山野にして人家の周圍にのみありて山野に無きものは其の初め外國より輸入したるもので有る。

我邦には古來自生の朝顏は無りしが紀伊四國等に多しと云傳ふるは人家を指して云へるのであるか、又原野に多しとのことであるか判然せざるも若し原野に多しとすれば我邦にも自生のもの有りしことを證すべきである。

古今集には朝顏の歌見えず俳句には元祿以後頗る多し人口に膾炙する彼の「朝顏に釣瓶取られてもらひ水」の句は古今集の「立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絕

えなんと』ある和歌と同工異曲とも云ふべく紅葉と朝顔との違ひは有るが共に物の美を傷ふに忍びざる所の愛惜の心に原づき永久に生命を失はぬ句である。

又蓼太の句の「朝顔の土に這ふまで荒れにけり」は有りしまゝを詠みし句ではあるが廢屋頽垣荒涼の狀を眼前に見るが如き感有り又近頃の人の句に「朝顔や起した人は花も見ず」翌朝は早く起して呉れ朝顔の咲たのを見るからと主人から委囑せらるゝものは炊婦か又小人數の家の主婦にて朝未明に起き第一に勝手元で立働くので主人の委囑により起しはするが自分は朝顔の花を眺めるどころか眼の廻るほど忙しいのであるとの世相を穿ちたる句で、寸鐵的に世情の急處を衝くは、俳句の特長と云ふべきか。

英國の園藝家「ベーチ」氏は曾て入谷に朝顔を觀て其の花葉の千態萬狀なるに驚けり或人氏に問ふて曰く英國にも此の如き種々の朝顔有りやと氏歎じて曰く英國人は一般に晏起（あさね）にして午前七八時に離床（ねどこを出る）する者無し爭でか朝顔を見ることを得べきと。

朝顔の漢名を牽牛花と稱するは彼の支那の七夕の神話の牽牛織女二星中の男性的の牽牛星の名を假りたるもので朝顔の花盛りの頃は丁度牽牛星が銀河を隔てゝ織女星を望む頃に當る所より此の名を用ひしなり。

支那にて宋代の詩人に牽牛花を詠せるもの尠からず左に一二を鈔出す。

牽牛花　　宋　秦觀

銀漢初移漏欲殘。　銀漢初めて移り漏殘せんと欲す。
步虛人倚玉闌干。　步虛の人は玉闌干に倚る
仙衣染得天邊碧。　仙衣染め得たり天邊の碧。
乞與人間向曉看。　人間に乞與して曉に向つて看せしむ。

同　　宋朱茂曙

金風初動露華滋。　金風初めて動いて露華滋し。
看得朝暉未上時。　看得たり朝暉の未だ上らざる時。
多少紅樓昏夢裡。　多少紅樓昏夢の裡。

不知秋色到疎籬。　知らず秋色の疎籬に到るを。

江戸時代流行せる朝顔の種類

江戸の盛時文化文政の頃より天保の末年に至り都鄙到る處朝顔の培養盛んにして奇を闘し新を競ひ若し異種有るに遇へば一苗子と雖も重價を以て償ふに非れば容易に得ること能はざる盛況なりしと云へり。

朝顔の好尚に就て往時と現今とを比較するに大分相違有り。江戸時代より明治年間まで流行したる種類は花と葉とに因て其名を付たるもの多し。

左に其の主なるものを擧ぐれば

丸咲　此花に大輪と筒長と小形とあり何れも單瓣にして朝顔の元種と云はる色は種々變化あれども碧色を本とす

梅咲　花形梅花の如く縁五ッに裂けたり

撫子咲　花の縁に細き刻みありて形、撫子の花に似たるを云ふ

丸咲常葉（原種）

菊咲　縁の刻み較粗くして深からざるものを云ふ

櫻咲　花形全く一重櫻の如し

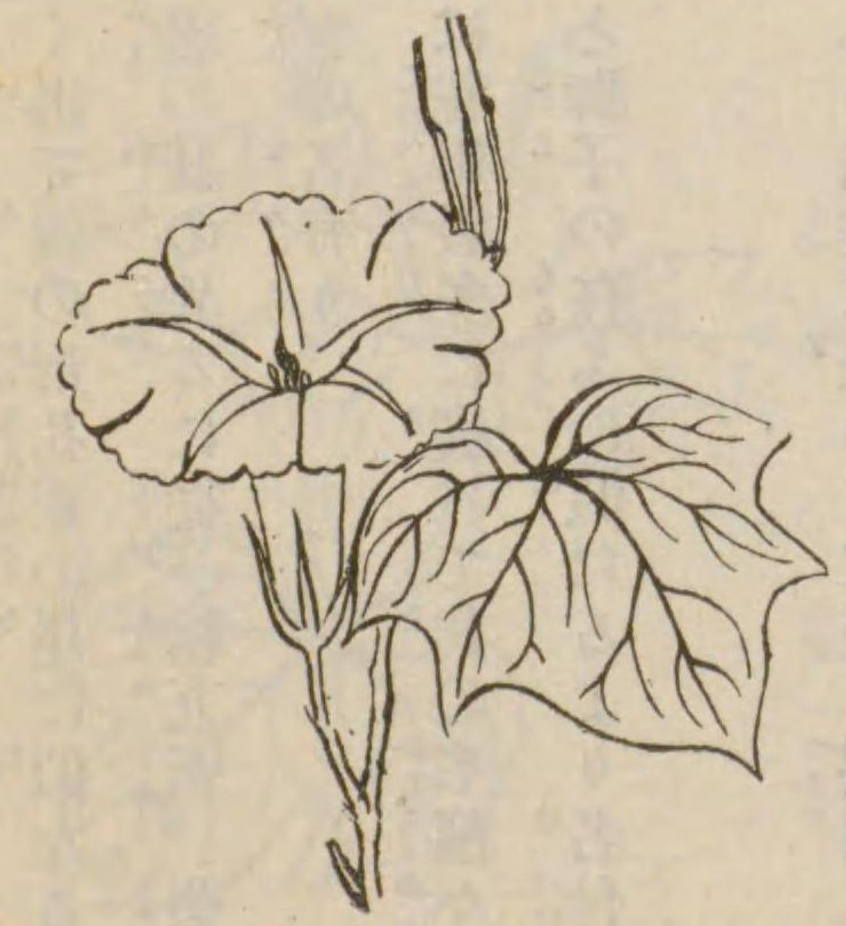
桔梗咲　花の形桔梗に似たり

龍膽咲　花形龍膽の花に似たり

以上の諸種は皆單瓣にして花形の他の花に似たるより名付しものなり。猶ほ單瓣に抱咲、切咲、縮咲、巻絹、受咲、石疊等あり、何れも縁の切込み深く種々の形狀に分れたれば斯く呼べり。

牡丹咲は花の外邊丸咲にして中心に數多の細瓣簇り開くをいふ。

孔雀咲は花の中心に細き瓣の如きもの四五葉



菊咲芙蓉葉

捩れて長く出で其の形孔雀の尾に似たるをいひ其の外邊の狀の異るに從ひ縮九雀、菊咲九雀など樣々の名有り。

獅子咲は花瓣數多に裂けて其の形種々に變化せること獅子の狂ふに似たるより名付しものなり。

撫子咲縮緬葉

龍膽咲尾長葉

臺咲といへるは蘂に座ありて長く突出し其の形、蘂の臺に似たるより斯く呼ぶものなり。

此外亂菊、八重咲等ありて花形の變化甚だ多しと雖も右に擧げたる名稱を本として其の異る點を加へて呼ぶ例ば獅子咲にて筒長なれば筒長獅子咲と稱へ臺咲にて孔雀あるものは臺孔雀と呼ぶが如し。

二度咲又三度咲といふあり、此れは一回花の外邊開きしも其の中心猶殘りて翌日に開くをいふ此等の種類は複瓣にて花形も大なれば往時は好奇家の珍賞したるものなりと云ふ。

葉も變形のもの多く皆其狀に由て名付たるものにて丸葉、芙蓉葉、葵葉、薯蕷葉、又芋葉、柳葉、八手葉、楓葉、豆葉、薊葉、芭蕉葉、晝顔葉、蓬葉、南天葉等あり、何れも他の草木の葉に似たる所より名付しものなれば一見して大略分り易し、猶ほ卷絹葉、孔雀葉、獅子葉、金剛葉など〻呼ぶものあり、其の狀、又葉の厚薄によりて名付たるものなれども此等は實物にて知るの外筆舌にて形容すること難きもの

抱咲尾長葉

臺咲卷絹葉

とす、又抱葉といふあり其狀の如何に拘らず葉の縁内側に巻込みたるをいひ、縮緬葉は葉の面に皺の多きものをいひ葉の捩れたるを捩葉と呼ぶ又葉の大なること南瓜の葉に異らざるものを見たることあり、蔓の太さも南瓜に劣らず、又「せつか」棒蔓など呼ぶものあり既に朝顔の本性を失へるが如き觀有り、人工に由て造化の力を奪へるものと謂ふ可きか。

孔雀咲孔雀葉

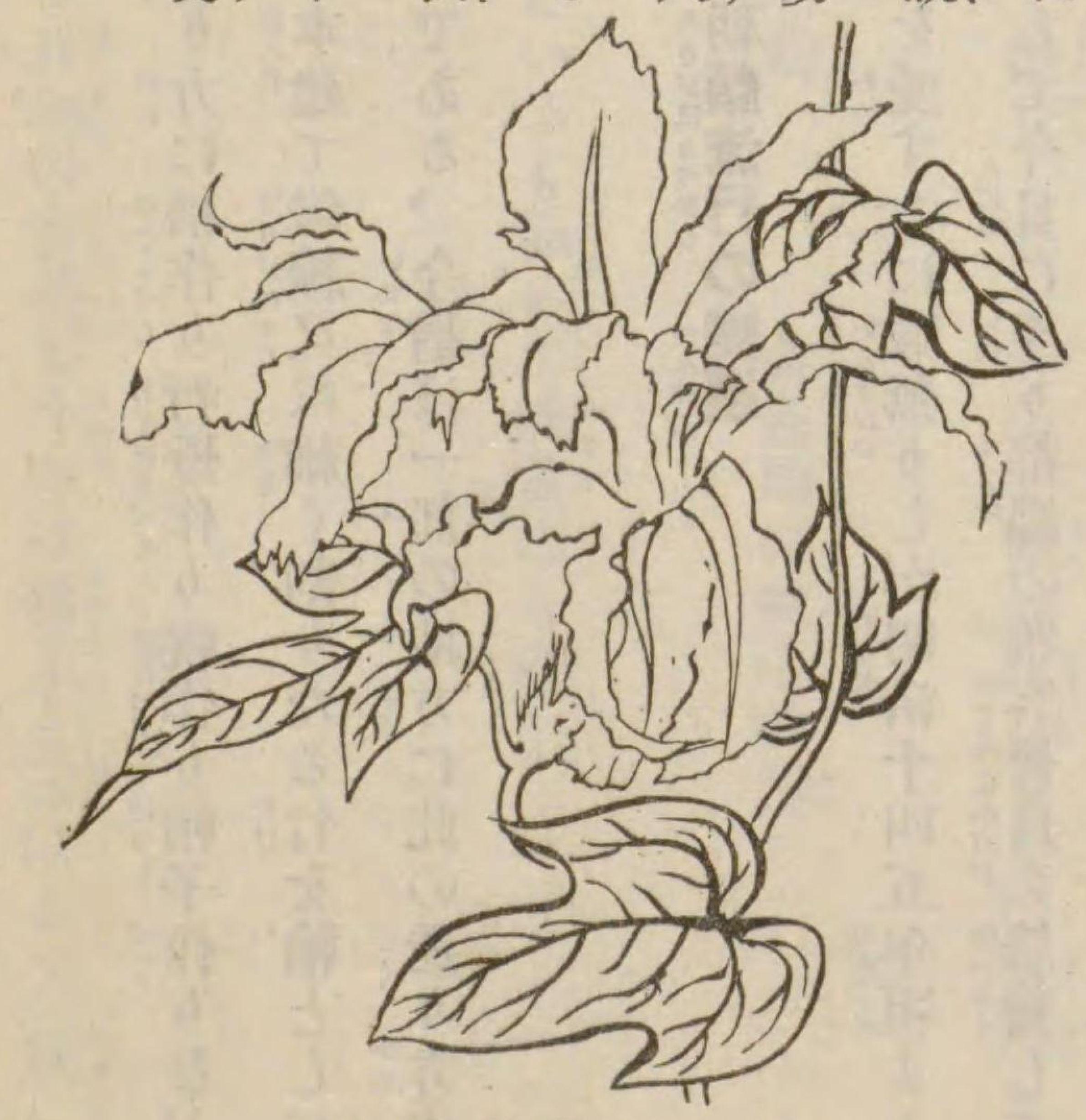
葉の色にも亦種々の變化あり白縞又黄斑あるものは多く見受けるも稀には紅縞のものありといふ。

牡丹咲

葉も花と同じく年々變化するものにて同一の花にて、葉は各異ること多し概して葉形の奇なるものは花は觀るに足らぬもの多く、又花の立派なるものは變り葉少く、又蔓葉の太り過ぎて形狀の奇なるものは花を著ぬこと多し。

獅子咲金剛葉

朝顔の葉變りは貝割（双葉）より新葉二三枚も出る頃には大概見分けの付くものなれども花變りは容易に見分け難きものとせり、往時下谷の入谷村（今の入谷町）に朝顔培養者として知られたる一老人有り此者は新葉二三枚出たる頃既に牡丹咲、獅子咲などを能く見分け他の花戸の如く賤價のものを培養せざるより年々多くの利益を得たりとい



切レ葉牡丹度咲

へり。

以上は往時流行の種類にて猶ほ其の造り方に櫓作り行燈作り幌作り帽子作りなどの名有りて何れも細き竹を鉢の縁際に三四本建て鐵線又は細く割りたる竹を輪として三四個箍のやうに嵌め之に蔓を絡ませるのである、今猶ほ一部の地方に此の造り方の行はるゝ處あり。

明治以後近年に及べる朝顔流行の變遷

其の後國家多事人心恟々として復花草を愛するに暇無りしが明治十四五年頃より再び流行して今日に至り都鄙の雅客皆自ら培養して年々珍花奇葉を出し互に誇稱すること文政天保の世を凌駕するの勢ひ有り且つ一般の觀賞も成るべく自然に近きを好み行燈造り幌造りの外に矮生（切込栽培式）として花を咲すこと流行せり卽ち蔓を延ばさ

切込作り大輪咲

ず二三寸伸びし頃より時々心を撮取り丈を短く枝を多くして花を有たすことなり。

花も往時の如く濃艶なるものよりは寧ろ一重の大輪にして色の鮮明なるものを愛するに至れり、明治年間より大正に亙りて流行したるものゝ中の重なるもの數種を擧ぐれば

切込數咲作

一　千羽鶴　薄色地に紅の吹雪

二　銀月　薄鳩羽色

三　神風　黃の無地　黃といふも極めて淡黃のもの

四　初日の出　濃紅の無地

五　明月　緋紅無地

六　吉野山　桃色無地

猶ほ最近朝顔研究會は各處に盛んとなり昨年の新花も今年は舊花と云はるゝ狀況

にて右に擧げたる中にても初日の出は更に新初日の出を出し明月も新名月と改めらるゝに至れり斯く年々に新種を出し其の底止する所を知らざるも大體に於て無地と吹雪と縞物とが目下流行の標準と成れりと云ふ。

現今流行する大輪朝顏の種類は大體蟬葉系と青斑入り鍬形、千鳥葉系の三種である

行燈作り

後者は阪神地方を中心として中國四國九州の一部に賞觀せられ其の仕立方は行燈作にして三本の支柱に三個の輪を結び付け頗る大形となるのである。蟬葉系の作り方は盆養式を應用し京都名古屋より關東地方に流行す。盆養式に大輪仕立と數咲栽培の二方式が有る大輪仕立は一鉢に三四輪の大輪を咲かすのであるが數咲栽培は觀賞の主眼を一鉢に一輪二輪咲かすことよりも七輪八輪或は十輪以上の花を同時に開花せしめ眞に朝顏の美觀を賞翫することを目的とす。

一昨年（昭和七年）八月東京芝隨應寺に催された朝顏展覽會の出品中に丹頂の舞と銘せるものは蟬葉系の紫幅輪青の斑入り花が直徑六寸とあり又舞曲と銘せるものは桃色にて直徑五寸八分とあり何れも大輪として誇れるものならん又花の中心に筒狀の蘂あり更に其の中より蝶形花狀の蘂數個を出せるもの卽ち臺咲の一種なり又葉は撫子の葉のやうに細り花は薄の穗かと思はるゝものあり全く朝顏の本性を失へる觀あり珍奇と云ふよりは寧ろ怪奇と云ふべきである。

播種（マキツケ）

某朝顏專門家の説に苗床の代りに蜜柑箱を横に二つに切れば各深さ三寸程のもの二箇を得らる。此の箱の底には排水よきやうに小豆粒ほどの大さの土を入れ中間に腐葉土に一割程の藁灰を混ぜ之を小沙に混合したるものを入れ上部には覆土として「ミヂン」を去りたる川沙を大體一寸位の厚さに撒布し、種子は一寸位の間隔に發根部を上にして播種し其の上を覆土にておほひ如露にて灌水す。二つに切りたる箱の一箇に

は底なければ底板を張るべし。

播種後五六日より十日までの間に大抵發芽するものである發芽に先ち必ず前日土の面に莖を現はし翌日雙葉を出すものであるが往々種子の外皮を被りたるまゝ莖を出すものあり之を帽子苗と呼び全然不良のものとすされば初めより完全に雙葉の發生せるものを擇ぶべし、帽子苗は蒔方の淺きに失する場合に多しと云ふ猶ほ双葉の芽生え後其の一方に種子殼を被れるものもの有り、斯やうのものは灌水後間も無く取去るを宜しとす。

幼苗の健康は偏に雙葉の健否に因るものなれば決して等閑に附す可らず。

移植

幼苗は双葉の展開せるを見ば一刻も早く移植すべし。發芽後二三日も過ぎれば立根も小根も迅速に發生して移植の際に根傷みを生ずること有り發芽は大體午後地上に双葉を開くものである、されば其の夕方に必ず移植する方を安全とす幼苗の立根の長すぎるものは小根の根張りを早めるために立根の先端を剪取るべし。

幼苗を移植するに其の目的の異なるに從ひ方法も亦同一ならず行燈作りとするものは苗の發育を抑制する必要より四寸の瓦鉢に假植するを普通とす切込栽培卽ち盆栽式には直に本鉢に本植するを最前の方法とす此の二つの方法は朝顏の種類と形容の爲に當然の理由有りと云へり。

移植はすべて夕刻に爲すを宜しとす移植後十分灌水し夜中に根部を安定せしめ翌朝より直接日光に當てゝよし根傷み無きものは日光に當れば健全なる發育を促すものなり。

移植も本植も植ゑたるとき十分に灌水し置けば二三日間は灌水の必要なし水の多過ぎたるものは雙葉に白き斑點を生ずるか又萎縮して其の生長を停止すること有り普通灌水は鉢の土の表面に濕り氣有るほどにて十分なり。

行燈作りには第一回の假植のときは瓦鉢の四寸位のもの第二回には五六寸のものを用ひ第三回本植の時には六七寸のものを用ひるを常とす。

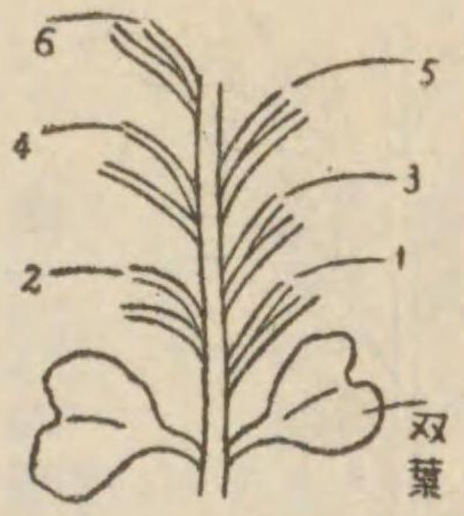
切込作即ち盆栽式の作り方には幼苗を假植せず直に本鉢に本植するので瓦鉢は炎暑に向ひ根の方、熱に過ぎる害有りて不適當のやうである寧ろ硬質のものを用ひる方良好なりとの說有り。

切込栽培に六寸以上の鉢を使用することは花期を遲くし又枝葉が徒長する傾きありされば五寸五分當りを適當とせり但し數咲には六寸位を用ひること多しとす。

移植又本植のものも日當り良き處を擇んで置くべし若し適當の場所無ければ屋上に排列すべし。

摘芽と作り方

行燈作りは初めより本芽は摘み取らず側芽のみ摘み取り本芽の伸長するに從ひ支柱を建てゝ之に賴らせ發育の旺盛なるに從ひ側芽の益す出るものなれば怠らず之を摘取り本蔓に樹勢を保たせ本葉十二枚位出れば側芽の處に蕾を出す本蔓の一尺五寸位となりたるを見て三本の細き竹を鉢の緣にそへて建て丈は二尺位とす其の造り方は既に前に述べたり蔓は初めに左巻に支柱に卷付けるなり。



第一回摘心

切込栽培式本植後の手入れ　本植後鉢の表面に山苔などを布けば乾燥を保護し且つ葉の脫落を防ぐ效あり雙葉より發育して本葉の數を增すに從ひ形容を整ふるために摘心を行ふ第一回の摘心は本葉の八九枚出でたるを見て下より六枚までを殘し上部を切り去るなり上圖に由て說明す。

(1) 一、二の芽は大概は貧弱のものなれば雙葉の側に出たる芽と共に摘取るべし。

(2) 一、二の芽の非常に强健なる場合は一、二、三の芽を殘して他の芽を摘み取る。

(3) 一、二の芽の弱くして摘取る場合は三、四、五の芽を元枝として育て第六の芽は葉を殘して摘取る。

(4) 數咲の摘心は一、二、三或は三、四、五とを殘せども大輪咲の摘心は一、二

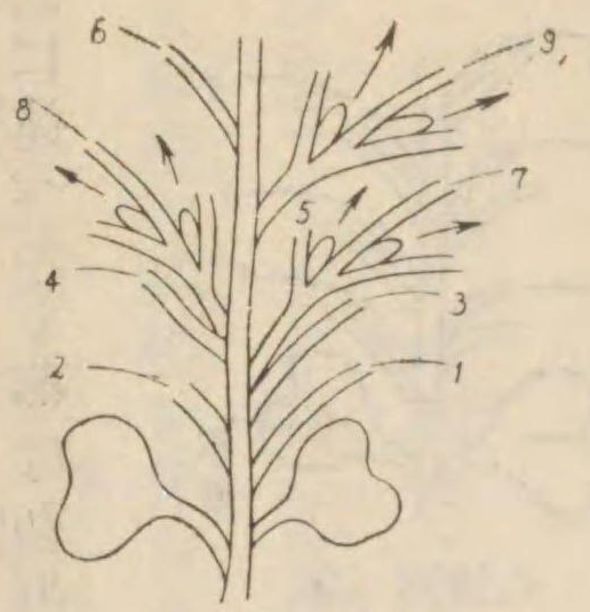
或は三、四の二本の元枝を殘すべし。

(5) 數咲、大輪咲の何れの場合も芽先に一枚の不用の葉を殘し置くべし此の葉は全體の均衡を保つこと有り。

第二回目の摘心は元枝の葉の四五枚出たる時雙葉を殘して上部に行ふものとす、左の圖に由て之を示す。

(1) 六までの符號は第一回摘心までの本葉である。

(2) 七、八、九は第二回に行ふべき摘心の箇處である大輪咲ならば七、八の二本とすべく、數咲の場合は七、八、九の三本を立てる。



第二回摘心

(3) 矢の符號は此より出る芽に花を咲かすべき蕾を持たすのである。

(4) 一枝に矢の箇所が二箇所有るは大輪咲又數咲の何れにても四五分伸びたる時に嚴選して蕾のなきもの或は貧弱のものは摘取る。

(5) 第二摘心の前後より矢の印ある外に無數の芽を吹くものなれば見當り次第に摘取るべし。

(6) 數咲の場合は六個芽の有る中にて强健なる芽を三本四本五本と適宜に選擇すべし。

(7) 第二回の摘心の場合も必要なるは二枚なれども四五枚位伸びたる時に行ふべし三枚位の中に摘心するは反つて樹勢を弱めることあり。

斯く手入れしたるものに就て大輪咲は枝は二本として一枝に蕾の數は二個或は三個なれば一鉢にて蕾の數四個又六個である、數咲は枝の數三本以上五六本なれば一枝に三個或は四個を有たすとすれば一鉢の蕾の數は相當に多くのものとなる猶ほ必要の蕾の出揃ひたる後は枝の心を切去るべし。

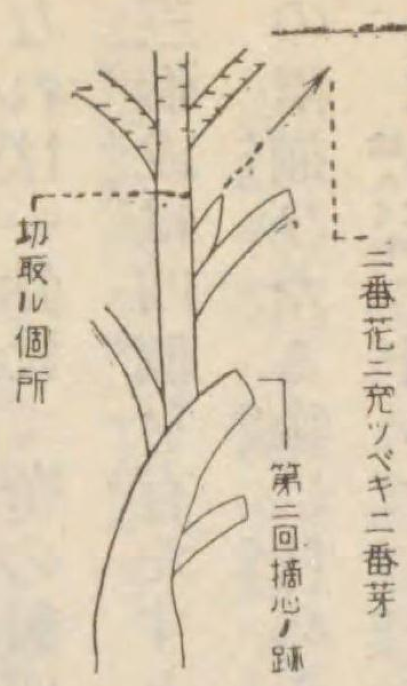
二番花の摘み方　前に述べたる仕立方にては折角丹精を罩めて培養したるものも僅に一日或は二日の觀賞に終り如何に本意無く思はれるより二番花又三番花を觀賞する望みも起るのである其の方法は一番花を著けた枝の基部より出せる芽を伸して花

を咲かせるのである又其の後に出たる芽を摘取らずに置けば懸崖風なる三番花を觀賞することを得べし左の圖に由て之を示す。

(1) 點線の箇所は一番を終りたる枝

(2) 切取るべき個所と示せる所より一番花の終ると同時に切捨るなり、かくして二三日を經れば元の形に復す

(3) 矢の符號を附したる芽は一番花の終る頃には蕾も一寸位のものとなれり



培養土と肥料の造り方並に其の與ふる時期

培養土の材料は畑土を主體として之に腐葉土を加ふ、或は枯藁の腐敗せるものを混ぜ猶ほ其腐敗を速かならしむる爲に油滓、米糠或は醱酵素を何程か混和して完全に壤土化せしめて此の畑土に混る、之に寒中二三回下肥を灌ぎ切り替へし置くは至極有效なりとす但し營養分の過多なるは反つて害有れば過不及なきやうに注意すべきこと最も肝要なり。

肥料として安全にして且つ簡便なるは油滓を主肥としたるものとす之を乾燥料と水肥との二種に區別して使用するを有利の方法とす。

油滓は多く窒素を含めるものなれば之に燐酸加里を少し加ふべし其の配合の割合を左に示す。

一、油　滓　一升
一、米　糠　二合
一、藁　灰　二合
一、培養土　一升

以上の割合にて混合し水分を加へて木箱又樽などに入れて密閉し置けば一週間位にて醱酵す其の間二三回攪拌し乾けば水を灌ぎ乾燥せぬやうに水分を含ませたるまゝ保存するなり之を乾燥肥料又練肥と呼べり之を少量づつ數回に埋めるより一に埋肥とも云ふ。

水肥は樽又瓶に油滓一升に水五升の割に漬け置き使用の際は之を二十倍に薄めて數回に分ち與ふべし。

施肥の時期と其の回數

幼苗を移植したるものは本葉五六枚出るまでに稀薄の水肥を二三回與ふれば十分なり本葉七八枚出たるとき卽ち第一回の摘心前後に約拇指大の量の埋肥を鉢の中に二箇所埋むべし猶ほ第二回の摘心の時期に至るまでに二三回水肥を與へ第二回摘心の前後に第二回目の埋肥を與ふ其の量は第一回の時と同じきも埋むべき場所は別の箇所を擇ぶべし。

猶ほ蕾の出るまで二回ほど水肥を與へ且つ第三回の堆肥を稍多量に埋めて蕾を肥大ならしめ既に蕾の見えし時より開花までの三週間を三期に分ち第一週の間に二三回の水肥を施し第二週目より毎日水肥を與へ第三週目には二回位施肥し開花二三日前より全く施肥を斷つべし。

開花後施肥を斷つ代りに十分に灌水すべし。朝顏は幼苗の間は灌水に過ぎざるやうに注意し開花中は此と反對に多量の給水を必要とす。

挿芽と切接

朝顏の播種に就ては既に前に述べたれば猶其の他の繁殖法を一と通り述ぶべし。

挿芽　挿芽は蔓の發育良きものを長さ三寸許りに切り葉を撮取り本の方に節を添へ少し皮を削りて鉢の中又は露地に挿込み二三日は日除を爲し根著けば新芽を出す新芽の出たるを見て植直すべし。

切接　蔓の節と節との間二三寸位あるものを擇び上下に節を添えて切取り之を穗とし本の方を少し楔形に兩面を削る接臺とすべきものは蔓の節ある處より節を殘して上を剪り捨て其の中央を竪に割り其間に穗を挿込み紙又は麻にて卷き日蔭に置き朝夕如露にて水を灌ぎ五六日も過ぎれば穗より新芽を出す、新芽の出たるを見て日向に出すべし。

呼接　臺木と穗と兩方の一面を少し削り此の削りたる處をよく合せ紙又は麻にて卷き四五日過ぎその接著たるを見て穗蔓を切離すべし。

甘藷に朝顔を接ぐ方あり甘藷の四五月頃盛んに出たる芽の蔓となりたるものゝ本の方を二寸許り殘して餘は剪り去り此の殘れる蔓の本に切接するなり。甘藷は塊莖にて一本の甘藷より無數の芽を出すものなれば數種の朝顔を一鉢に咲すことを得べし、稍兒戲に類すれども好奇者の一粲を博するを得ば望外の幸なり。

種子の採收

種子の採收に三期有り、中頃咲きしものは其の種子親種と同種の花を得らるべく、末に咲きし花に結びたる種子は、花葉ともに變り多きものとせり、本卽ち初に咲ける花の種子は概して花の出來惡しゝと云へり、されども之を等閑に付す可らず、何となれば初めの花にのみ實を結び、以後は全く實を結ばざること有り。

朝顔は一年草なれども同一の種子にて同一の花を得るとは限らず重ね多きもの又變り花は實を結ばざれば其の年限りのものにて別に繼續すべき方法とては未だ聞かず但其の花の出たる前年の親木を記憶し置き其の年も前年と同じ親木より種子を取りて來年蒔かば多くは似寄の花を得ること有りと云ふ。

青桐性と云ひ葉の形桐の葉に似たるものゝ種子より往々珍花を出すことあり、牡丹咲は此の桐性の種子より出たるものなり。

珍花にして來年同じ花を得んと思はゞ、鉢植ならば鉢のまゝ他の朝顔と遠く離して置くべし、地植ならば他の朝顔の無き處に植替ふべし、すべて花の變化は花粉と花粉との混合より起り、其の混合の媒介を爲すは風と飛蟲とで、風に由て花粉が飛散するより生ずるを風媒と云ひ飛蟲の翅などに附著したる花粉を他の花の蜜を吸取るとき其の花に前の花粉を附著するより起るを蟲媒と云ふ。然れども現今は蟲媒を否定する說有り。

種子の成熟は開花の遲速に伴ふものなれば採收の期は定め難けれども外皮茶褐色とならば種子は熟したるものと知るべし。(終)

第三篇

時代の流行を超越せる花卉盆栽

前に述べたる花樹の種類は時代の變遷に伴ひ世人の愛好に冷熱有るを免れず、其の範圍を脱して今昔の變り無く雅俗を通じて觀賞せらるゝものゝ重なるものを擧げれば

花物にて　梅、菊、牡丹、芍藥

葉物にて　松、棕櫚竹、觀音竹、蘇鐵、諸種の竹類

花葉共に觀賞すべきもの　蘭（支那種）

梅

梅は百花に先つて開き花品高雅にして清香亦馥郁たり古來百花の魁として一般に賞

觀し詩歌にも絶えず吟詠せり、往時其の種類を記載したるものを觀るに我邦のもののみにても二百餘種に及べり其の觀賞の盛んなりしを推して知るべし。

古來梅花を詠みし詩歌は甚だ多い其中にて宋の林和靖の疎影横斜水淸淺。暗香浮動す月黄昏の一聯と明の高青邱の雪滿山中高士臥す。月明林下美人來る。の一聯は共に人口に膾炙する句で有るが此に淸人宋樹穀の盆梅の一絶を擧ぐ

盆梅　淸　宋樹穀

數枝也復影横斜。
惹㆓得羈人鄕夢㆒賖。
拋却西谿千樹雪。
瓦盆三尺看㆓梅花㆒。

なり

數枝也復影横斜
羈人鄕夢を惹き得て賖
拋却す西谿千樹の雪
瓦盆三尺梅花を看る

狗尾續貂の誚は免れぬが拙作一首を次に掲ぐ

野梅　九皐

野梅一樹老崢嶸。
猶見寒葩放㆓晩晴㆒。
怪底鶯兒頻眷戀。
枝頭宛轉弄㆓嬌聲㆒。

野梅一樹老いて崢嶸たり
猶見る寒葩の晩晴に放つを
怪底す鶯兒の頻に眷戀するを
枝頭宛轉して嬌聲を弄す。

猶ほ和歌俳句にて梅を詠みしものにつき記憶せるものを二三擧ぐれば

梅の花そことも知らず久方の天きる雪のなへて降れゝば

俳句の方では

白梅や墨芳しき鴻臚館
紅梅や昔ありげに畑の中

際限なければ此にて擱筆す。

名花として世に知られたるものゝ中よりその名を擧ぐれば

冬至梅

白色單瓣、梅花中開花の季節最も早く冬至の頃既に花を開くより此の名有り中品なれども香氣高し猶ほ紅色のものありといふ。

綠萼梅　白色單瓣、凡て梅花の附蒂は多く赤褐色なれども此花獨り純綠なり因て此名あり又新枝も純綠なるよりして俗に青軸と呼ぶ、花品高尙、淸香殊に高く、文雅の士に愛重せらる。

月影　白色單瓣、前の綠萼梅と花枝共に酷だよく似たり但し枝垂性にして白色中枝垂の最上品と云はる。

王光　紅色單瓣、立枝と枝垂と有り紅花一重の上品とす。

塒出の鷹　白色に少し淡紅を帶びたる單瓣、上品。

旭鶴　白色單瓣、中品なれども樹性强く生育最も宜し。

玉垣　枝垂性と立枝とあり花の色少しく淡紅を帶びたる重瓣なり。

豐後梅　重瓣大輪、色少しく淡紅を帶ぶ此の梅は花容豐艶にしてしかも大なる實を結ぶより殊に愛重せられ多く庭園に植ゑらる。

茶淸花　單瓣と重瓣とあり白色に少しく茶褐色を帶びたるは此の名を得た所以である、上品とす。

寒紅梅　單瓣の紅色、紅梅中の上品とす。

難波　重瓣紅色普通は花梅なれども一種色の淡紅なるものに目白臺難波と呼ばるゝものあり重瓣にしてよく實を結ぶ東京目白臺より出たる變種なりと云ふ。

養老　色淡紅單瓣花品中位、能く實を結ぶ種類により一つの蒂に數顆の實を結ぶもの有り。

唐梅　重瓣紅色、花品中位。

以上十餘種は花梅と稱して花の優美なるを賞するものなれば養老、豐後、難波の外は多くは實を結ばす單瓣のものは實を結ぶこと有るも上等のものに非ず結實一方の梅は實梅と呼び花美しからず。

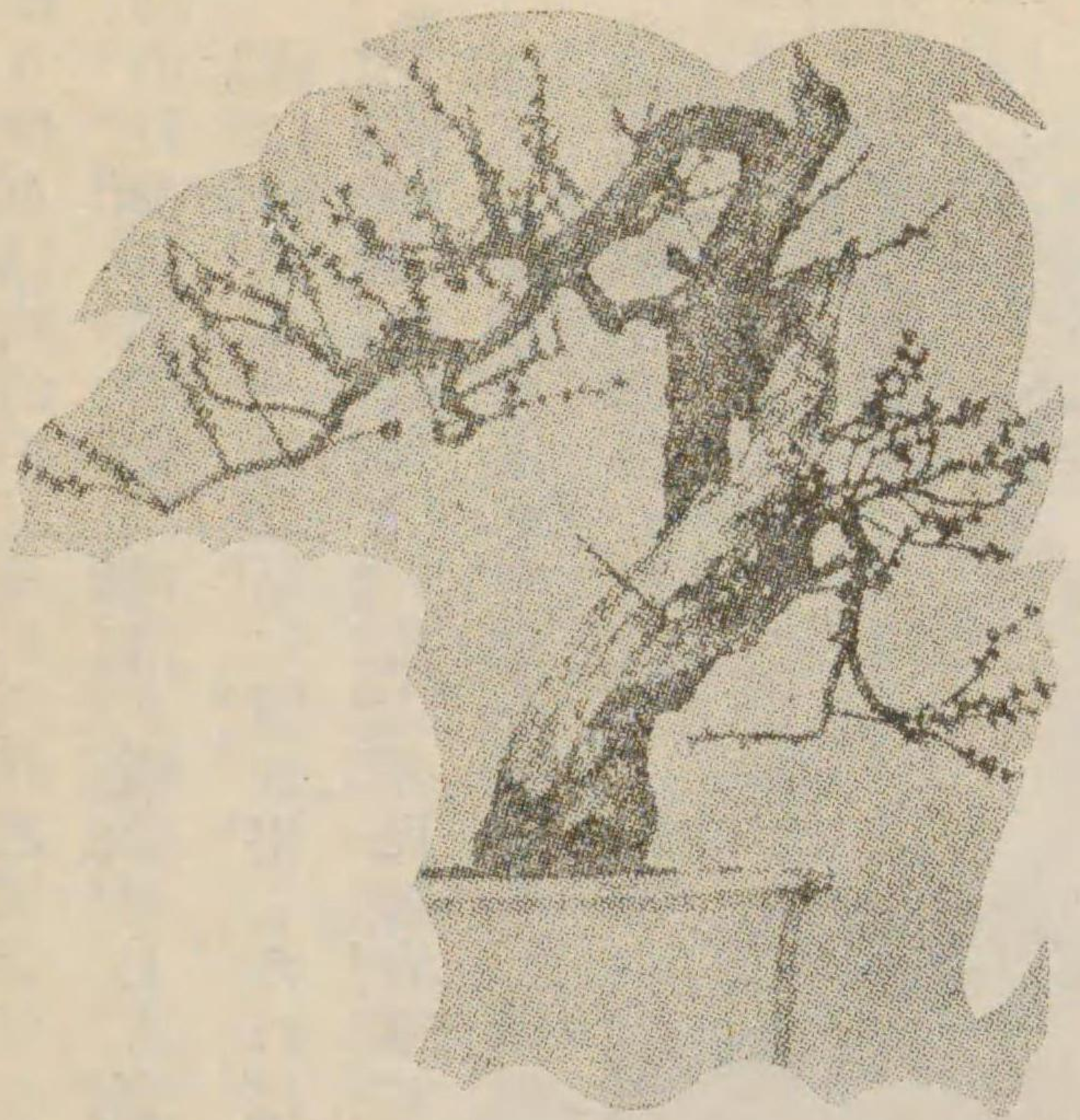
須磨の浦にて武藏坊辨慶が制札を建てたりと云傳ふる江南所無なる名花は今猶ほ其の遺種なりとして世に傳れり。

以上擧げたる名花は皆野梅を砧木として接木し多く花の咲けるを賞ずる一般的のものにて其の幹枝には何の見るべき趣味無きより往時花戸は秩父山より遠く甲州の釜梨川又は笛吹川の上流を跋渉して山陰溪谷の間に自生したる野梅の古木を掘取り之に名花を接ぎ鉢植として賣出せり。

此等の野梅は枝は年々刈取られ又は野火に燒かれ半ば枯朽たる老幹は僅に鐵骨の如き木心と半面を保てる外皮とに因て生存するものなれども元來樹性の强きものなれば猶ほ根株や節間より新枝條を叢生し生氣潑剌として蒼古なる風趣は文雅の士に多く愛

賞せられたり。

十數年間磽确たる岩石の間に苦められつゝ生を保てるものなれば一度掘來りて平地に移植し活著したる後は其の生長力の旺盛なること實に豫想外にして十數年盆中に在るも毫も枯損すること無し花戸連は之を山臺と稱して重く取扱へり。



梅名木

王政維新後文人盆栽の流行せるよりすべて接木ものを嫌ひ復往時の如き名花を觀ること無し今は實生の梅を盆栽とし又幹の古きものは枝を減らし新枝を伸ばさずに花を有たせるやうに仕立ること流行せり。

實生ものでも他の槭樹、落葉松などと違ひ平鉢に植ゑて花を多く有たせ樹形を他の盆栽と同樣に仕立ることは困難なり

惟り伊東巳代治伯秘愛の三代將軍遺愛の梅として傳はれる樹齢約三百年に近き直立老幹の野梅は樹の丈三尺許り樹勢少しも衰えず蒼古愛すべし實に無二の珍種なり。

梅に關する一の逸話を憶ひ出したれば其の概要を述ぶべし、明治二年函館五稜廓の戰敗れ榎本武揚、大島圭介氏等官軍に降服し久しく囹圄の中に呻吟せしが會ま歳首

伊東伯の梅

に方り兼て大鳥氏の恩顧を受けたる商人某一鉢の冬至梅を贈りて獄中の憂悶を慰めたり圭介氏大に喜び日夕愛観措かざりしが、やがて花も謝し米粒大の實を結べるを見て獄窓外に出し獄丁に依頼して怠らず灌水せしめしかば數箇月の後には拇指大の實數十個の葉陰に累々たるを見るに至れり時恰も恩赦出獄の身と爲り此の鉢梅を携へ喜び勇んで出獄せりと同氏の獄中日誌に見ゆ。

牡丹

牡丹の名は古へに無く芍藥の中に入れられ唐代に至り芍藥より分離して牡丹と稱するに至れりと云ふ。又灌木なるより一に木芍藥と呼べり、唐以後盛んに流行せりと見え宋の歐陽修に牡丹記有り姚黄魏紫の名を擧げて花品を評し同時代の周茂叔は牡丹は花の富貴なるものと云はれたり。其の花の豐麗なると葉の柔婉なると相待つて始めて其の美を擅にせるもので百花中品位の高く優美なる點に於ては牡丹の上に出づるもの無るべし。

支那では牡丹は花王と云はるほどなれば其の詩歌も多けれど此には其の中の一二首の載することゝせり。

白牡丹　唐 韋荘

閨中莫妬新粧婦。
陌上須慚傳粉郎。
昨夜月明渾似水。
入門唯覺一庭香。

閨中妬むこと莫れ新粧の婦。
陌上須く慚つべし傳粉郎
昨夜月明にして渾て水に似たり
門に入つて唯覺ゆ一庭の香しきを

雨中看牡丹三首錄一　宋 蘇軾

霧雨不成點。映空疑有無。
時於花上見。的皪走明珠。
秀色洗紅粉。暗香生雪膚。
黃昏更蕭瑟。頭重欲相扶。

霧雨點を成さず。空に映じて有無を疑ふ
時に花上より見れば的皪として明珠を走らす。
秀色紅粉を洗ひ。暗香雪膚に生ず。
黃昏更に蕭瑟。頭重くして相扶んと欲す。

我邦の牡丹は支那より輸入したるものなることは疑ふべくも無いが其年代は詳ならず、又往時名高き花は今は無く現今の新種として優秀なるものを色別にて其の名を擧ぐれば

白色の部　月世界　玉簾　比良の雪　月宮殿　扶桑司　雪笹　白蟠龍

紅色の部　日の出世界　錦の艶　今猩猩　大正光　七福神　新神樂　大内姫　神樂獅子　初日の出　世々の譽

紫黑色の部　黑光司（黑牡丹中の第一品とす）黑龍錦　墨の一　コンロン黑

淡紅色の部　嵐山　麟鳳　養神　キリン錦　寶冠

以上は現今流行せるもの丶中より著名のものを擧げたるに過ぎず支那には正黃色のも

八重牡丹

同鉢植

の多くあれど我邦には少しと見ゆ又彼邦には花の青きものありと云ふ秘傳花鏡に出づるものにても其の種類一百三十二種有り。

繁殖と其の培養

　牡丹は播種にてよく發芽するも普通のものは根株より芽吹したるものを根分するを簡便とす、されど名花は皆接木なれば根分にて得たるものは俗に臺牡丹と呼び凡花とす往時は普通の牡丹苗を砧木として名花を接ぎたるも近年は專ら芍藥の根株を砧木として牡丹を接ぐこと行はれ芍藥の方却つて其の生育も好しと云へり。

　往時は牡丹の接木と云へば名古屋地方と限られしやうに思ひしが近年は新潟縣より接木したるものを盛んに各地方に送り出せり此の砧木は皆芍藥なり牡丹は劈接にて季節は秋の彼岸の頃とす接方は砧木とすべき芍藥は堀起さず其のまゝ置き穗枝を二寸許りの長さに切り元の方左右を少し削りて楔形とし芍藥の根株の中心を割り楔形の穗を挿込み麻又打藁にて之を巻き固く結び穗の見えぬほどに土を被せ雨雪の凌ぎと凍らせぬために其上に瓦鉢を被せ置き來春彼岸の頃瓦鉢と穗の周圍の土とを撤去して施肥す但し下肥は直に用ひぬ方宜し。

　鉢植とするには芍藥を砧木とせるものは根株の小なるにより都合好しと云へり。

　牡丹は寒氣には傷まぬが鉢植は冬季雪霜のかゝらぬ所に置くを宜しとす暑熱に負け易きものなれば夏の土用中は午前だけ日當り好き處に置くべし。

　用土は壌土に沙を少し交せたるよし、肥料は油滓に米糠を混せ水に溶して灌くべし。

　接木のものは砧芽を吹くことあり務めて之を搔取るべし又根株年古りて蟠結すれば幹枝の勢ひ反つて衰え花も小く色も映えぬやうになる、されば斯る古株は一二年前の新根を殘し置き其の他の古根は惜氣なく搔取るべし但し其の季節は落葉後卽ち初冬の頃を宜しとす斯くすれば幹枝の勢力を回復す猶ほ他の塊根又は塊莖類の草花も古き塊莖又塊根を取去れば發育能く花も立派に咲くものである。

　牡丹の移植期は秋の彼岸後より一二箇月の間を宜しとす若し新年一月以後となれば

新花の害となるべし。

庭に植込むものは排水宜しき高廠の地を撰ぶべし肥料は冬期古き人糞に多く水を加へて灌ぐもよし又前に云へる油滓米糠の混和液最も宜し。

牡丹に就いて一二の逸話を左に記す。

明治初年水本元老院議官は本所に邸宅を構へ園中に多く牡丹を植ゑられしが本所は粘土質にて牡丹に適せぬ所より地面を數尺深く掘り其穴へ山の手より運搬せる壤土を入れて植込めりと云ふ。

有栖川宮の邸に出入する園丁某の話に殿下は（熾仁親王殿下）自ら肥桶杓を手にし掃除口（糞尿を汲出す處）を開け下水を汲取り兼て牡丹を植込むべき場處と定め置ける地に灌ぎ給ひしと云へり、高貴の御身にして斯る厭ふべき事をも敢て爲さるゝことは如何に花を愛し給へるかと御熱心のほども推量られて思はず歎聲を洩したり。

明治十三四年の夏の初めと覺ゆ一日麹町區番町小學校の西側の或邸内に盛開せる數百株の牡丹を見付其の美事なるに驚きしが後に知る所の園丁某に其事を話したるに園丁の言に其邸園は故野津大將の牡丹圃なり西南の役大將は聯隊長（當時少將）として奮闘したるも賊軍の勢猖獗にして官軍利有らず君走つて難を民家に遁れしが會ま牡丹の盛開せるを觀て珍賞去るに忍びず園主を呼び分譲を謀りしに園主は君（鎭雄君）が薩音にして軍服を著たるを見て官軍なるか賊軍なるかを知らず依違決せず敢て答ふる所無りしかば君は園主に向ひ予は官軍の將、野津某なり賊軍今や其勢ひ盛んなるも遠からずして鎭靜すべし本年の秋東京に此の牡丹を輸送されよ今より約し置くなりとて手附金として若干を投じて去りしが君の言の如く其歳の秋日薩方面平定し、出征の將士は皆東京に凱旋したり君は約束を履行し百株許り東京に取寄せ邸内に移植したるものなりと語れり當時戰ひ利有らずして聯隊旗の敵手に渡りしを將軍は單身敵中に入り之を奪返したる頗る勇猛の聞え高かりし人なり、且つ敗軍の際牡丹の美しきを觀て勝敗を度外に置き買取を約して悠然立去れる其の襟度の廣き古名將の風有りと謂ふべし、惜い哉將軍は凱旋後幾何ならず肺患に罹り復起たざるに至れり獨り牡丹は年々晩春に至れば艶を競ひ美を鬪はし其の主人を失へるを知らざるものゝ如し、當時を追

想し默過するに忍びず記憶せるまゝを此に附記す。

芍　藥

芍藥は我邦の原産にて山芍藥と稱し白色又稀に淡紅色のもの六月頃開花せるを深山中に見ることあり今庭園に植ゑ又鉢植とするものは其の種類頗る多く花も牡丹と並び稱せらるゝほど立派なり山芍藥の變種又ば支那より輸入せるものも有るべし現今世に名高きものとしては

白色の部　白三階　富士の譽　玉兎　蓬萊宮

紅色の部　美觀　五劍山　豐歲　陽春　錦襴

桃紅又淡紅の部　聖代　日の本　老樂　玉光　金龍

以上は數百種中より色別の代表として擧げたるに過ぎず往時は紅色にて朱の司又白色にて一天四海などは世に知られたるものなれども今は名目の變りしか又種類の絕えしか全く其の名を聞かず。

芍藥

芍藥の繁殖方は播種と根分との二法にして實蒔は初冬の頃熟したる種子を取り乾かして貯置き來春早く蒔付け圃ならば他に移さず其まゝ三年も一つ處にて培養すれば、やがて花の著くを見るべし。

根分は十月頃掘起し大株ならば適宜に分割して直に圃に植出すべし。

牡丹芍藥は長く一つ場所に植ゑ置けば後には漸々に衰えて終に根絕しとなること有り此れは日當りわるく又風透の惡きなどに因るものならんも普通に地に厭ると云ひ酸性の缺乏に原づくこと多しされば三年目位には場所を換へて植替るを宜しとす若し換るべき場所無ければ土を掘取り他より新しき壤土を取寄せ其跡に入替るを宜しとす。

前にも云へる如く牡丹、芍藥は新根を留めて古

く大なる根株は用捨無く除き去るべし但し初冬の頃植替のときに行ふべし。

芍藥の鉢植は初冬十一月頃に鉢に取るものなれど來春新芽長く伸び蕾の豆粒大となりて萎縮し其まゝに終ること有り又蕾の僅に見ゆる頃より萎むことあり十鉢が十鉢皆然りとは云へぬが兎に角鉢植の芍藥は滿足に花を咲かすことは困難のやうである。但し此れは前年の秋鉢に取りたるものに就て云ふことで一年以上の鉢植のものには蕾の萎むことはなきやうなり。

肥料は油滓米糠の混和物を溶解したるものならば何時にても施肥して差支なし下肥ならば冬期汲置きの古きものを稀薄くして冬期又早春根株の周圍に續ぐべし馬糞を牡丹、芍藥の根本に散布したるを見ること往々あり素人考としては至極宜しき方法なり。

盛夏中は牡丹、芍藥共根本に薄く藁を布き旱燥に過ぎぬやうにすべし。

菊

菊は和漢とも古くより世に知られ、禮記月令季秋の條に鞠有黃華と有り、季秋は陰曆の九月にして陽曆の十月に當る。古へ鞠の字を用ひしが後に菊に改めたりと云ふ、禮記は支那の周代に成りし書なれば今を距ること大略二千五六百年前に在り、其後約六百年を經て東漢の應劭風俗通を撰す。其中に次の如き文有り曰く。南陽酈縣有甘谷。谷中水甘美。云其山有大菊。水從山上流下。得其滋液。谷中有三十餘家。不復穿井。悉飮此水。上壽百二三十。中壽百餘。下七八十者。名之大夭。按ずるに菊水は今の河南内郷縣西北五十里に在り、亦菊潭と名づく、水極めて甘芳、飮む者多

壽なりと云ふ。我が承久兵亂記に此の菊水を引用したる條見ゆ。此の文を直譯すれば曰く、南陽酈縣に甘谷有り谷中の水甘美なり云はく其の山に大菊有り水山上より流下し其の滋液を得、谷中に三十餘家有り復井を穿たず悉く此の水を飲む上壽は百二三十中壽は百餘、下壽七八十なる者は之を大夭と名づく。

東晉の陶淵明特に菊を愛したるより淵明の名と共に菊は益す世に著はるゝに至れり淵明の人格と菊花の優雅なるとは能く調和したるを思はしむ、淵明は東晉の末より南宋の初めまで世に在りし人なれば今より千餘年前我邦の允恭天皇の御宇に當れり淵明以後文人騷客の菊を愛するもの特に多く其の吟詠中より左に數首を鈔出す。

菊花　唐　元稹

秋叢園舍似陶家。
遍繞籬邊日漸斜。
不是花中偏愛菊。
此花開盡更無花。

秋叢舍を園んで陶家に似たり
遍く籬邊を繞つて日漸く斜なり
是れ花中偏に菊を愛するのみならず
此の花開き盡せば更に花無し

同　唐　白樂天

一夜新霜著瓦輕。
芭蕉新折敗荷傾。
耐寒唯有東籬菊。
金粟初開曉更淸。

一夜新霜瓦に著て輕し
芭蕉は新に折れ敗荷は傾く
寒に耐へたるは唯東籬の菊有り
金粟初めて開いて曉更に淸し

菊屏　淸　程夢星

低枝芬馥當書幌。
細蘂離披近葦床。
六曲屏風花萬疊。
人間何處五更霜。

低枝芬馥書幌に當つ
細蘂離披として葦床に近し
六曲の屏風花萬疊
人間何れも處にか五更の霜ある

菊屏は其の構造を詳にせざるも菊の枝を折り重ねて屏風に仕立たるものならん。

我邦にて平安朝時代の和歌に菊を詠みしもの頗る多し其の中に

色かはる秋の菊をば一歳に再び香ふ花とこそ見れ

此の和歌の趣意は菊の花盛りの長きを賞し開き初めの花の容と、中頃に瓣に狂ひを生じて變化せるさまとを詠みしもので近世の愛菊家の中にも菊は二度觀る人にして始めて眞の愛菊家と云ふ可きであると云へるに一致せり。

今の世は菊の花を賞する方に專らなるより其のゆかしき香をば忘れられたやうで有るが古人は特に其の清香を愛したりと見え、紀の貫之の歌に

秋の菊香ふ限りはかざしてん花よりさきと知らぬわが身を

又有名な俳人の句に

菊の香や奈良には古き佛たち

奥ゆかしき菊の香を讃美するに奈良の古佛像の古雅なるに喩へたるは奇拔なる思付と云ふべきか。

以上の和歌と俳句は皆菊の清香を吟詠したるもので時流を超脱したること一等高き趣き有るやうに思はる。

菊の種類

開花の時季に因て秋菊、夏菊、寒菊の三種に分ち、又地方に因り肥後菊、伊勢菊、嵯峨菊、奥州菊、美濃菊等の名稱有り、單に菊とし云へば專ら秋の菊を指して云へるものにて夏菊は種類多からず、又寒菊は黃と白との小菊二種に過ぎず、稀に赤色のものあり。

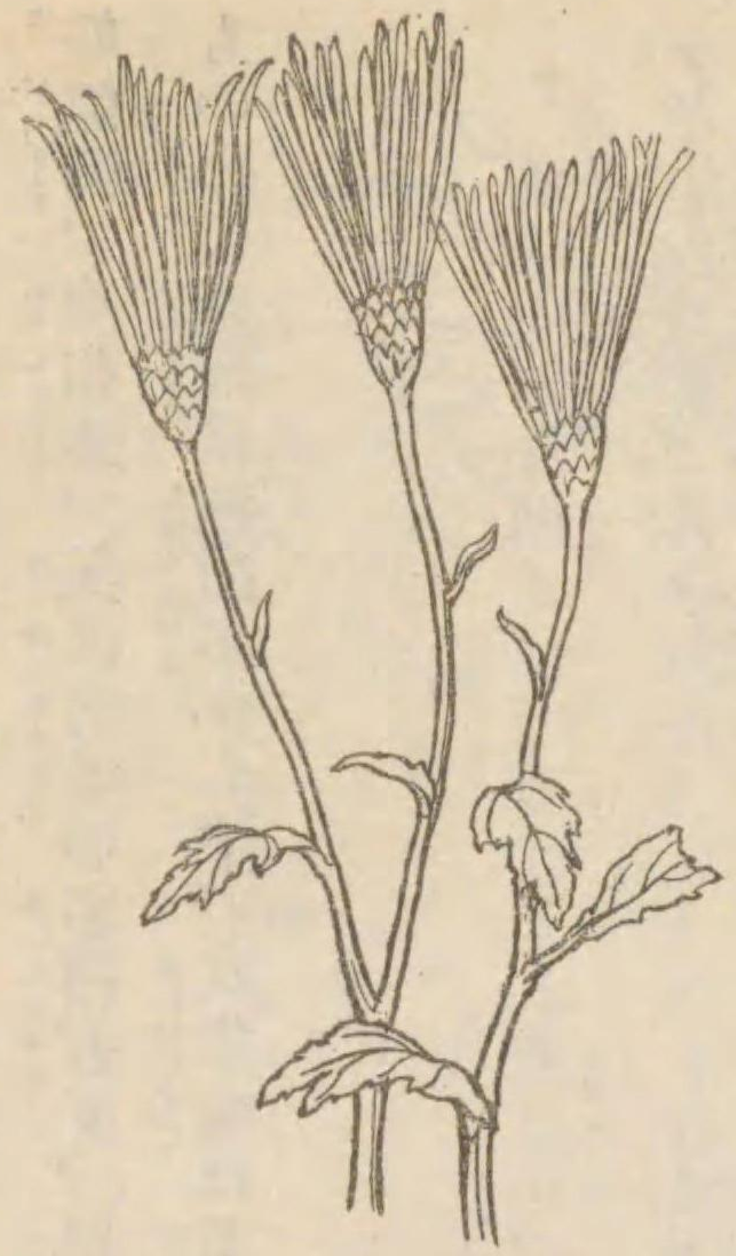
肥後菊黃花

右に擧げたる地方菊の中、肥後菊は今は其の名のみ殘れりと云ひ伊勢菊も小數の數寄者の由て培養せらるゝに過ぎず嵯峨菊も其の地方にては年々減少の傾き有りとは某農學博士の談なり。

猶ほ菊の名稱を冒せるものに藍菊、獻歲菊、（福壽草の雅名）扶桑菊、西番

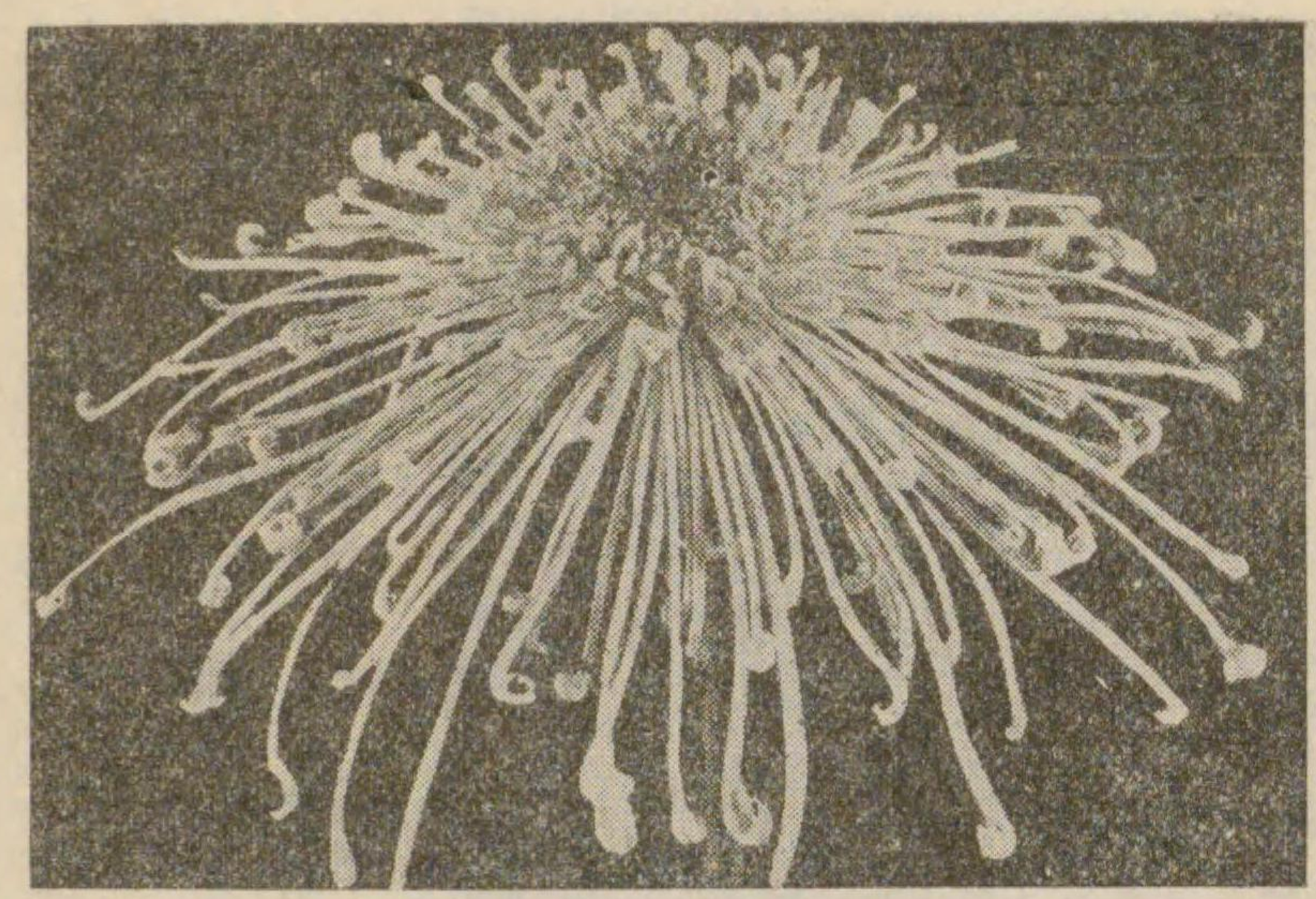
菊等往古より呼び傳へられ、西洋種に雛菊、矢車菊有り何れも其の性質菊とは全く別物なり。

菊は花草中最も古き歴史を有するものなれば、其の種類も頗る多く、秘傳花鏡には色に由て之を分ち黄色五十四品、白色三十二品、紅色四十一品、紫色二十七品、合計二百五十三種とし各其の花名を載せたり、我邦にて明治年間より名花として世に知られたるものの重なるものを擧ぐれば



嵯峨菊白花日本錦

宿の一本(赤)　美玉の王(赤)
飛噴泉(白)細管　八重霞(桃色)厚物
想夫戀(白)太くだ厚もの　太平樂　萩の下露　九十九翁　神女の舞　三笠の雪(白)厚物
濱千鳥白、厚物　野山の月　玉樹後庭花(白)　男山　昇白龍白、太管　黄
金の露(黄)



大菊間管

以上は當時流行したる名花と云はれたものである。

往年大隈侯在世の頃、同邸に開催せる菊花品評會に青森縣八戸町の小井川氏が遠路持參せられたる三種の大輪菊は

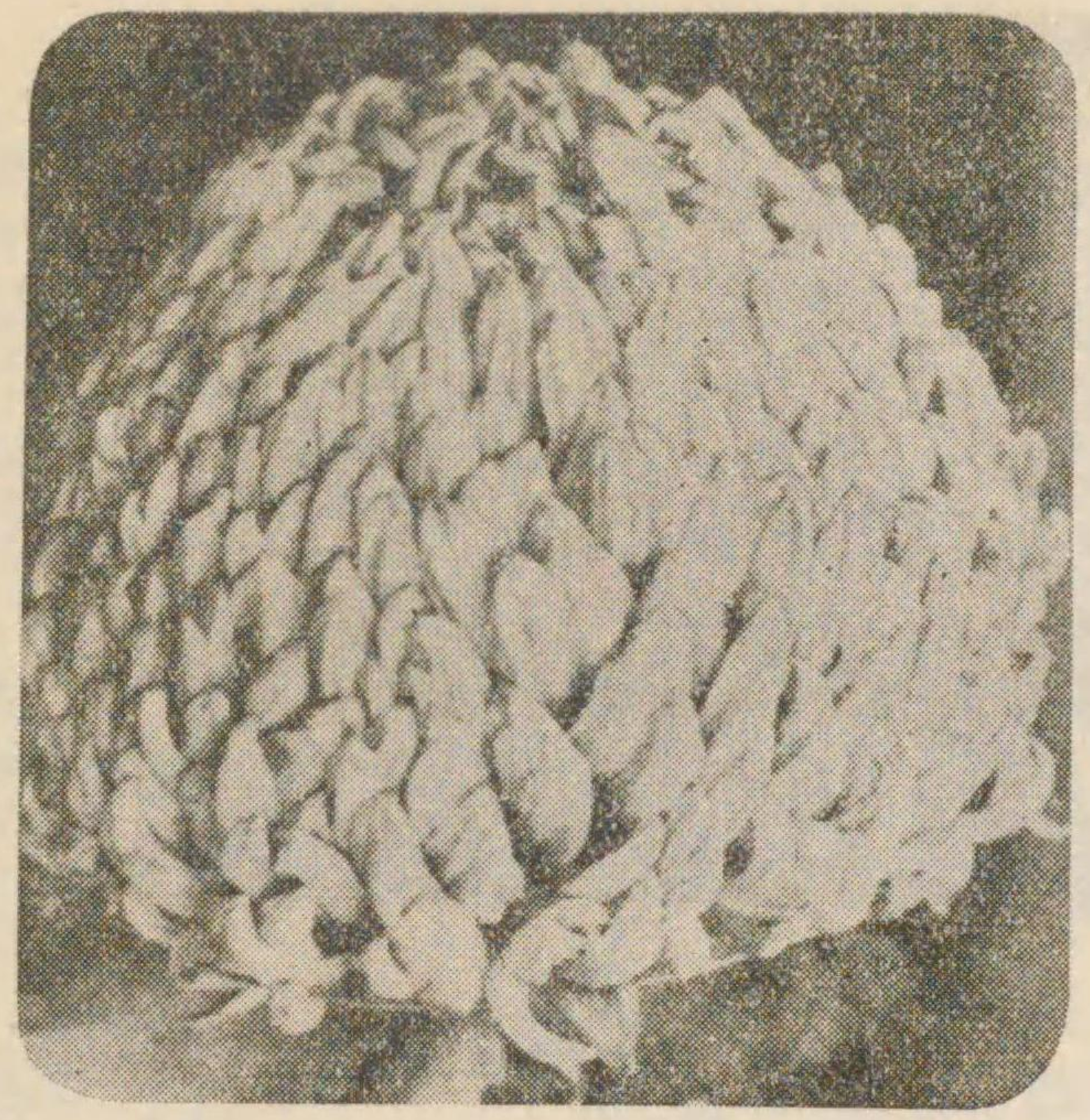
一、一去一來　薄桃色、間管　直徑二尺
二、千代田の雪　白色管の厚物　同一尺五寸餘
三、朝日龍　赤　管の厚物　同

當時八戸町は三千戸内外に過ぎざる小市街なれども一戸も菊を作らぬ家無しと云ふほどの熱心なる愛菊家の多き處なりと云へり。

猶ほ神奈川の西二里都築郡川和村(里俗の通稱)に江戸時代より菊の培養にて世間に知られたる家二軒あり共に中山姓にして一は商店一は農家なり自動車電車の便無き時代に横濱より馬

車を驅りて來觀せる外國人も多かりしとのことなり、現今世に知られたる愛菊家中山恒三郎氏は此の家の相續者なり。

昭和の現今賞美せらるゝ名花を擧ぐれば



大菊厚物

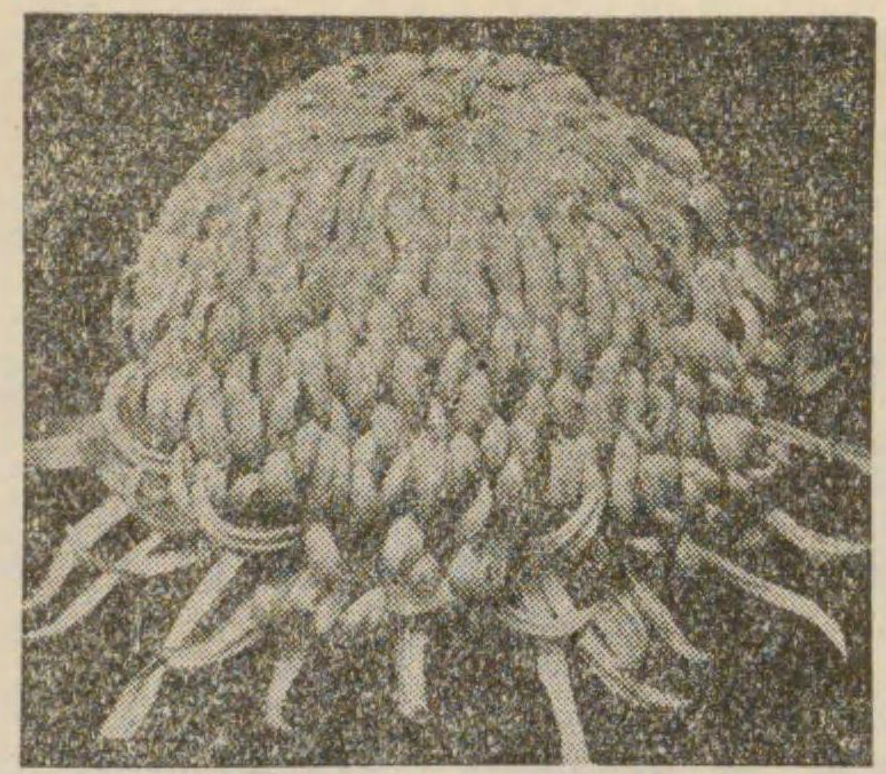
一、四季の綠　黃色、厚物
二、大八千代　桃色、厚物
三、天ヶ原　白色、厚物
四、海王星　黃色、厚物
五、色　襲　桃色、厚物

等なり猶ほ此外に多けれども限りなければ割愛したり。

鑑賞法　往時は菊花の鑑賞法を大略次の如くに定めたり、先づ花の品位有りて優雅なるもの、色彩の鮮明なるもの、花梗長くして强きもの、筒蘂と呼び花瓣の圓きもの、葩と花、全體の形と調和せるもの、以上は花に就ての鑑賞法であるが、猶ほ葉の缺刻深く光澤有るもの、幹の健かにして伸び過ぎざるものも其中に加へられ。開花の期は速からず遲からざるを好しとせり。

菊は開花中、花の盛りの最も長きものにて、其間に花瓣の變化することあり、之を狂ひと云ひ又花の藝とも云ふ專門家は此の變化多きものを特に賞美せり。前にも云へる如く菊は二度觀る人で無ければ眞の愛菊家に非ずと二度とは初め開きし時と、中間に狂ひを生じたる時とを云ふ。

現今は花瓣の性質、組織、形容等に由て通常左の七種に類別せり。

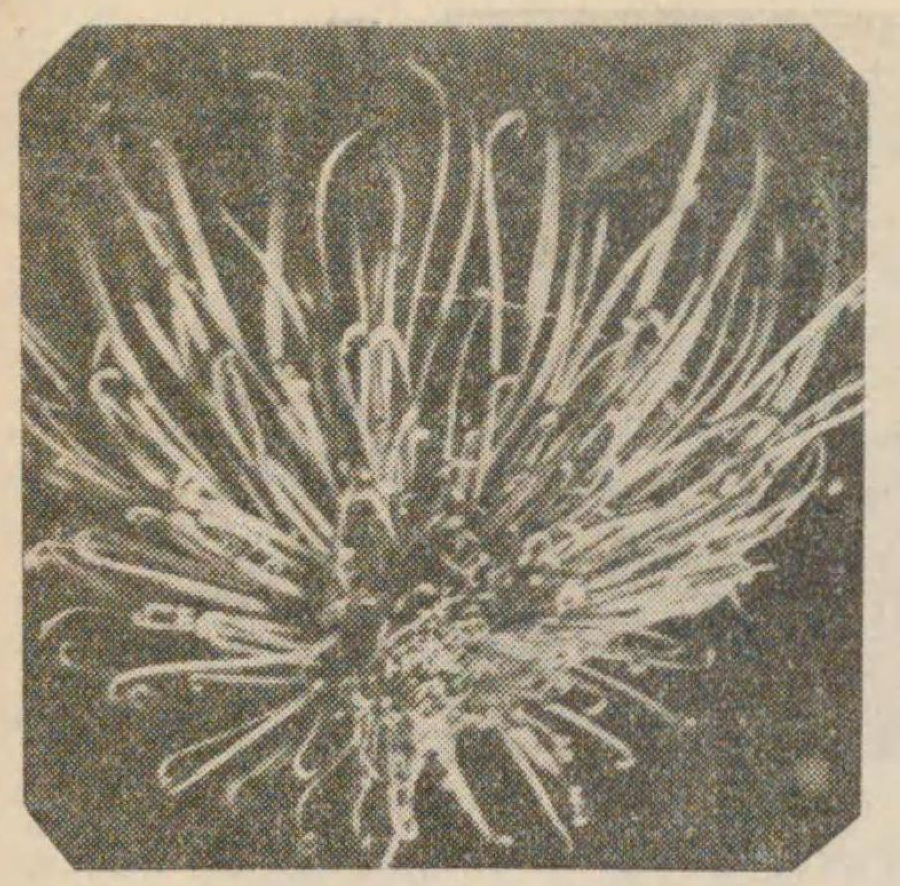


大菊厚物走り

一、厚　物　平瓣の重ねの厚きもの
二、厚　走　厚物に太管の走りを有するもの

三、一文字　　瓣が一文字狀に眞直に伸びて咲くもの
四、太　管　　管瓣と匙瓣とより成り管の太きもの
五、間　管(中管)　管の中間のもの
六、細　管　　管の細きもの
七、針　管　　管の絲の如く極めて細きもの

右七種の中現今最も流行するものは厚物で有る、花輪が雄大で而も瓣が能く組合つて固く緊り花形を崩さず花持甚だ長き特長を有するが故に菊花に對する趣味の上から養菊界に於て最も重要の位置を占むると云はる。大菊中菊に就て品種の大略は既に述べ終りたれば次に最近流行の勢ひ日に増し盛んとなれる小菊に就て述ぶべし。



大菊細管

大菊中菊は流行の絶頂に達し人工を加ふること

適度を超え稍造花的の觀有りと云ふ可きか斯く云へば大菊愛培家の逆鱗に觸るゝこと勿論なるべけれど既に支柱を建てることの自然に反するに加へて臺輪まで添ふるは何となく高尚なる菊花をして俗化せしむるやうに思はるされど支柱無くして幹を支え難く臺輪なければ花首を正しく保つこと能はずと云はるればそれまでなり。

小菊盆栽作り

小菊は花の瀟洒にして何となく高雅の趣き有るは甚だ文人騷客の氣風に協へるを思はしむ、但今日以上に細工を凝らさざることを切に希望す。

小菊は其の種類甚だ多く日本固有の野菊山菊から導かれたものあり或は支那系統の大輪種から導かれたもの等の雜種極めて複雜なものである何れも莖葉共に小く頗る分枝性に富み花を著けることも甚だ多い、普通に小菊を瓣の形容により左の如く類別す。

一、平　瓣
二、管　瓣　管瓣に口の開きたるを筒管といひ閉ぢたるを袋管といふ
三、匙　瓣
四、丁字瓣
五、魚子瓣

又花輪の大さにより大輪、中輪、小輪の區別あり。

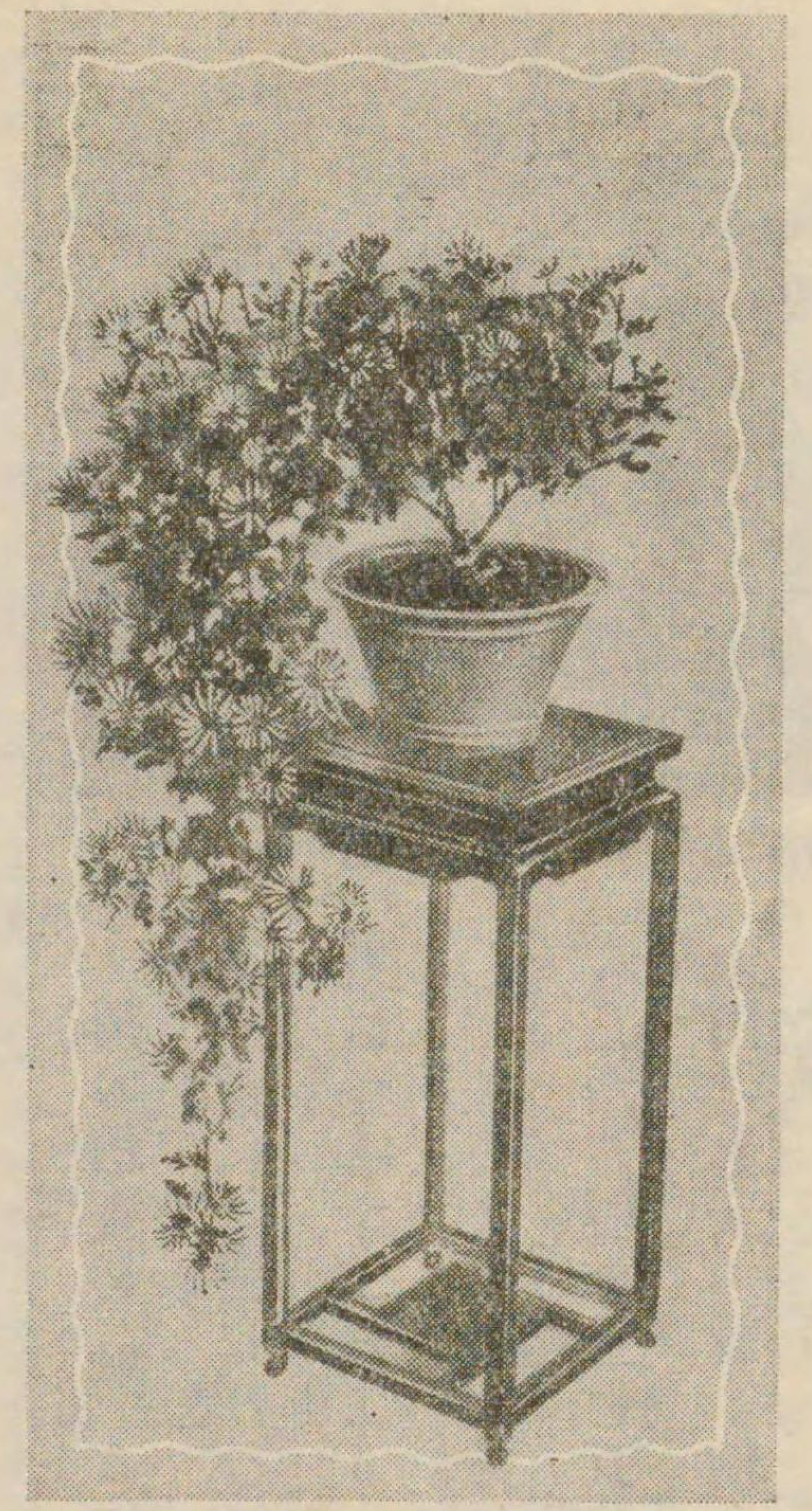
小菊の懸崖作りには大作り中作り小作りの三別あり、大作りは大作用の品種、小作りは小作用の品種と、それぞれ菊の特性に注意せねばならぬ即ち大作用は極めて伸長し易き菊を擇び小作用は伸長せぬ品性を擇ぶのである、其の品種の別を擧れば

大作用　高嶺嵐　北斗座　聖衣　紅鳳　瑞雲　春日野　新大陽
姫紅梅　雪燈籠　夕景色　以上

中作用　玉の星　雲雀山　須磨の浦　高蒔繪　紅小町　醉美人
十三形　猩々　三室山　恩賜の衣　以上

小作用　神花の光　淡路島　都忘　大極殿　靈山　黄玉　神路山　長生の譽　鳴海潟　千代の光

以上は皆小菊の名なり。


小菊懸崖作り

懸崖作りに一定の型有るものに非ず小菊の性狀を熟知し各人各樣思ふまゝに造る可きである前垂式と云ひ正面より見るもの、又斜にして鉢と根幹との一部を現はして盆栽眼に立脚したるもの或は半懸崖又は立ち作り等千態萬狀に造るべきで其の要は人工を超越して完全なる自然美を現出するに在り。

中菊は其の名の如く小菊と大菊の中間であるが幹を短くつめ枝を多く出させる造り